

第2章 文化財の保存・活用に関する方向性

1. 文化財保存活用の取り組みの経緯

(1) 文化財保護基本方針の策定

平成16(2004)年、5町合併による甲賀市が発足し、同年10月、本市に存する文化財の保存及び活用のための必要な措置を定めた「甲賀市文化財保護条例」が施行された。

5町が合併することによって、本市が扱う文化財も多種多様な分野に及び、また広範な地域に分布するようになり、これらを包括的に管理することが求められるようになってきた。

そこで、文化財保護条例を遵守しつつ、本市の文化財保護行政の今後の展開方向について、中長期的な指針を提示することを目的に、平成21(2009)年4月、甲賀市文化財保護基本方針として、次の8つを定めた。その後は、以下の8つの方針に基づき文化財の保存・活用に関する施策・事業を推進している。

① 文化財調査事業の充実と指定の促進
② 文化財保護・管理事業の推進
③ 埋蔵文化財の保護と活用の推進
④ 資料館施設等の充実
⑤ 市史編さん事業の推進
⑥ 文化財を保護する組織体制の充実
⑦ 市民との協働・連携による文化財の保護と活用
⑧ 文化財の活用と歴史資産を活かしたまちづくり

(2) 保存

ア. 文化財指定

市内に存する文化財のうち重要なものについては、甲賀市文化財保護条例に基づき甲賀市文化財保護審議会への諮問を行い、甲賀市指定文化財に指定している。

甲賀市発足後の文化財指定は、国では甲賀郡中惣遺跡群、水口岡山城跡など史跡が3件(内1件は追加指定)、彫刻が誓光寺の木造十一面観音立像 像内納入品 御衣木断片 墨書紙片1件、有形民俗では、甲賀の前挽鋸製造用具1件の指定を受け、建造物で4件の登録を受けた。県では彫刻1件、書跡・典籍・古文書1件、史跡1件のそれぞれ指定を受けた。

市では、石造建造物1件、彫刻6件、工芸品3件、書跡6件、考古資料2件、歴史資料1件、史跡1件、有形民俗1件の指定を行い、無形文化財(信楽焼)では5名の認定を行った。

(平成16年10月1日～平成30年12月31日)

イ. 文化財の保存管理

建造物の保存修理事業では、平成 16（2004）年度から同 18（2006）年度にかけて滋賀県指定文化財の矢川神社楼門の解体修理、平成 27（2015）年から同 28（2016）年にかけて重要文化財の飯道神社本殿の修理、平成 25（2013）年度から同 28（2016）年度にかけて滋賀県指定文化財の檜尾神社本殿の解体修理、平成 30（2018）年度には重要文化財新宮神社表門の屋根修理を実施した。

美術工芸品では、重要文化財の保存修理事業として平成 28（2016）年度に櫛野寺本堂の収蔵庫、同 29（2017）年度に正福寺本堂の改修、防災施設の設置工事を行った。

また、民俗文化財では水口曳山祭の曳山について、曳山保存修理委員会を設置し、専門家の指導を受けながら保存修理を行っている。このほか、史跡の維持管理や建造物の防災修理事業など文化財の管理を行うほか、天然記念物の保護事業を実施している。

（3）調査・研究

ア. 有形文化財

建造物については、滋賀県が実施した近代和風建築調査、近世民家調査、近代化遺産調査などにより市域の建造物の状況を把握したほか、市史編さん事業でも追加調査を実施した。現在、中世社寺 12 件、近世社寺 17 件、民家 13 件、近代 7 件、近代化遺産 9 件、石造建造物 48 件を確認している。



▲古文書の調査

水口藩は江戸時代甲賀郡水口を中心にその周辺を領有した 2 万 5 千石の小藩で、その藩主であった加藤家に伝わる史料群である水口藩加藤家文書の調査を平成 18（2006）年度から同 21（2009）年度にかけて実施した。調査により近世初期から大正時代までの 13,983 点（内近世 3,241 点、近代 9,125 点、その他 1,617 点）にも及ぶ古文書群であることが判明した。史料には豊臣秀吉朱印状や徳川将軍御内書のほか江戸幕府老中奉書、大名からの書状や水口藩の藩政史料などがあり、水口藩や廃藩置県後の動向についても判明してきた。このほか、市史編さん事業の中で市内の古文書の調査が行われており、168 文書群の調査が実施された。

イ. 民俗文化財

甲賀の前挽鋸は、江戸時代中期から製造が始まり、明治時代から昭和初期頃まで水口町貴生川から甲南町にかけての杣川沿いの集落で製造され全国に出荷された特産品で、その製造用具と出荷台帳、帳簿などの総合調査が旧甲南町で実施され、その後、用具の図化やデータ整理を行った。近江甲賀の前挽鋸製造用具及び製品として平成 27（2015）年 3 月に国有形民俗文化財に指定された。

信楽焼製造技術総合調査では、信楽焼の製造技術を明らかにし、文化財として保護すべき民俗技術を記録、継承していくことを目的に、信楽焼製造についての聞き取りや、用具・製品などの調査を平成 29（2017）年度から実施している。

滋賀県の調査では、祭礼行事実態調査、自然神信仰調査、民俗芸能調査、伝統食文化調査を実施

し市内の状況把握を図った。

無形民俗文化財では映像収録として、市内に伝わるケンケト踊り、太鼓踊り、花奪い行事など風流の祭礼行事や水口曳山祭について、各地域での祭礼に関わる準備や練習からの映像収録を行い、伝統行事の保存継承についての記録作成を行った。撮影では休止していた踊りの再現などの協力も得られ、伝統継承への地域の思いも伝えることができた。また、水口曳山祭で演奏される水口囃子は、地域ぐるみで伝承活動が行われており、一時生産が途絶えた水口細工は、研究会による復興活動が続けられるなど、伝統文化継承へ市民の積極的な活動が行われている。

ウ. 埋蔵文化財

信楽町黄瀬・牧・宮町にかけて所在する紫香楽宮跡関連遺跡群は、聖武天皇が造営した宮跡として、大正15(1926)年に礎石が確認されていた信楽町黄瀬・牧地先の丘陵部が国史跡に指定された。その後、昭和40年代に実施された宮町地区の圃場整備工事で出土した柱材の発見を機にその存在が知られ、昭和59(1984)年2月から継続的に実施してきた遺跡の発掘調査により、紫香楽宮の中心建物群などの遺構を確認し、宮町遺跡が紫香楽宮の中心部であることが判明した。平成12(2000)年以降



▲遺跡発掘調査風景(水口岡山城跡)

には新名神高速道路建設工事や団体圃場整備事業、民間開発事業にともなう発掘調査で新宮神社遺跡、鍛冶屋敷遺跡、北黄瀬遺跡などの紫香楽宮に関わる遺構が確認され、平成17(2005)年3月と同22(2010)年8月、同27(2015)年10月に国史跡の追加指定を受け、平成29(2017)年度から同30(2018)年度にかけては東山遺跡の調査を実施しており、遺跡の範囲が拡大するとともに、紫香楽宮の姿が徐々に明らかになってきている。

また、平成23(2011)年3月には「史跡紫香楽宮跡保存管理計画書」を、同26(2014)年3月には「史跡紫香楽宮跡整備活用実施計画」を策定し、史跡の保存整備を図るとともに、活用に向けて地域と連携した取り組みが行われている。

水口町水口に所在する水口岡山城は、天正13(1585)年に豊臣秀吉の家臣中村一氏によって築かれた城であり、五奉行に名を連ねる武将が城主となった豊臣政権の拠点城郭の一つである。平成22(2010)年度からは測量調査が、同24(2012)年度から同27(2015)年度にかけて発掘調査が4次にわたって実施され、多くの瓦が出土し、主郭は石垣づくり、石垣と石塁で囲まれた虎口を持つ城であることがわかった。交通の要衝としての水口を確保する狙いと戦略上の拠点だけでなく、甲賀郡支配の象徴としても機能していたと考えられる。平成29(2017)年2月に国史跡となった。

植遺跡は水口町植に位置する大規模な古墳時代の集落遺跡である。この遺跡は、平成13(2001)年度から同14(2002)年度にかけて実施された周辺の圃場整備に伴う大規模な発掘調査の結果、掘立柱建物17棟を含む多数の遺構が見つかった。それらの遺跡には大型倉庫群や豪族居館、鍛冶工房を含むものも見つかかり、特に古墳時代中期の大型倉庫群跡は、大和政権やその傘下にある有力

豪族層の勢力を示す史料として大々的に取り上げられた。平成 21（2009）年に滋賀県の史跡に指定された。

また、水口盆地では水口町泉^{いづみ}に所在する下川原遺跡^{しもかわら}や北脇遺跡^{きたわき}での調査が行われ、古代から中世にかけての集落跡や公的施設の可能性も考えられる遺構を確認している。

このほか、甲賀市内には多くの中世城館があり、市史編さん事業で市内の城館調査を実施し、180 にのぼる城跡の遺構確認を行った。現在も開発等に伴う遺跡の遺構確認のため市内各地で調査を実施しており、現在の埋蔵文化財包蔵地件数 589 件、調査件数 405 件（平成 17 年～同 30 年 1 月）にのぼっている。

エ. 郷土史の編さん

近代以降滋賀県では修史事業が盛んに行われたが、旧甲賀郡においても大正 15（1926）年に甲賀郡教育会によって刊行された『甲賀郡志』があり、代表的な地域史・地誌として存在するほか戦後の大合併を契機として各町で町史がまとめられており、昭和 32（1957）年に『信楽町史』、同 34（1959）年・35（1960）年に『水口町志』、同 36（1961）年に『土山町史』、同 42（1967）年に『甲南町史』、同 48（1973）年に『甲賀町史』がそれぞれ刊行され、平成改元後も各町でも新町史編さんの動きもみられた。また、旧町の大字の歴史文化をまとめた



▲甲賀市史全 8 巻

大字史の編さんも行われており、現在では自治振興会で地域の歴史遺産を掘り起こし、地図や冊子で紹介する取り組みが行われている。

平成 16（2004）年 10 月の甲賀市発足を契機に甲賀の豊かな歴史文化を市民が共有し、誇りを持てるまちづくりの基礎的な資産として親しみ活用される、データベースを提供することを目的として、『甲賀市史』の編さん事業が平成 17（2005）年から本格的にスタートし、同 19（2007）年 12 月の第 1 巻「古代の甲賀」を皮切りに、通史編 4 冊、分野編 3 冊、甲賀市事典 1 冊の各巻の発行が順次行われ、同 28（2016）年 12 月に最終巻を刊行し全 8 巻を完結した。

甲賀市史編さんでの史資料の調査対象は多岐にわたるが、古文書調査では、既調査文書は 168 文書群、総文書点数は 66,799 点に及ぶ。また、新たに発見された史料や彫刻などもあり、その後の文化財指定につながったものも少なくない。

（4）活用

ア. 講座・講演会等

甲賀市では甲賀の歴史文化に親しむ場として歴史講演会や講座を開催してきた。紫香楽宮跡関係では、地元区や自治振興会などと共催で毎年紫香楽宮に関する講演会を実施しており、平成 30（2018）年度には歌木簡発見から 10 周年として記念講演と万葉衣装の発表会などが開催された。また、水口岡山城跡関連では、平成 25（2013）年度から「水口岡山城フォーラム」



▲古文書教室

として、水口岡山城跡を中心に、中世から近世にかけての城郭や城下町に関する講演会を県内や近

隣地域から講師を招いて開催している。

平成19（2007）年度からは『甲賀市史』の刊行時に記念講演会を開催した。各巻の執筆者を講師に招き、各時代や分野を特徴づける内容とした。また、同25（2013）年度からは歴史講座「あいこうか歴史塾」を開催し、市史に関連した内容をより親しみやすく紹介する機会とした。

このほか、資料館の企画展に関連する講演会や、市民との協働による催しも実施している。

イ. 資料館等施設とその活動

市内の資料館等施設は、甲賀市の歴史や民俗、自然環境、産業関係資料の展示公開している市の施設があり、連携を取りつつ、調査、資料収集・保管および活用を図ってきた。

歴史・民俗関連の施設では、平成26（2014）年に「甲賀市歴史民俗資料館運営指針」を策定し、資料館等施設の施設運営と事業展開についての計画を示し事業を実施してきた。

資料館の事業について、調査では、継続して市内の古文書や祭礼行事、民俗文化財の調査を行うとともに、道標や伊勢型紙の調査、本陣資料調査などを実施している。資料収集では、直営の3館で各館のテーマや地域に合わせ、特徴ある歴史資料や民俗資料を中心に収集を行った。収集資料については、毎年燻蒸^{くんじょう}を行い保存に努めるとともに、展示や体験学習への活用を行っている。

展示では、各資料館・各地域の特長（特性）を活かしたテーマに集約した常設展示を行い、市民にとって魅力あるテーマ、学術的意義のあるテーマを設定し、各館で企画展を開催してきた。また、パネルを作成し、市内施設における巡回展も実施するなど、調査成果の報告や文化財資料の公開を行っている。活用資料としては、東海道ウォーキングマップなどの作成をした。

学校との連携は、学校授業での見学受け入れや、小学校を中心に、民具を活用した昔の暮らしの出前授業の開催、中学校や高等学校の総合学習で郷土の歴史文化に親しむ講座を行っている。また、学校資料室の整理や展示についての協力も行うなど、相互に連携を図っている。

歴史講座や体験講座は、市所蔵の古文書をテキストとした古文書解読の講座や昔のくらし体験教室として、市民団体の協力のもとしめ縄作りや水鉄砲作りなどの体験教室も開催し、歴史文化に親しむとともに世代間交流の機会としている。また、高齢者に向けての活動として、暮らしの道具を中心とした回想法キットを作成し、福祉関係部署と連携した取り組みを進めている。

市民団体との協働では、ふるさと絵屏風の制作に関わり、高齢者の方から聞き取りを行い、地域の暮らしの情報を収集するとともに、地域の方と大学生などの若い世代も参加した取り組みとして世代間交流の場となった。

自然系の資料館であるみなくち子どもの森では、甲賀市の自然をテーマに、里山とふれあえる自然公園や、甲賀の地質などの自然環境、化石・動植物の標本等資料を展示する施設があり、年間を通じて体験教室や観察会を開催するとともに、学校との連携を図っている。

産業に関わる展示施設として、信楽伝統産業会館では信楽焼の歴史や製造技術の紹介、作家による作品展などを開催し、信楽焼の魅力を伝えている。薬業に関する施設であるくすり学習館では、薬業に関わる歴史資料や製造道具の展示をするとともに体験教室を開催するなど、甲賀を代表する産業の紹介を行っている。

また、国登録有形文化財の旧水口図書館では、館内を公開するとともに、イベントを開催するなどの活用を図っている。



▲しめ縄作り教室 (甲南ふれあいの館)



▲小学生対象の出前授業

表 2-1 甲賀市の資料館等施設

施設名	所在地	設立(開館)年	展示内容
水口歴史民俗資料館	水口町水口	昭和 59 (1984) 年	水口祭りの曳山、街道宿場資料、民俗資料
水口城資料館	水口町本丸	平成 3 (1991) 年	水口藩主加藤家及び水口城関係資料
土山歴史民俗資料館	土山町北土山	平成 6 (1994) 年	東海道具山宿、鈴鹿峠、茶業関係資料
東海道伝馬館	土山町北土山	平成 13 (2001) 年	東海道具山宿関係資料、お茶染め体験工房
甲賀歴史民俗資料館	甲賀町油日	昭和 55 (1980) 年	油日神社、薬業、甲賀武士関係資料
甲南ふれあいの館	甲南町葛木	平成 3 (1991) 年	前挽き鋸製造用具、生活用具、民具資料
みなくち子どもの森	水口町北内貴	平成 13 (2001) 年	甲賀の里山とふれあえる自然公園、自然館(甲賀の自然、化石・動植物の標本等資料)
くすり学習館	甲賀町大原中	平成 22 (2010) 年	薬業、配置売薬等の関係資料
信楽伝統産業会館	信楽町長野	平成 16 (2004) 年	信楽焼関係資料、信楽焼

このほか市内には、信楽町に滋賀県立陶芸の森があり、陶芸に関わる作品展示を行う美術館や産業展示館、作家活動が行える施設を備え、陶芸関係の主要展示公開施設となっている。また、世界的な建築家 I.M. ペイ氏による美術館 M I H O M U S E U M があり、日本を代表する文化財の展示公開が行われており、外国からの見学者も多く訪れている。また、忍者に関する展示施設や東海道の本陣など民間の展示公開施設もあり、観光や地域振興などで市や地域と連携した取り組みも行われている。



▲くすり学習館

ウ. 情報発信

甲賀市では、平成17(2005)年4月から、甲賀市の広報紙において「甲賀市の文化財」の連載を開始し、市域の歴史文化について親しみやすい内容で紹介している。市史編さん時には、広報紙で「市史の小径」の連載を行い、市史編さん事業や文化財の調査成果を報告した。

平成18(2006)年3月には甲賀市文化財ガイド『甲賀を繙く』を発刊し、市内の特徴ある歴史文化やすべての指定文化財を紹介している。また文化財パンフレットとして、「天平の都と大仏建立」「国史跡 水口岡山城 東海道を迎える豊臣政権の拠点城郭」「東海道具山宿・水口宿一みち・たび・まち」ほかを作成し、文化財の紹介とともに、史跡や街道などの散策案内を行っている。

市ホームページでは、文化財の調査状況などの報告・市内の社寺や街道・史跡の案内、観光協会では、ホームページで歴史文化や自然・特産などテーマに沿った案内や見学モデルコースを紹介するほか、季節に合わせたイベントの開催やパンフレットの作成を行うなど、甲賀市の豊かな観光資源の情報発信を行っている。

国登録有形文化財建造物である旧水口図書館では、指定管理団体が運営管理を行っており、コンサートや古本市など文化財建造物を活かしたイベント開催やヴォーリス建築にちなんだ情報発信などを行っている。

また、市職員が各地域へ出向き、市民が希望するテーマについて、各業務に関わる内容で担当が話をする出前講座を行っており、歴史文化については「知っとうか、甲賀の歴史あれこれ」と題し、考古や歴史資料、民俗や伝統産業など様々なテーマで講座を行い情報提供するとともに、市民の方々との交流の中で新たな文化財情報を得られることも多い。

エ. 日本遺産の認定

平成29(2017)年4月に「忍びの里 伊賀・甲賀〜リアル忍者を求めて〜」と「きっと恋する六古窯〜日本生まれ日本育ちのやきもの産地〜」が日本遺産のダブル認定を受けた。

忍者では、三重県伊賀市や両市の観光協会と忍びの里伊賀甲賀忍者協議会を発足させ、平成29(2017)年度には、観光施策にかかるマーケティング調査の実施、構成文化財の紹介看板設置、忍者教本作成とホームページの開設を行った。同30(2018)年度には、日本遺産シンポジウム「家康決死の逃避行―影で支えた伊賀・甲賀の忍者たち―」の開催、モニターツアーの実施、ガイド養成講座の開催、構成文化財の紹介看板を設置し、忍びの里として忍者を感じることができるコンテンツに磨きをかけ、観光誘客に向けた事業を行った。

六古窯では、越前(福井県越前町)・瀬戸(愛知県瀬戸市)・常滑(愛知県常滑市)・信楽・丹波(兵庫県丹波篠山市)・備前(岡山県備前市)の各自治体で六古窯日本遺産活用協議会を発足し、平成29(2017)年度にホームページの開設、各産地の紹介看板の設置、同30(2018)年度には六古窯教本の作成、同29(2017)年度・30(2018)年度でタブロイド紙の発行、各産地の作品を紹介する巡回展を開催した。焼物の産地間で様々な事業を行うことにより、若手作家の交流や、産地の歴史や文化などを再認識することができ、信楽焼のあらたな



▲忍者イメージ

側面を発掘し紹介することができた。

オ. 市民の活動と意識

本市では、地域の歴史文化の研究や顕彰を行い、郷土への理解を深め、次世代へと引き継いでいく活動を続けている。水口町郷土史会、甲賀町郷土史会、甲南地域史研究会、信楽町郷土史会、紫香楽宮址保存会、甲賀忍術研究会の郷土史会等があり、調査研究の実施や講演会・研究発表会の開催、会誌の発行などの活動を行っている。また、甲賀市郷土史連絡協議会を設立し、各団体の連携を図っている。

東海道関連では、水口宿をよくする会や土山の町並みを愛する会による案内板設置などの街道関連事業が実施されているほか、歴史文化を愛好する団体や歴史文化を活かしたまちづくりに取り組む市民活動団体等による多彩な活動が行われており、市と協働した取り組みも行われている（表2-2 参照）。

表 2-2 歴史文化を活かした市民の主な活動状況

【歴史文化を活用した市民協働事業提案制度実施事業の例】

実施年度順

団体名	活動の概要
今郷好日会	<ul style="list-style-type: none"> 東海道沿いに連なる今郷地域では、地元に残る史跡地の調査掘り起しを行い、説明看板や街道散策用の案内看板、東海道一里塚跡休憩所を整備した。 ふるさと絵図の制作を行い、地域のなつかしい風景や史跡を描き、地域の住民の交流を図った。
一般社団法人 水口岡山城の会	<ul style="list-style-type: none"> 国史跡水口岡山城跡を活用した取り組みを実施。バルーンによる模擬天守閣を設置し、よみがえれ水口岡山城のイベントを開催している。 市との協働事業により、歴史フォーラムを共催し魅力発信を図る。 水口かんぴょうなど特産品に関わる子ども向けの体験教室の開催。
山内エコクラブ	<ul style="list-style-type: none"> 土山町山内地域を中心に、自然環境や伝統文化の調査を行うとともに、山内地域6区のふるさと絵屏風の制作を行った。絵屏風の制作では大学生など若い世代も参加し、高齢者との世代間交流も生まれた。 記憶文化財を活用した地域博物館プロジェクトでは、市との協働により、学校や高齢者サロンなどで絵屏風や民具を利用した講座を実施している。
飯道山観光協会	<ul style="list-style-type: none"> 飯道山・庚申山・岩尾山を活用して地域振興や観光振興につなげる、「飯道山を軸とした歴史と文化のブランド化事業」を実施。ホームページ開設、観光パンフレット作成、ハイキングコースの案内標識・登山道の整備等を実施。
紫香楽宮観光 振興プロジェクト 実行委員会	<ul style="list-style-type: none"> 史跡紫香楽宮跡を活用し、地域振興・観光誘客につなげる取り組みを実施。LEDのイルミネーションなどによる“あかり”で史跡をPRする「紫香楽宮都あかり」イベントを開催。
東海道浪漫歩行 実行委員会	<ul style="list-style-type: none"> 地域と連携して取り組む東海道のぎわい再生プロジェクト。東海道浪漫歩行を中心に、地域と連携した東海道の賑わい再生を目指すイベントを開催。

地域では、自治振興会などを中心とし、地域資源の調査事業、地域の歴史や文化財をまとめた冊子やパンフレット・マップの作成、地域の歴史文化を学ぶ探訪事業などを実施し、歴史文化を活かしたまちづくりが行われている。

【歴史文化を活用した地域課題解決のための提案型モデル事業の例】

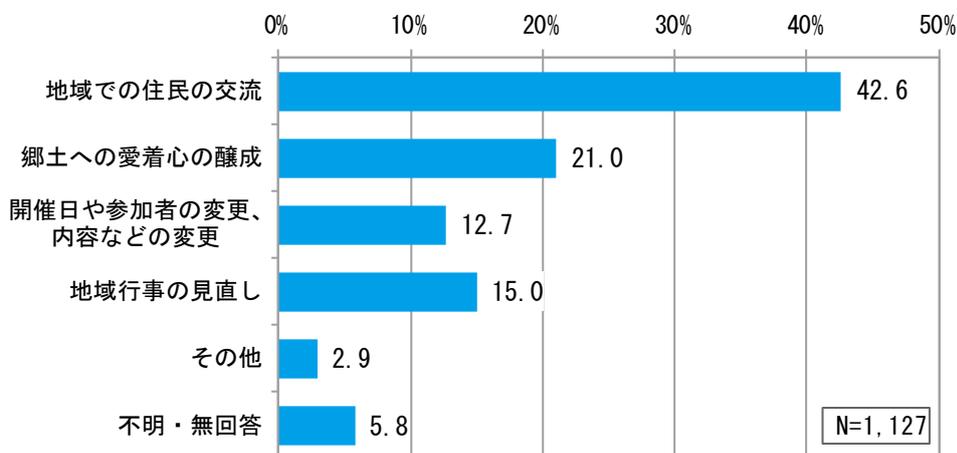
実施年度順

宮地区自治振興会	<p>「宮のお宝再発見事業・宮の歴史文化調査保存事業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の歴史的な資産のデータベース化と映像記録の作成を行い、後世に伝えるとともに、今後の事業への活用を図る。
岩上自治振興会	<p>「岩上名所づくり・名所再発見事業 岩上名所再発見・名所整備事業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・失われつつある地域の「名所」を復活させることで、地域の憩いの場を形成し、地域住民の郷土愛を育み、次の世代に受け継ぐ。 ・岩上公園の整備・環境ウォーク開催・旧東海道沿道整備事業等の実施。
羽ばたけ鮎河自治振興会	<p>「桜海によみがえる鮎河の城」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・城跡を整備することにより地域観光資源となり、「咲くや鮎河さくらまつり」などの地域イベント開催時に地域散策コースを構築するとともにボランティアガイドの育成を行う。 ・城跡整備、案内看板の設置、桜の植樹、城跡講習会・現地見学会の開催。
みなくち自治振興会	<p>「古城山に学び、親しむ事業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のシンボルでもある古城山の整備を進め、自然・環境・歴史の学習の場として、またウォーキングなどの健康づくり、ふれあいや憩いの場として活用できるようにする。 ・樹木名板の設置、案内看板等の設置、歴史プレートの設置、除草、雑木の伐採、樹木や草花名の学習会、歴史学習会、古城山ウォーク開催。
みなくち自治振興会	<p>「東海道水口宿盛り上げ事業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿場町を意識したイベントなどにより、「伝統と文化を大切にし、人が交流するまち」、「訪れた人がまた来たいと思ってもらえるまち」を実現する。 ・東海道水口宿盛り上げのための検討会、オブジェ試作品作成、各種イベントの開催。
土山学区自治振興会	<p>「土山宿の活性化事業（古民家活用と町並み保全）」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・土山宿の空き家・空き店舗を活用した、にぎわい再生、土山宿の町並み保全を目指す。 ・空き家を活かした土山宿のまちづくり検討会議開催、土山宿場まつりにて取り組み紹介と参加呼びかけをPR。
雲井自治振興会	<p>「史跡紫香楽宮跡を活用してのまちづくり事業」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国史跡紫香楽宮跡を活用した取り組みを実施。 ・産学官民連携による地域活性のあり方が模索されており、ワークショップの開催や新しい地域特産品の創出や古代衣装の作成など各種取り組みを住民主体で実施している。
多羅尾自治振興会	<p>「多羅尾の歴史を活かしたまちづくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の代表的な史跡である多羅尾代官陣屋跡を整備し、一般公開を行い、他地域からの観光客を受け入れ、地域の活性化につなげている。 ・牡丹の植栽、多羅尾代官陣屋城跡公開イベント、清掃・草刈り、歴史ボランティア育成研修会、調査など。

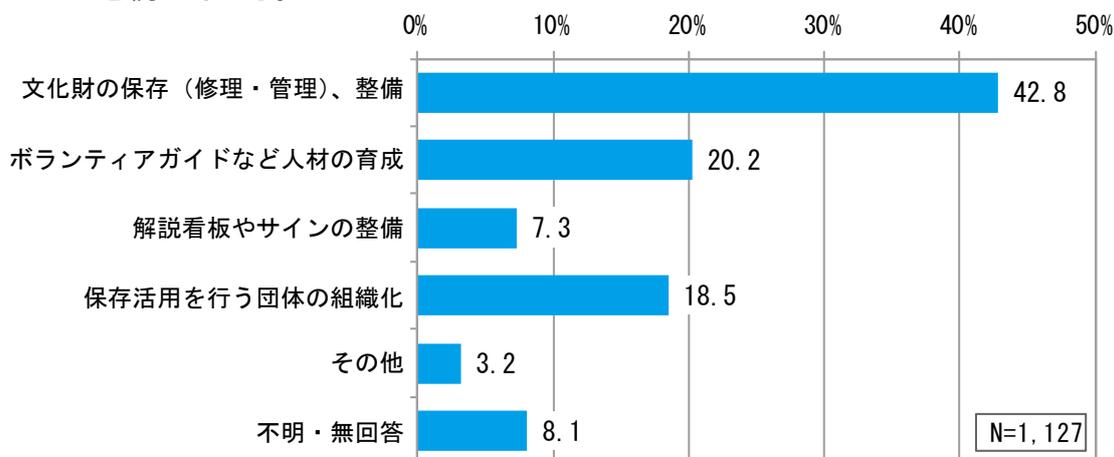
【市民の意識調査】

平成30（2018）年度に実施した市民意識調査では、以下の回答が得られた。

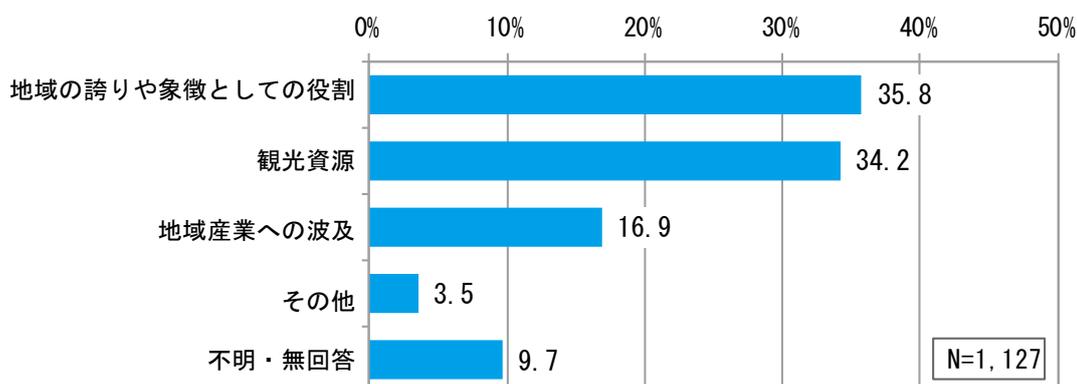
○伝統行事を継承していくために大切なことは、「地域での住民の交流」が42.6%で最も多く、「郷土への愛着心の醸成」が21.0%、「地域行事の見直し」が15.0%と続いている。



○地域資源として文化財を活用するために必要なことは、「文化財の保存（修理・管理）、整備」が42.8%で最も多く、「ボランティアガイドなど人材の育成」が20.2%、「保存活用を行う団体の組織化」が18.5%と続いている。



○地域資源として文化財に期待することは、「地域の誇りや象徴としての役割」が35.8%で最も多く、次いで「観光資源」が34.2%、「地域産業への波及」が16.9%となっている。



文化財を地域の誇りや象徴とし、観光等活用を図るために、保存・整備やボランティアガイドなど人材の育成が必要とする回答が多かった。また、伝統行事の継承には、地域での住民の交流が大切であるとする意見とともに、地域行事の見直しという意見もあり、継承への課題や方向性を確認することができた。

歴史講演会などの参加者に行ったアンケート調査では、大切に思う文化財の保存・活用の取り組み実施への希望について尋ねたところ、「地域主体で行っている史跡や文化財の保存・維持活動への支援」(59.0%)、「史跡を巡るイベント、地域の祭りや年中行事等を通じた住民の交流促進などコミュニティ活性化につながる取り組み」(55.0%)が5割を超えた。



▲ふるさと絵屏風の作成風景（山内エコクラブが主催）



▲水口岡山城の会によるイベント「よみがえれ水口岡山城」



▲自治振興会による地域の歴史を紹介する冊子の作成



▲文化財を活かしたイベントの開催「あいの土山斎王群行」

カ. 観光ガイド

市内には各地域にボランティアガイドの団体があり、史跡や街道、社寺などさまざまな場所で本市の魅力を伝えている。各団体ではガイドに必要な冊子の作成や研修会を開催し、充実したガイドを目指し活動している。また、甲賀市観光ボランティア連絡協議会を組織し、市域の観光ボランティアガイドの交流を図っている。

2. 文化財の保存・活用に関する課題

第2章1項で述べた文化財の保存・活用の取り組み状況からは、次のような課題が考えられる。

(1) 文化財の保存に関わる課題

ア. 文化財の把握

- ・埋蔵文化財や歴史資料、民俗文化財の分野では、文化財指定や記録保存など一定の成果をあげているが、それ以外の分野では詳細な調査が実施できておらず、調査分野に偏りがみられ、また、水口・土山・甲賀・甲南・信楽の各地域で指定している文化財の点数と種別にも偏りがあることが課題である。これらを是正していくためには、未調査分野を中心に基礎的な文化財調査を継続的に実施していくことが必要であり、さらに今後は、文化財とその周辺環境を含めた歴史的町並みや文化的景観についての面的な把握も課題となっている。
- ・地域で大切に守り伝えられてきた祭礼や伝統行事、石造文化財や歴史的建造物などについては、近年の生活環境の変化の中で保存継承が困難となり、失われたものも少なくない。このような地域の文化的資源については、その実態など十分な把握ができていない。また、調査の実施にあたっては、調査対象の増加により専門家や職員だけでは十分な対応ができないため、市民参加による調査を検討することが課題となっている。
- ・各種文化財調査の成果については、市民が地域の文化財に対する理解を深め、一層身近に感じてもらうために、わかりやすい形で公開していくことも課題である。

イ. 文化財の保存整備

- ・これまでは、指定文化財を中心にした保存・活用が重視され、文化財相互の関係や周辺環境との関係が十分に考慮されてこなかったため、貴重な地域の文化財が失われる場合もある。こうした状況を防ぐために、文化財を群として把握するとともにその周辺環境の状況を把握した上で、文化財の活用を視野に入れ、文化財群と景観など周辺環境を一体的に保存・整備していくことが課題である。また、国史跡紫香楽宮跡・国史跡水口岡山城跡をはじめとする史跡の整備については、保存活用計画などをもとに、保存整備の計画的な実施が必要となっている。

ウ. 文化財の保存修理

- ・多様な文化財を適切に保護し後世に継承していくためには、実態調査を行い、文化財が作られた当時の状況を明らかにし、文化財的価値を損ねることのないよう適切に修理していく必要がある。将来にわたり、文化財を良好な状態で維持していくためには、継続的な修理、伝統的な技術の継承が求められており、保存技術者の育成や材料の確保、必要な支援制度の創設などが課題となっている。

エ. 文化財の防災・防犯

- ・近年、台風や豪雨、地震などの自然災害が多発し、文化財への影響が懸念されるとともに、漏電や不審火などによる火災の発生、不審者の侵入による文化財の毀損や盗難の恐れなどがある。指定文化財だけでなく、地域の大切な文化財をこうした被害から守っていくために、市の地域防災計画に準拠した文化財防災対応マニュアルの作成や地域ぐるみの防災・防犯活動を行い、地域住民の危機管理意識の高揚を図るなど、地域の防災・防犯体制を強化していくことが課題となっている。

オ. 地域社会における文化財の保存・継承

- ・生活環境の変化や少子高齢化などによる地域コミュニティの希薄化により、伝統ある地域構造が変貌していく中で、地域の要となっていた文化財が喪失または変容し、今まで地域が担ってきた祭礼や伝統行事は、継承者の養成が図れずに存続の危機にあるものも少なくない。こうした状況を解決していくためには、市民一人ひとりの文化財保護意識を醸成するとともに地域への愛着や誇りを形成し、地域ぐるみで伝統文化や文化財を継承する担い手づくりへとつないでいくための普及・啓発的な取り組みの検討が課題となっている。
- ・一方、地域で管理してきた神社や寺院などの文化財については、所有者の負担が過重となり、修理や管理ができない状況もみられる。こうした状況に歯止めをかけていくことが喫緊の課題となっているが、行政だけで十分に対応していくことは困難であることから、各地域が主体となって地域の文化財を保存継承していくための取り組みの検討が課題となっている。

(2) 文化財の活用に関わる課題

ア. 文化財の総合的な活用

- ・地域に所在する文化財は、それ単独で存在するものではなく、地域の歴史的風土の中で形づくられ、また受け継がれてきたものである。しかしこれまでは、指定文化財の限定的な活用のみにとどまっていたことから、今後は、歴史文化の特徴を表すテーマやストーリーの設定、文化財が集積するとともに具体的な歴史文化の物語を展開できるエリアを設定するなど、甲賀の歴史的風土を活かしつつ総合的に文化財の保存・活用に取り組み、文化財の魅力に一層磨きをかけることが求められている。また、文化創造・まちづくりのための地域遺産として、文化財を活用していくことも課題となっている。

イ. 学校との連携

- ・地域で大切に守り伝えてきた歴史や文化は、地域への誇りや愛着心を育み、世代間交流を促す大切な資産である。郷土の歴史文化を学ぶ場をつくり、こうした地域の資産を、次代を担う子どもたちへ継承していくことが必要であるため、学校教育との連携を深め、歴史文化を学ぶ機会の提供が課題となっている。

ウ. 文化財の魅力発信

- ・多くの文化財を有するにも関わらず、それらを展示公開する施設整備や観光利用に耐えうる空間整備、またその魅力を伝える情報発信に関する取り組みが十分ではなかった。今後は、拠点整備や観光ルートの設定、イベント開催などを通じて、甲賀市の豊かな歴史文化の魅力を効果的に発信していくことが課題である。
- ・現在、観光ボランティアガイドをはじめとした地域の人々が、甲賀市の魅力を伝える活動をしている。地域の歴史文化の魅力を語り伝えるこうした人材をさらに育成するとともに、活動する場づくりや活動領域を広げていくことも課題となっている。

エ. 多分野間の連携

- ・文化財は先人の長い生活風土の中で大切に守られてきたものである。こうした甲賀市内に豊富に残る文化財を見学するために、市内外から多くの観光客が訪れ、その魅力に触れている。また、古代の宮都や城下町、東海道の宿場町などの歴史的な町並み、村落の中に佇む社寺など、市内随所に歴史的な景観が残っている。これらの歴史的価値を損なうことなく、十分な保護管理を行ったうえで、多様な文化財を有効に活用していくため、観光振興や産業振興、地域振興、都市計画、健康福祉など多分野が連携し、横断的に施策を構築することが課題となっている。

オ. 拠点づくり

- ・資料館設置当初は、各館のテーマに基づき、各地域を代表する貴重な資料を収集・展示し、地域住民の協力を得ながら、研究活動や情報発信、普及活動を展開してきた。合併後の甲賀市という広い範囲での館運営と、文化財担当職員が本庁に集約されていることから、円滑に資料館を運営していくために、組織などの管理体制の見直しが課題となっている。
- ・各館は設置から長い年月を経ており、時代が移り変わる中、利用者のニーズも多様化し、従来の資料陳列型の展示だけでなく、様々な手法による魅力発信が求められている。また、近年は地域における歴史学習の拠点としての役割や地域の活性化への貢献を期待されており、施設の再編計画の中で、資料館の位置づけや施設整備の検討が課題となっている。
- ・収集資料については、保存管理についての改善が求められており、今後は、資料を適切に保存管理する機能、学校等との連携、市民協働といった体制づくりを視野に入れ、地域の文化財活用の中核的な施設としてのあり方についての検討が課題となってくる。

(3) 推進体制に関わる課題

ア. 地域と行政の役割分担

- ・文化財の保存、文化創造・まちづくりとしての文化財の活用を進めていくにあたり、それを「誰が」「どのようにして」進めていくのか役割を明確にしていくことが重要である。
- ・文化財の保存・活用の取り組みへの住民の主体的・積極的な参加が、まちづくりにつながり、地域づくり活動として定着することでよりよいまちづくりにつながることから、この点でも文化財の保存・活用における地域・住民と行政の関係も考えていかなければならない。
- ・これまで文化財の保存と活用は、どちらかという行政が中心となり、実質的な取り組みを行ってきた。今後、まちづくりとしての文化財の保存・活用を進めていくにあたり、行政だけではなく、文化財所有者や地域の人々が中心となることが大切であり、地域での人材づくり・組織づくり、多様な組織活動の創出が課題となってくる。
- ・行政は地域と協働する、あるいは地域の取り組みを支援するなど、多様な関係のもとに体制を構築し、文化財の保存・活用を進めていくことが課題となってくる。

イ. 文化財の保存・活用の組織体制の充実

- ・文化財行政に従事しつつ、地域と協働して文化財の保存・活用を進めるためには、現状の組織体制は十分ではないことから、十分な専門職員の配置や資質の向上が課題となっている。

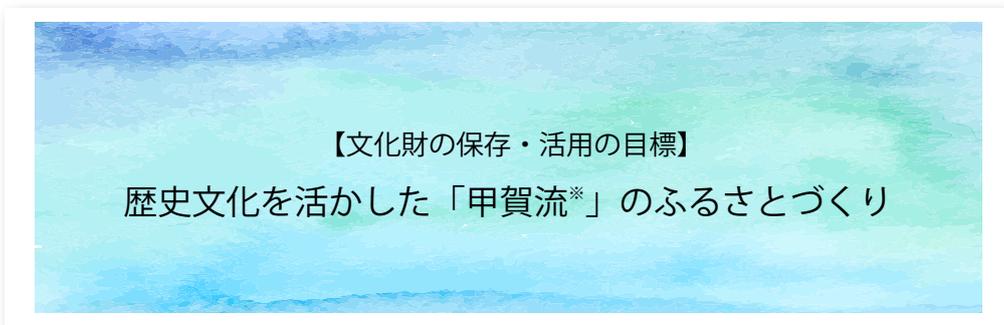
3. 文化財の保存・活用に関する方針

(1) 文化財の保存・活用の目標

「甲賀らしさ」、「甲賀の特色」、「甲賀の歴史文化の豊かさ」は、甲賀の豊富で多彩な文化財によって表わされる。甲賀市の未来のまちづくりにおいて、豊かな歴史文化に市民が親しみ、共有することで、ふるさと意識や郷土愛が醸成されていく。この意味で、文化財は地域の宝である。この宝は、広い意味でのまちづくりに活用されてその価値を高めることができる。

市総合計画の施策方針である「文化財の調査と保護が行われ、魅力発信と地域振興に活かされている」を実現していくために、文化財は未来の甲賀市にとって何ものにも変えがたい貴重な地域資源、地域の宝として未来に向けて保存・継承していくとともに、まちづくりの資源として、地域の人々によって世代をこえて活用されていくことで、その価値を一層高めていくことができる。

そこで、甲賀の特徴ある歴史文化を活かした、甲賀らしい文化財の保存・活用を図ることを、まちづくりに資するための目標とする。



(2) 文化財の保存・活用の基本方針

方針1 先人の遺した文化財を次世代に継承する ―知る・守る・伝える―

次世代に継承していく有形・無形の文化財は、その「モノ」や「カタチ」などの表面的な要素だけではなく、その由緒・由来はどのようなものであるか、地域にとっての価値は何であるか、先人がいかにそれらを形づくり、守り、受け継いできたのか、という文化財にまつわる物語も含めた総合的な要素で成り立っている。「文化財を次世代に継承する」とは、こうした文化財に関する要素をできるだけ多く次世代に継承していくことを意味している。またその大前提として、多くの文化財を安全かつ確実に継承していくために、火災や盗難、自然災害などから文化財を守る、防災・防犯の視点も加える必要がある。

こうした取り組みによって、はじめて文化財は地域のものとしての価値や保存する意味が理解され、文化財が継承され、さらには地域づくりに活用されていく可能性を広げていくことができる。したがって本計画では、文化財の「保存」を、「保存を基盤とした継承作業につながるもの」ととらえ、「保存活動＝（より総合的な）継承活動」として取り組み、事業を推進していくものとする。

保存活動（また同時に継承活動）の第一歩は、文化財を「知る」ことから始まる。続いて、知った文化財を「守る」活動、そして次世代へと「伝える」活動へとつながっていく。最終的にはこれら3つの活動を相互に連携させ、総合的に取り組むことで、文化財の保存・活用が図られることになる。

※「甲賀流」とは、甲賀市総合計画に定義される「甲賀らしい」「甲賀ならではの」を意味する。

また、各段階での取り組みは、住民と行政が役割分担し、両者が協働のもとで進めていくことが重要である。

【文化財を「知る」「守る」「伝える」活動について】

「知る」ことは、文化財に関する様々な情報（物語）を総合的に知ることである。このためには、従来の行政的な文化財調査に加えて、地域住民が協働で調査をすることなどが大切である。また地域住民の調査の視点は、行政による調査の枠をこえて、文化財の範囲を幅広く捉え、「地域の宝」としての文化財を大切にしていける。あるいはその文化財の物語を住民独自の視点で記録する（例：50年前のその遺跡の状態など）など、文化財に関わる物語をより豊かなものにしていくこともできる。

こうした視点をもてば、文化財の保存管理や防災など文化財を「守る」活動が地域主体で行われることにつながり、文化財を「伝える」ための「理解・学習」活動もより豊かなものとなる。さらに、まちづくりに文化財を活用していく際にも、その視野と可能性が広がる。

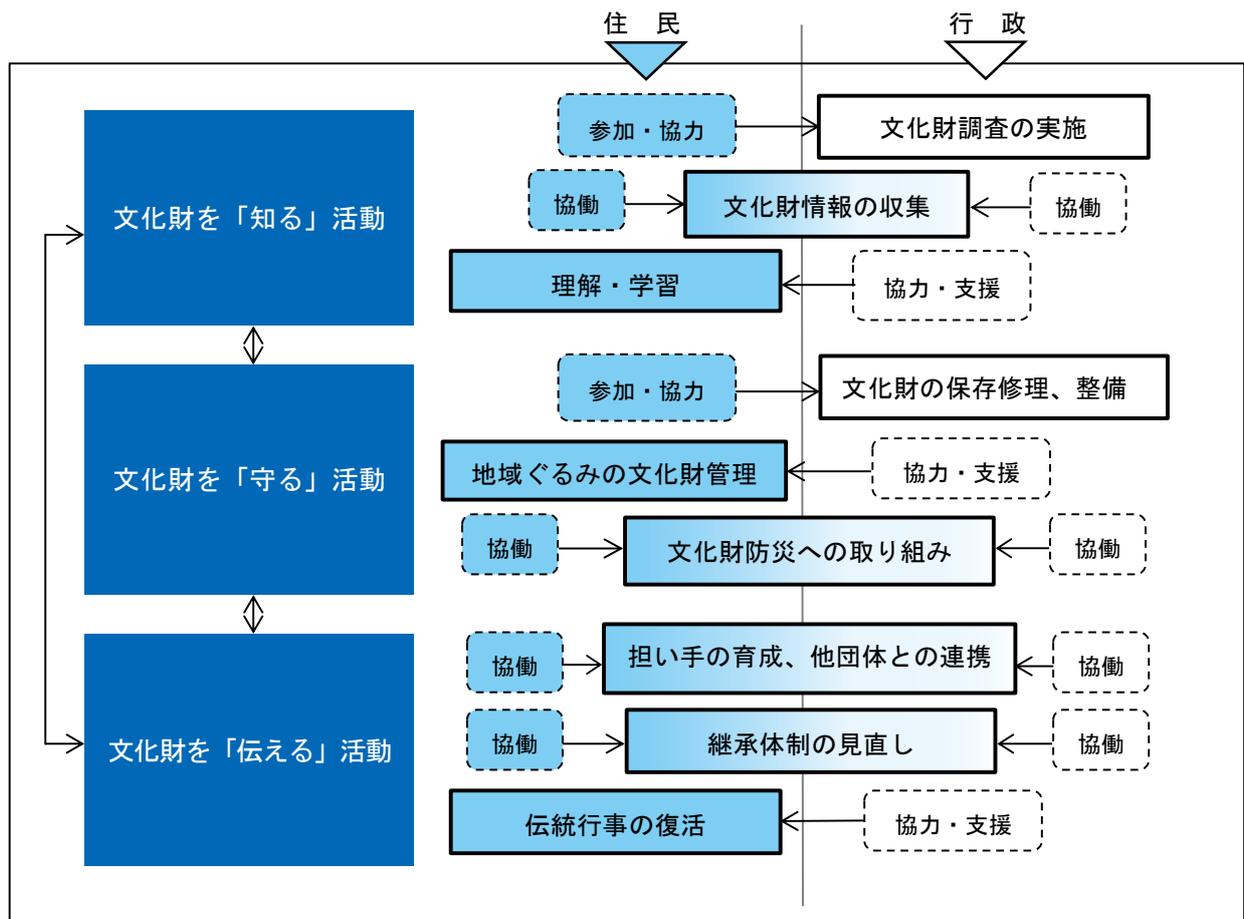


図2-1 文化財の保存・継承活動の枠組み

方針2 地域の歴史文化をまちづくりに活かす ーみがく・活かすー

文化財は、地域の歴史・文化を未来へつないでいくことで、地域づくりや、地域の文化創造の資源として活用していくことができる。これは文化財を保存・活用しようとする視点から出てくる考え方である。

一方、地域社会は、そこに暮らす人々にとって、生活や人生の基盤である。先人から受け継いだ文化財をそのような基盤づくりの資源として活かすことは、そこに暮らす人々にとって大切なことである。地域の人々による文化財を活かした地域づくりを支援するのが行政の役目である。地域の人々と行政が一体となった取り組みが「まちづくり」である。そこに文化財を活用することで、「文化財をまちづくりに活用する」ということができる。これは地域に暮らす人々の視点から出てくる考え方である。

「まちづくり」は、町並みの整備、景観整備、文化施設整備、サインの整備といったハード面の事業だけではなく、歴史マップ作り、史跡ガイド事業など、生涯学習として市民が楽しんで取り組めるようなソフト面の事業も含む幅広い活動である。

さらに、地域の人たちがまちづくりに活かす文化財は、地域の外の人たちにとっても魅力的な資源となりえる。このような地域の文化財を、多角的な視点で活用し、地域を越えて発信することにより、観光や産業振興などの資源として広くまちづくりに活用していくこともできる。

文化財保護行政の枠をこえて、観光、産業、地域振興、都市計画、健康福祉など、広く政策横断的に文化財の活用に取り組むとともに、行政と地域の役割分担については、多様な枠組みを設定する。

【文化財を活用するメリット】

文化財をまちづくりに活用していくことは、文化財の保存・活用のメリットであり、同時にまちづくりにもメリットが生じる。前者は、「文化財の保存・活用の視点でのまちづくり」であり、まちづくりと連動させつつ文化財の保存と活用を行う。この場合は、まちづくりは「手段」で、文化財の保存・活用が主たる「目的」となる。一方「文化財を活用したまちづくり」では、まちづくりの推進に文化財を活用する。この場合は、文化財の保存・活用は「手段」、まちづくりが「目的」となる。

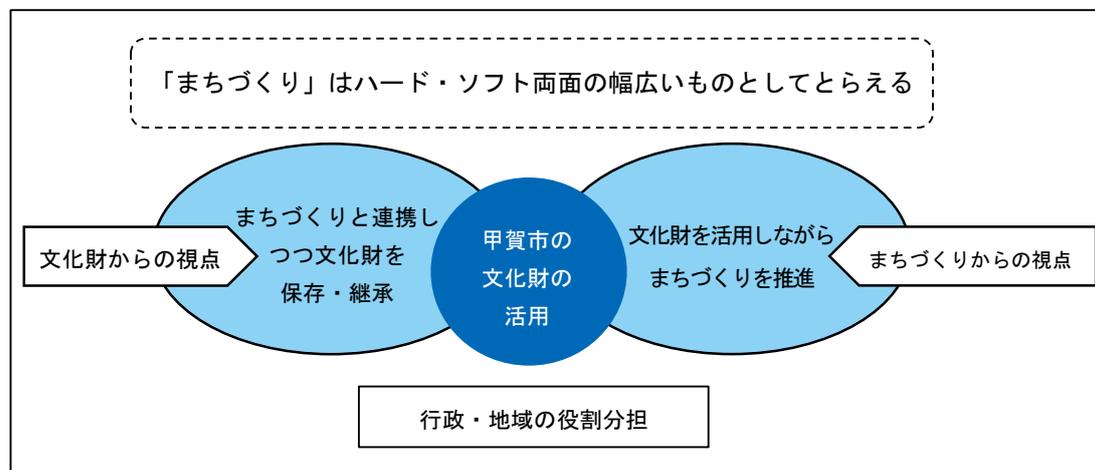


図2-2 文化財活用の枠組み

方針3 地域の活動を重視し、行政との連携を図る 一つなく・結ぶ

保存・活用の主体及び体制は、これまで以上に地域を重視し、地域と行政の2主体の協働体制を築いていく。

また文化財の保存・活用をまちづくりにつなぐために、地域コミュニティレベルでの課題への対応と、市レベルでの課題への対応との二つのレベルがある。

第一のレベルである地域コミュニティを文化財の保存・活用活動の「基点」として、甲賀市での取り組みを進める。甲賀市では、地域特性を踏まえ、新しいコミュニティ組織である「自治振興会」を創設し地域住民の自主的なまちづくりを平成23（2011）年度からスタートさせているが、このことと連携しつつ取り組みを進めることができる。

適切に文化財行政に取り組むとともに、地域と協働した文化財の保存・活用を円滑に取り組むため、十分な専門職員の確保と専門的な資質向上に努める。

【文化財をまちづくりに活用するメリット】

地域を重視するのは、主に二つの意味で地域が重要だと考えるからである。

一つは、前述のように、文化財の保存・活用の「直接の現場」、つまり文化財の保存・活用の直接の担い手は地域だからである。また文化財を保存・活用したまちづくりの推進も、住民参加が前提であり、さらに住民・地域が主体となることでよりよいまちづくりにつながるからである。このような協働関係を前提にした体制づくりを進める。

もう一つは、甲賀市の地域の文化財と地域との関係から導かれる理由である。甲賀市は、その歴史的背景から、地域を構成する一つひとつまとまりをもつ複数の地域から成り立っているという特徴がある。そして各地域にはそれぞれ個性（地域性）がある。

さらにこうした各地域は、歴史的にはいろいろな起源をもつさらに小さなコミュニティで構成されている。例えば、甲賀全体に広がる仏教文化や祭りなども、実際にはこうしたコミュニティの集合体で、全体的には共通性があり、個々にはそれぞれ特徴がある。

こうしたことから、文化財の保存活用は、地域コミュニティレベルで取り組むべきものと、甲賀全体で取り組むべきものがある。

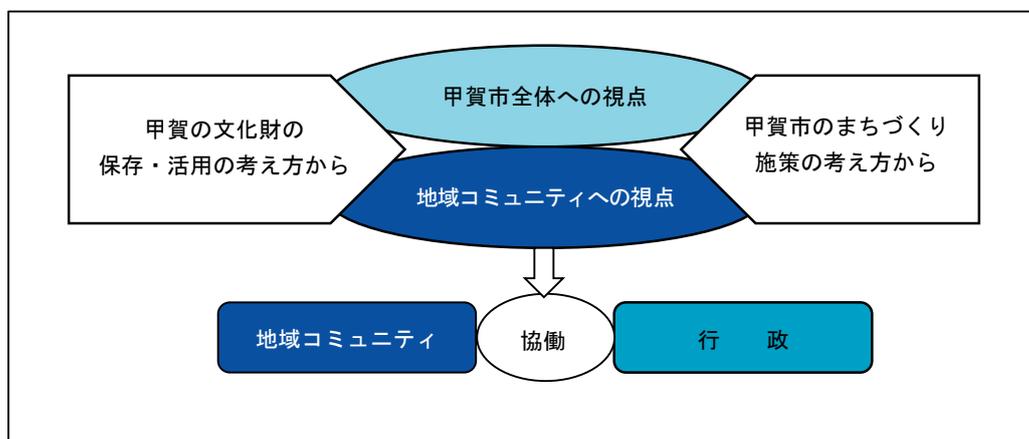


図2-3 文化財活用の主体・体制の枠組み

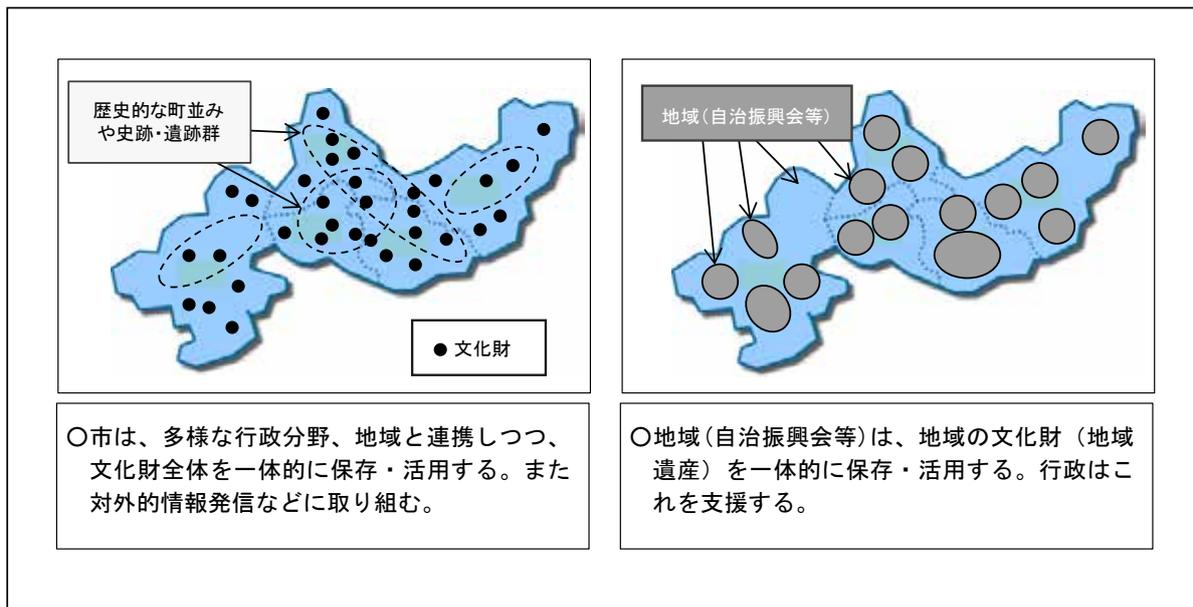


図2-4 まちづくりの展開と役割分担イメージ

表 2-3 甲賀市の自治振興会の概要

【甲賀市の自治振興会】

自治振興会は、当該地域の区及び自治会をはじめ、各種団体、NPO、企業等の参加により組織化され、地域の関係団体等が連携・協力し、区及び自治会だけでは解決できない広域的課題の対応や、地域の特性を活かしたまちづくりを進めるための組織。

自治振興会は、自らが取り組む活動方針や内容などを定めた地域づくり計画を策定し、地域が目指す将来像を描き、多くの人に関心と愛着を持って特色ある地域をつくっていくことを目指している。

【甲賀市の自治振興会(25団体)】 ※掲載順は設立年による

(1) 岩上自治振興会	(14) 羽ばたけ鮎河自治振興会
(2) 山内自治振興会	(15) 土山学区自治振興会
(3) ばんたに自治振興会	(16) 佐山学区自治振興会
(4) 綾野自治振興会	(17) 朝宮自治振興会
(5) 大野地域自治振興会	(18) かしわざ自治振興会
(6) 小原自治振興会	(19) 大原自治振興会
(7) 信楽学区自治振興会(神山・江田分会)	(20) 貴生川地域自治振興会
(8) 宮地区自治振興会	(21) 甲南中部自治振興会
(9) 多羅尾学区自治振興会	(22) 信楽学区自治振興会(長野分会)
(10) 信楽学区自治振興会(田代・畑分会)	(23) 甲南第一自治振興会
(11) みなくち自治振興会	(24) 希望ヶ丘学区まちづくり協議会
(12) 雲井自治振興会	(25) 南杣自治振興会
(13) 油日自治振興会	

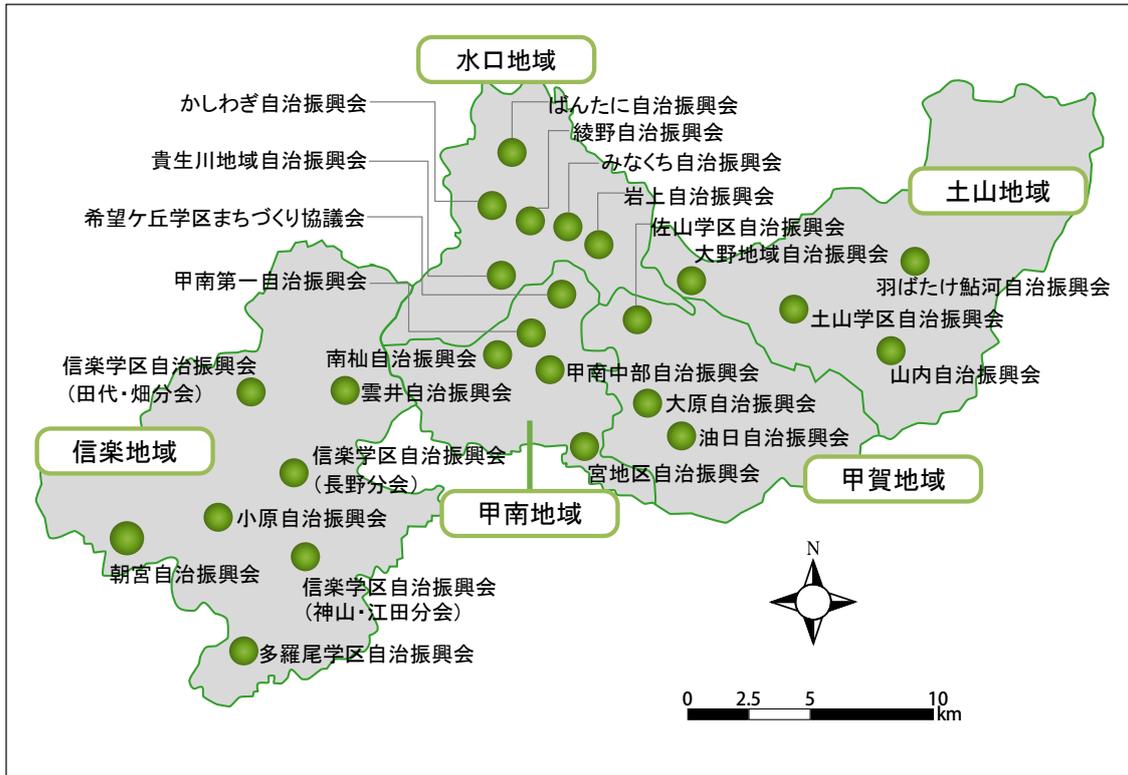


図2-5 自治振興会の分布状況

(3) 文化財の保存・活用の取り組み

3つの基本方針のもと、次のような取り組みを推進する。

ア. 保存活動に関連する取り組み

—「方針1 先人の残した文化財を次世代に継承する」の実現に向けて

◆文化財の総合的把握とその成果の公開

文化財の次世代への継承に向けて重要となるのが、文化財の総合的把握である。そのため、文化財の継続的・基礎的な調査の実施と、成果の公開に取り組む。各分野において実態を知るために、文化財及びその周辺環境までを対象にした詳細な調査を計画的に実施し、それぞれの価値を把握していく。

調査にあたっては、専門家や研究機関による学術調査を実施するとともに、市民参加による地域文化財の掘り起こしを行い、文化財をより身近に感じ、価値を再認識することで保存継承につなげていく。また、調査の成果の公開にあたっては、展示や講演会など歴史文化への興味を深められるような内容とし、市民への普及啓発や世代間交流に重点をおいて取り組むこととする。

◆計画的で周辺環境と一体的な文化財の保存・整備

文化財の総合的な把握により確認された歴史・学術上貴重な文化財については、文化財指定を行い、保護の措置を講じるように努めていく。市指定文化財については、文化財保護審議会へ諮問を行い、審議を受けて答申されるが、指定基準を明確にし、国、県基準に準じ、学術的水準を保つとともに、歴史・文化的な特徴を示す文化財を指定対象として取り上げるよう努めていく。また、文化財の登録制度についても積極的に活用していく。

文化財を適切に保護し後世に継承していくためには、日ごろから保護管理意識を高め、文化財に注意を払うことが大切である。修理が必要な場合には、実態調査を行い、その当時の状況を明らかにし、文化財的価値を損ねることなく保存修理を行う。こうした適切な保存を継続し、文化財を後世に継承していくよう努める。

有形文化財の保存については、必要に応じて「保存活用計画」を作成する。建造物については、周辺地域一帯の良好な環境づくりを含めた保存を検討していく。また、美術工芸品については、課題となっている未調査分野の総合的把握調査を行うとともに、良好な保存環境と管理体制を維持できるように関係者への周知徹底に努めるとともに、適切な保存修理を実施していく。

史跡の保存管理については、適切な管理と活用を図るための基本方針を定めた「保存活用計画」の作成が必要である。地域区分の設定や現状変更の取り扱いについて定めるとともに、文化財と周辺環境とが調和した一体的な保存活用計画となるよう留意する。また、その計画をもとに整備活用に関する構想・計画を立案し、計画に即した整備活用事業を実施していく。

史跡整備にあたっては、地域住民の理解と協力が必要であり、史跡整備が、史跡の保存とともに地域の活性化につながるような取り組みを推進していく。

民俗文化財については、伝統芸能や行事の伝承活動を行うための担い手育成の支援や保存団体の交流を図っていく。また、有形民俗資料の収集・保管を進め、適切な保存修理を行うとともに、修理技術や材料及び道具などの継承活動への支援を行う。

技術継承（後継者育成）については、商工・観光分野と連携し、技術の調査・記録化を推進するとともに、民俗技術としての保護及び後継者育成の体制を整えていく。

表 2-4 各分野の調査・保存管理方針

分野	調査方針	保存管理方針
有形文化財 建造物	<ul style="list-style-type: none"> ・建造物の実態調査を実施し、市内の建造物の種別や年代、構造などを把握する。 ・建造物の詳細調査については、専門家による調査を実施する。 ・伝統的家屋などについては、専門家の調査やヘリテージマネージャーによる調査を実施し、景観との一体的な保存を検討していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財指定の促進と国登録文化財制度の活用。 ・修理に用いる技術や材料、構造形式などは、文化財の本質的価値の検討ならびに必要なに応じて類似する文化財との比較検討を実施した上で決定し、従前の形態意匠を踏襲した質の高い修理を実施する。 ・既に修理が行われた文化財についても、必要に応じて構造形式や材料についての再検証や適切な工法の再検討を実施する。 ・建造物の耐震診断の実施や、防災施設の整備を行い、地域や各機関が連携した防災対策を行う。 ・甲賀市景観計画を踏まえ、歴史的景観の保全を検討していく。
有形文化財 美術工芸品*	<ul style="list-style-type: none"> ・絵画、書跡の総合的把握調査の実施し、リスト化を進める。 ・彫刻、工芸品は総合的把握調査によるリストから専門家による調査を実施し、指定や保存活動を行う。 ・古文書や歴史資料の継続的な調査を行う。特に、甲賀武士や修験、街道や生業など甲賀の特徴ある資料については、専門家の指導を受け、詳細調査を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査成果に基づく指定の促進。 ・日常的な状況把握を行い適切な保存管理を行うとともに、修理が必要な場合は、実態調査を行い、材質や構造形式、技法を検討し、適切な保存修理を行う。 ・収蔵庫の建設、防火防犯設備の設置などにより不慮の事故から文化財の滅失を防ぐよう努める。
無形文化財	<ul style="list-style-type: none"> ・信楽焼技術保持者への聞き取りや映像記録などの記録保存を行い、技術の伝承に向けた調査を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・無形文化財の指定と技術保持者の認定の促進。 ・認定については、今後、認定基準を検討した上で、認定の方向性を検討する。 ・伝統技術としての保護及び後継者育成の体制整備。
有形民俗 文化財	<ul style="list-style-type: none"> ・祭礼や伝統行事にかかる有形民俗文化財についての構造や材料、使用状況などの現状把握調査を実施する。 ・甲賀市の特徴ある民俗的風習や暮らし、生業などについて、用具や関連資料を収集して調査を実施し、記録保存を図る。 ・伝統産業の用具や関連資料の収集を行い、伝統産業の歴史や技術についての調査を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査成果に基づく指定の促進。 ・保存団体等と修理の必要箇所を検証し、用いる技術や材料、構造形式などは、委員会などで専門家の指導を受けた上で決定し、従前の形態意匠を踏襲した質の高い修復を実施する。 ・収集した用具や資料は適切に整理保管するとともに、行事の伝承や技術の継承への活用を図っていく。
無形民俗 文化財	<ul style="list-style-type: none"> ・祭礼や伝統行事の現況把握。 ・祭礼や行事にかかる踊りや演奏、作法についての調査と記録保存の実施。 ・伝統産業の技術の調査と記録保存を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査成果に基づく指定の促進。 ・担い手育成のための伝承活動や、存続にかかる用具の修復等を推進する。

分野	調査方針	保存管理方針
記念物	<ul style="list-style-type: none"> 記念物（遺跡、名勝地、動物、植物、地質鉱物等）の実態調査の促進。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査成果に基づく指定の促進。 専門家の指導を受けながら保存措置を図る。
埋蔵文化財	<ul style="list-style-type: none"> 開発などとの調整を図る調査の実施。 重要遺跡の内容把握のための調査の実施。 市内の遺跡の保護にかかる調査の実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 開発などとの調和を図った保存の検討。 発掘調査を実施し、遺跡の詳細な情報を把握する。 必要な場合は、記録保存を図る。
未指定文化財 (地域文化遺産)	<ul style="list-style-type: none"> 地域で受け継がれてきた歴史や文化の新たな価値の発見やこれまでに知られていない文化財の発掘を推進する。 市民などの参画と協働のもと、専門家や大学・研究機関等と連携した専門的な調査（文化財の指定等の候補の抽出や文化財的・学術的価値の評価など）を実施し、調査結果については、講演会や出前講座などで地域住民に公開していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 甲賀市の文化財の特徴を踏まえ、各地域の文化や風土の中で伝えられてきた文化財の特徴や価値を明らかにするとともに、その保存や活用の措置を検討していく。

※美術工芸品：【絵画・彫刻・工芸品・書跡・典籍・古文書・考古資料・歴史資料等】

◆文化財の防災・防犯体制の強化

近年、台風や豪雨、地震などの自然災害が多発し、文化財への影響が懸念されるとともに、火災による甚大な被害も生じている。また、文化財の盗難や故意に汚損するような事件も発生している。大切に守り伝えられてきた文化財をこうした被害から守っていくために、「甲賀市地域防災計画」に準拠した文化財防災対応マニュアルの作成や地域ぐるみで文化財の防災・防犯を担える仕組みづくりのため次のような方針を示す。

○平時の取り組み

ア 防災対策

市域での過去の自然災害については、昭和28（1953）年8月に起こった多羅尾大水害がある。豪雨による山津波が発生し、多羅尾地域全体に甚大な被害をおよぼした。近年では、平成25（2013）年9月の豪雨被害があり、河川の氾濫による浸水や、土砂崩れが多く発生した。市域には、風化によるもろい花こう岩地帯があり、豪雨による土砂崩れなどの被害の要因となっている。

過去のこうした経験から、文化財を自然災害から守っていくためには、日常の管理や準備を十分に行うこと、計画的な防災対策を行うこと、災害発生に適切に対応できるような体制づくりを行うことが必要であり、以下の取り組みを推進していく。

- 甲賀市防災マップによる、土砂災害警戒区域や河川浸水想定区域などの情報をもとに、文化財の防災マップを作成するなど、文化財所有者と地域住民、行政がその情報を共有し、地域の自主防災活動と連携した取り組みの推進を図る。
- 地震対策では、建造物を中心に、専門家による耐震診断の受診を促し、耐震化の必要な

ものについては、支援を含めた対策を検討する。

- ・文化財及びその周辺の状況確認を定期的に行い、周辺環境の整理整頓や排水路の清掃などの管理を行うとともに、早期の小修理実施などにより文化財の健全性を確保していく。
- ・文化財リストを活用し、文化財所有者、地域住民、消防署や警察、行政が相互に連携して、防災・防犯への対策を行うとともに、災害時での文化財の救助活動、避難場所確保のための連携、復旧活動への展開、復元のための調査情報の蓄積等について、役割分担などを検討していく。
- ・災害発生時の文化財保管施設として、資料館等収蔵施設の連携した取り組みを構築する。
- ・地域防災計画への文化財防災の事項を反映していく。

イ 防火対策

防火対策では、文化財及び周辺での火災の危険性をなくすことが重要であり、日常の管理で火気の取り扱いに十分に注意すること、防災設備の整備などの対策を行うことが大切である。文化庁により定められた「国宝・重要文化財（建造物）の防火対策ガイドライン」（令和元〈2019〉年9月）及び「世界遺産・国宝等における防火対策5か年計画」（令和元〈2019〉年12月）に示された対策をもとに、以下の取り組みを推進していく。

- ・防火対策ガイドラインを活用した点検を行い、文化財の火災リスクや必要な措置を確認し、早急な防火対策を講じる。
- ・指定文化財について、自動火災報知設備や消火設備の設置を進めるとともに、設備の日常的な管理と定期的な点検、訓練の実施を行う。設備の設置については、関係部署との調整を図り、計画的な設置を目指す。また、立地などの問題で、従来の設備の設置が困難な文化財については、必要な設備や所有者（管理者）の維持管理方法など、国や県、専門家等と協議を行い、個々の文化財にあった効果的な整備を行っていく。
- ・文化財防火デーを中心に、市危機管理課ならびに消防署等と連携し、地域の文化財についての見回りを行うとともに、地域住民や消防団が参加しての防火訓練を実施し、通報から文化財の避難、消火活動までを行い、非常時の対応についての知識を習得し、地域の文化財への防災意識を高める。
- ・文化庁により定められた「国宝・重要文化財（美術工芸品）を保管する博物館等の防火対策ガイドライン」（令和元〈2019〉年9月）に基づき点検を行い、設備の老朽化の課題や、訓練の実施などを確認しており、今後の防火対策に取り組んでいく。

ウ 防犯対策

防犯対策では、地域文化財の情報収集と蓄積を行い常に最新の情報を把握することに努めるとともに、指定文化財の防犯設備の充実を促進していく。また、被害情報などは文化財所有者や地域住民へ周知し、文化財リストの情報共有をするなど警察署との連携を図り、地域での防犯パトロールを行うなど、地域ぐるみで防犯対策を実施していく。

○災害発生時の対応

- ア 火災発生時には、消防署などへの通報や消火設備による初期消火活動を行う。また、被災状況を確認し、関係機関への報告を行う。
- イ 災害発生時に文化財が被災した場合には、その状況を速やかに把握し、関係機関へ報告するとともに、文化財管理者や関係機関と連携し、状況に応じた応急措置を行う。
- ウ 応急措置については、文化財管理者や関係機関と協議しながら、移設可能な文化財を一時的に安全な場所に保管するなど適切な措置を行う。また、速やかな復旧活動へつながるよう文化財管理者や関係機関と連携した取り組みを行う。
- エ 文化財の被災状況調査については、各分野の専門家の意見を反映するなど、文化財が適切に保護されるよう努める。



▲防火訓練の様子

◆地域で文化財を継承する人づくり、体制づくり

文化財調査の成果や甲賀市の歴史文化について講演会や講座、展覧会などを開催し、地域で大切に守り伝えてきた歴史や文化をあらためて知る場を設け、地域の文化財について関心をもてるような機会を提供する。

市民の意識調査（平成30〈2018〉年度実施）では、伝統行事を継承していくために大切なこととして、「地域での住民の交流」「郷土への愛着心の醸成」についての回答が多く見られ、地域資源として文化財に期待することとして、「地域の誇りや象徴としての役割」、「観光資源」への回答が多く見られた。こうした取り組みを通じ、地域の人たち一人ひとりが、「地域の宝」として守り続けてきた祭礼や伝統行事、地域文化財などの大切さや価値に気づき、さらにはコミュニティが果たしてきた役割を知り、地域における文化財の保護意識を醸成し、地域への愛着や誇りを形成することにつなげていく。また、将来にわたり文化財を継承していくための基盤となるような人づくり、体制づくりへの取り組みを、市民や行政、研究機関や民間団体などさまざまな視点で検討していく。

また、子どもたちが地域の伝統行事などへ参加することにより、地域住民との世代を超えた対話や交流を深め、子どもの頃から地域の文化財に親しむ機会を多くつくることで、文化財を保護・継承しようとする意識を育めるよう努めていくとともに、社会教育分野との連携により、楽しく学びながら共に地域の歴史文化への関心を高められるよう取り組む。



▲水口曳山祭（水口町水口）



▲黒川の花笠太鼓踊（土山町黒川）

イ. 活用活動に関連する取り組み

—「方針2 地域の歴史文化をまちづくりに活かす」の実現に向けて

◆歴史的風土を活かした総合的な保存活用の推進

地域の歴史的風土の中で形づくられ、また受け継がれてきた文化財は、地域の要として位置づけられているものや、地域の魅力を創出する要素となるものである。単体の文化財だけでなく、それを構成する周辺環境を含め、テーマやストーリーの設定あるいは魅力的な空間（エリア）を設定するなど総合的な保存活用の取り組みを推進し、まちづくりや地域振興へとつなげる。

また、観光振興の観点から、市域を越え、近隣自治体との広域連携を視野に入れて取り組む。

◆文化財の魅力発信の充実

市民の文化財保護への関心を高めるために、文化財の調査成果を市の広報紙に掲載するほか、市ホームページを活用し、本市の歴史文化に関する情報を分かりやすく紹介する。また、パンフレット類や歴史冊子を作成するとともに、文化財案内板の整備や刊行された『甲賀市史』の紹介と活用を図る。さらに、市内の郷土史会や地域史研究会、まちづくりやボランティアガイドなど、文化財に関わる団体が多数あり、広く市民に文化財についての情報を発信するため、歴史愛好団体と連携を密にして、歴史講演会や探訪事業を実施し、歴史文化に親しむ機会を設ける。

来訪者に向けては、観光部局との連携により、情報発信の拠点整備や観光ルートの設定、イベント開催などを通じて、本市の豊かな歴史文化を効果的に発信していく。情報発信の際には多言語の表記などに努める。

◆学校教育との連携

次世代へと文化財を継承していく担い手である子どもたちが、地域の歴史や文化に親しむ機会をもつことは重要である。地域の小中学校には体験教室や地域学習の場を設け、授業の中で子どもたちが等しく学べる機会をもてるように学校教育との連携を図っていく。これらは、高齢者グループの協力や保護者の参加を得るなど世代間交流や次世代への継承も視野に入れた取り組みとしていく。

◆多分野間連携による保存活用施策の推進

市内の文化財には、市内外から多くの観光客が訪れその魅力に触れている。今後、観光資源として活用していくことも重要な施策の一つとなっている。活用には多分野間での情報共有を図り、連携して、史跡や街道、伝統芸能などに関するイベントを開催し、地域の文化財を紹介する機会とするとともに、地域での世代間交流、次世代への継承活動へとつなげる。さらには、高齢者を対象に、民具を活用した「回想法」^{かいそうほう}の普及や史跡などを巡るウォーキング大会など健康福祉的な観点での施策にも取り組む。

また、従来の伝統産業の歴史や技術を調査し情報を共有することで、産業振興につなげるとともに、伝統を活かした現代版名物の開発を行い、新たな特産品づくりを推進する。

◆文化財の継承・活用のための拠点づくり

市内の歴史民俗資料館等は、多年にわたる活動により特色ある資料の蓄積があり、文化財公開の拠点施設として機能している。今後、その機能をさらに強化し、「甲賀市歴史民俗資料館運営指針」（平成26〈2014〉年策定）に基づき、次のような方針で、常設展示や企画展示、学習・普及事業、資料収集事業などの充実を図るとともに、各資料館の連携を強化し、個々の資料館の特徴を活かしながらも、役割を明確にし、効果的・効率的な運営に務める。

文化財の公開については、市内の公立・民間の資料館や美術館をはじめ、企業や関係団体などが運営する公開施設とネットワーク化し、市内での見学ルートの形成やテーマによる関連展示など連携を進めていく。

より多くの市民に来訪してもらうためには、市民に開かれた施設としていくことも重要である。事業の企画や運営面に市民の協力や参加を得られるような仕組みづくりに取り組む。

【資料館施設の事業方針】

○展示の充実

市内の歴史民俗資料館等は、多年にわたる活動により特色ある資料の蓄積があり、文化財公開の拠点施設であり、常設展、企画展の展示事業は、日頃の調査研究活動の成果を公開する場であると同時に、来館者、中でも市民が歴史文化に興味をもち、理解を深め、地域の文化財への保護意識を啓発する場であり、より一層の魅力ある展示を目指していく。

○学校教育との連携

社会科教育の一環として、市内資料館で校外学習を行うほか、出張講座、授業補助、資料貸出を実施し、子ども自身が住む身近な地域の歴史文化の学習を通じて、新たな発見や驚き、感動を与える機会とする。

○歴史講座の開催

歴史講座やイベントなどを開催し、甲賀市の歴史文化に触れ、その知識と理解を深め、先人から受け継いだ文化財を継承・保護する意識の醸成を図る。

○資料の収集、保管、活用

歴史文化に関する資料を中心に、散逸・遺棄される前に適切に収集し、整理・保管し、収集した資料は、調査研究のうえ諸活動への活用を図る。市民に公開するとともに、特別利用や資料貸出などを通じて、当市の歴史文化に対する館外の多様なニーズに応えられるように努める。

○資料館連携

資料館が互いに協力関係を築き、地域の枠組みを越えた一体的運営を行うため、これまで個別に活動してきた資料館を機能分化し、資料館の活動方針を明確化する。機能分化することにより、各資料館の特徴を発揮しつつ連携体制を強化していく。そのためには、資料館活動の見直しを図り、連携体制を構築し、各館の特徴を活かしつつ役割を明確にし、より効果的・効率的な運営方法で活性化を図る必要がある。

ウ. 体制づくりに関連する取り組み

—「方針3 地域の活動を重視し、行政との連携を図る」の実現に向けて

◆行政・住民等間の意見交換・情報共有の場づくり

地域の人たちが地域文化財を掘り起こし、それを調査、保護できるよう、連携を進め、将来的には「地域の文化財は地域で守る」ことを目標に取り組む。そしてこれまでも住民が主体的に継承してきた地域の歴史や文化を今後も地域の誇りとして守っていくため、意見交換や情報を共有する機会や場づくりを進める。

◆地域団体等の連携・交流

文化財の保存・活用のため、行政と地域住民だけでなく、専門家や研究機関、関係団体や企業などさまざまな人々が連携して調査、保存、活用に総合的に取り組むことができるよう、団体間の交流促進に努める。

◆地域での継承・活用活動への支援

地域で文化財の保存・活用活動を維持・発展していくためには、きめ細かな支援が必要となる。地域に寄り添い、行政などとの意見を調整し、必要に応じて助言や活動のコーディネートを行う人材の配置などの支援を行う。

また、文化財の保護・継承団体などに対する助成制度については、国、県や市の助成制度以外に、企業や財団など多くの助成制度を積極的に活用するとともに、市民・企業がともに協力できる文化財保護事業への基金や文化財サポーター制度などの創設を検討していく。

◆文化財行政の組織体制の充実

これまでの文化財行政に加え、地域との協働による文化財の保存・活用の取り組みや多分野間連携による施策の推進に向けて、円滑に業務を遂行していくためには、専門職員の配置や体制の適正化を図り、各分野の専門職員を確保するとともに、専門的な資質向上に努める。

4. 関連文化財群—甲賀らしさを物語る歴史文化—

(1) 関連文化財群設定の考え方

関連文化財群とは、地域の多種多様な文化財を歴史文化の特徴に基づくテーマやストーリーに沿って一定のまとまりとして捉えたものである。まとまりをもって扱うことで、未指定文化財についても構成要素としての価値付けが可能となり、また相互に結びついた文化財の多面的な価値・魅力を発見することができる。（「文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針」文化庁・平成31〈2019〉年3月）。

本市においては、この定義を基本に、次の点に留意し、関連文化財群を設定する。

- ・甲賀の歴史・文化の特色や魅力をわかりやすく伝える。
- ・甲賀の地域固有の文化財等「地域のお宝」を大切にする。
- ・甲賀の歴史・文化の特徴（“甲賀らしさ”）を一覧できるように、基本的なストーリーを設定する。
- ・ストーリーを構成する文化財等には、資料館などの施設、歴史文化に関わるイベントなども加え、多彩な取り組みができるようにする。

(2) 甲賀市の関連文化財群

① 基本ストーリー

歴史の大きな流れ（時間軸）に沿いながら、地域性を重視しつつ、甲賀の歴史・文化を特徴づける主要なことがらと多様で豊富な文化財を関連づけ、次の6つのストーリーを設定する。

表 2-5 関連文化財群のストーリー構成

ストーリー	内容・主な時代	サブ・ストーリー
① 古代王権と 甲賀	<p>甲賀の地に人々が暮らし始めた約1万年前の縄文時代早期、ヤマト王権との密接な関係をもち、輸送基地としてその存在感を示した古墳時代、木材供給基地として発展した奈良時代、そして甲賀に誕生した都「紫香楽宮」の、甲賀の古代をめぐるストーリー。</p> <p>古 代</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○王権とのかかわりを示す甲賀の古代遺跡 ○聖武天皇の一大構想～紫香楽宮と大仏造立～
② 甲賀武士の 活躍	<p>中世、荘園制度の中で荘園領主によって武力を背景に地域の実効支配を果たす甲賀武士が登場。戦国時代には、多くの城館を築き、甲賀武士は互いに結束して甲賀の地を治めた。かれらは甲賀の自治のルーツであり、また、情報戦に優れた忍びのルーツでもあった。修験者の動向も加えた、近世に至る甲賀武士をめぐるストーリー。</p> <p>中 世 近 世</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○今も残る甲賀武士の城跡群 ○忍びの里

<p>③ 道と交通、 城下町・ 宿場町</p>	<p>奈良・京都などの都の周縁部に位置すると同時に、都と伊勢や東国、北国の結節点にあたる甲賀は、古代から交通の要衝として栄えた。近世には東海道と甲賀各地をつなぐ道が整備され、多くの道標がその痕跡を語ってくれる。甲賀の歴史の道を近代まで概観しつつ、城下町・宿場町として栄えた水口と宿場町土山の往時の賑わいをめぐるストーリー。</p> <p>古代 中世 近世 近現代</p>	<p>○交通の要衝・甲賀 ○城下町と宿場町</p>
<p>④ 甲賀の 豊かな 宗教文化</p>	<p>仏像、石造仏などは、時代時代で甲賀の人々の信仰の対象として今まで大切にされてきた。これらは、それぞれの歴史の意味や技術、当時の社会の様子を現代に伝えてくれている。時代を越えて引き継がれる甲賀の人々の祈りの心をめぐるストーリー。</p> <p>古代 中世 近世 近現代</p>	<p>○甲賀の人々を見守る神と仏 ○かくれ里のいにしへの仏たち</p>
<p>⑤ 甲賀の 祈りと祭り</p>	<p>自然と向かい合って暮らしてきた甲賀の人々は、生活や生業のリズムとしての年中行事、地域の安寧を願う祭礼行事などを行った。これらは今も地域のアイデンティティとして継承され、時とともに地域の固有性を持つとともに、地域を超えて甲賀一帯に広がっている。甲賀の人々が大切に受け継いできた行事と祭りをめぐるストーリー。</p> <p>中世 近世 近現代</p>	<p>○春夏秋冬－暮らしの中の願い、祈り、そして感謝 ○甲賀が華やぐ「風流」の世界</p>
<p>⑥ 甲賀の生業 と暮らし</p>	<p>甲賀は、豊かな自然や地理的条件の中で、米作り以外にも、林業や茶業、陶業、製菓業など様々な生業<small>なりわい</small>が生まれた。長い歴史の中で、日々の暮らしの中から生まれ、育まれ、伝統的な地場産業として引き継がれる甲賀の生業をめぐるストーリー。</p> <p>古代 中世 近世 近現代</p>	<p>○山の恵み、大地の恵み ○くすりのまち甲賀 ○近江の茶所 ○陶都信楽と甲賀の焼物</p>

② 各ストーリーの内容

ストーリー1 古代王権と甲賀

① 王権とのかかわりを示す甲賀の古代遺跡

甲賀で人々の生活の痕跡がみられるようになるのは、縄文時代草創期。狩猟のための道具である「有舌尖頭器」が市内で出土している。また、縄文時代早期の押型土器が「油日縄文遺跡（甲賀町）」で発見され、「寺山遺跡（甲南町）」では縄文時代早期後半の土器や石鏃などが多数出土した。しかし、その後の甲賀での人々の活動はよくわからない。

甲賀において継続的な人々の営みの痕跡が明瞭となるのは、今から約1500年前の古墳時代中期である。野洲川と杣川が合流する水口平野に複数の首長墓が築かれた。「泉古墳群」である。特に、5世紀中頃の築造とみられる「泉塚越古墳」では非常に多くの副葬品が出土し、その中には鉄製の甲冑が含まれ、ヤマト王権と密接な繋がりが想定される。

また、同時期の集落として、「泉古墳群」の南東側に位置する「植遺跡」が挙げられる。「植遺跡」は、5世紀中頃から6世紀後半にかけての大規模集落であるが、特に大型倉庫が3棟並んで見つかったことが注目される。複数の大型倉庫が並存する状況は、大量の物資を集積・貯蔵したことの証であり、大型倉庫群を管理した人物が水口地域で大きな力をもっていたことの表れでもある。植遺跡の立地は、琵琶湖・野洲川から鈴鹿峠へ通じる道と、杣川上流から伊賀へ抜ける道の結節点に近い。水口地域の首長層がヤマト王権と密接な関係性を保っていたと考えれば、植遺跡はヤマト王権の軍事面や輸送面において大きな役割を果たしていたと推測される。

古墳時代後期になると、甲賀には横穴式石室をもった古墳が多数出現する。野洲川流域には「岩室塚穴古墳群」や「波濤ヶ平古墳群」、杣川流域には「杉谷古墳群」や「相模古墳群」、大戸川流域には「勅旨古墳群」が築かれる。特に、野洲川と杣川の合流付近左岸の丘陵上には、「岩坂古墳群」「百合野古墳群」「高山古墳群」などがあり、約300基の一大群集墳地帯を形成する。これらは「甲賀群集墳」と呼ばれ、その中には渡来系の特徴をもった石室も含まれる。また、野洲川の対岸に位置する下川原遺跡では7世紀代とみられる東国系の土器や東国系の特徴をもった竪穴住居が見つかり、東国から移住してきた様子がうかがえる。このように、水口平野周辺に様々な社会的基盤をもった人々が居住していたと考えられ、これらの人々の配置は王権の何からの意図が反映したものと推測される。

広大な森林が存在する杣川流域には、奈良時代に石山寺などの造営に際して木材を供給した「甲賀杣」が置かれた。また、それを管理する役所や切り出した木材を輸送するための川津（港）も設



▲有舌尖頭石器
左：土山町野上野出土、右：甲南町新治出土



▲銅印「徳西庶家」
(北脇遺跡出土・水口町北脇)

けられたとみられる。畦ノ平遺跡(甲南町)で複数発見された木材を切り出した後の杉の巨木は、「甲賀杣」との関連性をうかがわせる文化財である。この巨木は、年輪年代測定法によって、7世紀に伐採されたことが判明しており、文献史料に記されるよりも1世紀さかのぼる。古来より甲賀は木材産地として王権と関わってきたのであろう。

都が平安京に遷ると、「阿須波道」が仁和2(886)年に古代東海道に設定され、甲賀は都から東国に向かう主要ルート上に位置することとなった。特に、天皇の名代として伊勢神宮に仕えた齋王は、この道を通して伊勢へ向かった。史跡垂水齋王頓宮跡(土山町)は、齋王一行の宿舎跡と伝えられる。ここにも王権との関連性の強さを見出すことができる。現在では、齋王群行を再現したイベントが行われている。



▲水口町泉から柏木地域をのぞむ

②聖武天皇の一大構想～紫香樂宮と大仏造立～

天平12(740)年10月、東国行幸へ出発した聖武天皇は、12月に恭仁宮へ入り、平城宮から恭仁宮へと遷都された。聖武天皇による一大構想の始まりである。

恭仁宮の造営が継続されている天平14(742)年に入ると、2月には近江国甲賀郡へ通じる恭仁宮の東北道が開かれ、8月には智努王や高岡連河内らを造離宮司に任命し、恭仁宮と並行して紫香樂宮の造営も開始された。翌天平15(743)年には「大仏造立の詔」が出され、民間僧であった行基とその弟子たちも参画し、聖武天皇が願主となり、民衆が知識衆となる知識結の形態によって、鎮護国家の象徴として盧舎那仏の造立と甲賀寺の建設が進められることとなった。

『続日本紀』によれば、天平16(744)年11月13日、聖武天皇が自ら綱を引き、大仏の「体骨柱」が立てられ、翌17(745)年正月21日には大仏造立事業を中心となって進めてきた行基が大僧正に叙されている。この頃までには、大仏の原型となる塑像が完成したのであろう。

聖武天皇が大仏造立に傾倒する中、天平15年末には恭仁宮の造営が停止され、翌天平16年2月26日は難波宮が皇都となる。さらには、天平16年の後半には「紫香樂宮」から「甲賀宮」へ宮号が変更され、天平17年正月元日には甲賀宮の宮門に大楯と槍を立てて、難波宮から遷都したことが示された。この度重なる遷都は、政権内の対立に起因すると考えられているが、紫香樂宮(甲賀宮)での大仏造立が聖武天皇の大きな目標の一つであったことは疑いない。

しかし、天平17年5月、聖武天皇は紫香樂宮(甲賀宮)の造営と大仏造立をあきらめ、平城宮へと戻ってしまう。都も平城宮へ遷都され、大仏造立事業も東大寺へと引き継がれていく。離宮の造営から約3年、紫香樂宮は終焉を迎えることとなる。

その後、大仏が造立されるはずであった甲賀寺は、紫香樂宮の造営中止とともに計画変更され、近江国分寺として再整備されていくことになる。水口町杣中に所在する東光寺遺跡が近江国分寺段階の瓦を生産した窯跡であると推定されている。

聖武天皇の悲願であった大仏は完成することなく、その後、紫香樂宮は信楽地域の田畑に埋没し、

人々の記憶から消えてしまった。しかし、一時的とはいえ、紫香楽宮（甲賀宮）が首都となり、古代日本の王権の中心が甲賀に置かれたことは、甲賀の歴史をひもとく上で重要な事象であり、その痕跡である史跡紫香楽宮跡やその関連遺跡などは貴重な歴史資産であるといえよう。

近年の発掘調査によって宮殿跡の中核施設や紫香楽宮に関連する多くの遺構が見つかり、大量の木簡や土器などの遺物が出土した。その結果、紫香楽宮の姿が次第にわかりつつある。全国で数少ない都城遺跡であり、周囲の景観なども良好に保たれており、現在、信楽町宮町・黄瀬^{みやまち きのせ}に位置する5地点、合計面積約26ヘクタールが史跡紫香楽宮跡として国の史跡に指定されている。史跡が所在する地域では、地元の人たちが中心となり、ライトアップや古代衣装体験などのイベント、史跡を活かしたまちづくりに関する取り組みなどが行われ、地域に根ざした文化財として活用されている。

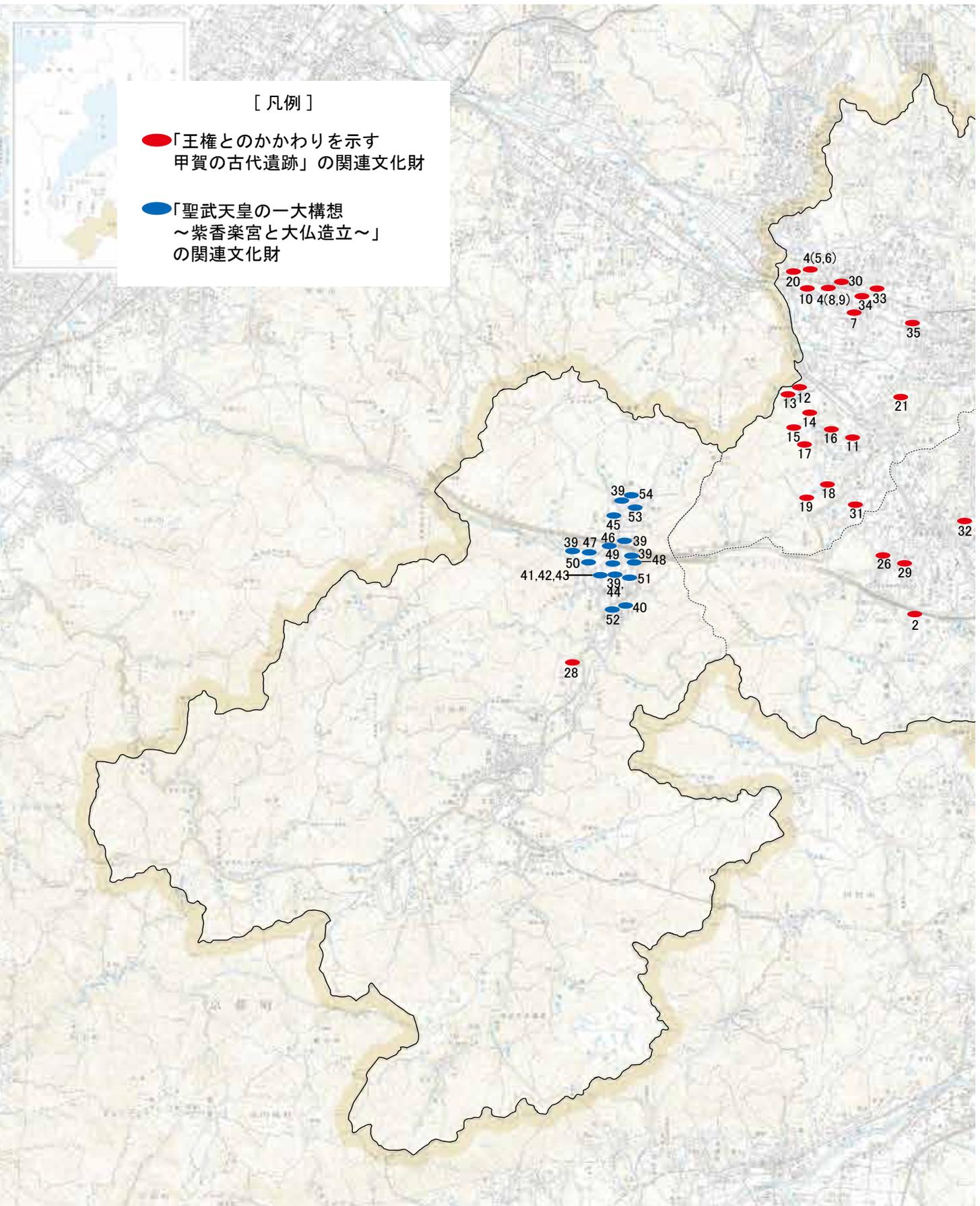


▲史跡紫香楽宮跡（宮町地区）をのぞむ

表 2-6 「古代王権と甲賀」を構成する主な文化財等

サブ 区分	番号	名 称	種 類	時 代	地 域	指定等
①王権とのかかわりを示す甲賀の古代遺跡	1	油日縄文遺跡	集落跡	縄文	甲賀町油日	
	2	寺山遺跡	社寺跡	縄文～平安	甲南町新治	
	3	山女原遺跡	集落跡	弥生	土山町山女原	
	4	泉古墳群	古墳	古墳	水口町泉	県指定
	5	西罐子塚古墳	古墳	古墳	水口町泉	県指定
	6	東罐子塚古墳	古墳	古墳	水口町泉	県指定
	7	植遺跡	集落跡	古墳～中世	水口町植	県指定
	8	泉塚越古墳(1号墳)	古墳	古墳	水口町泉	
	9	泉塚越古墳(2号墳)	古墳	古墳	水口町泉	
	10	下川原遺跡	集落跡	古墳～鎌倉	水口町泉	
	11	竹石遺跡	集落跡	古墳～中世	水口町三大寺	
	12	岩坂古墳群	古墳群	古墳	水口町岩坂	
	13	岩坂南古墳群	古墳群	古墳	水口町岩坂	
	14	百合野古墳群	古墳群	古墳	水口町 岩坂・高山	
	15	奥百合野古墳群	古墳群	古墳	水口町高山	
	16	高山古墳群	古墳群	古墳	水口町高山	
	17	三大寺落し谷古墳群	古墳群	古墳	水口町三大寺	
	18	城川古墳群	古墳群	古墳	水口町三大寺・牛飼	
	19	三大寺桜ノ馬場古墳群	古墳群	古墳	水口町三大寺	
	20	岩がまえ古墳群	古墳群	古墳	水口町泉	
	21	川田山古墳群	古墳群	古墳	水口町北内貴	
	22	波濤ヶ平古墳群	古墳群	古墳	水口町水口	市指定
	23	八束古墳群	古墳群	古墳	土山町市場	
	24	塚穴古墳群	古墳群	古墳	甲賀町岩室	市指定
	25	塚穴古墳出土品	考古資料	古墳	甲賀町岩室	市指定
	26	杉谷古墳	古墳	古墳	甲南町杉谷	
	27	相模古墳	古墳	古墳	甲賀町相模	
	28	勅旨古墳群	古墳群	古墳	信楽町勅旨	県指定
	29	畦ノ平遺跡	散布地	古代・中世	甲南町新治	
	30	北泉遺跡	集落跡	古代	水口町泉・北泉	
	31	東光寺遺跡	散布地	奈良～平安	水口町杉中	
	32	北脇遺跡出土銅印	考古資料	平安	甲南町葛木	市指定
	33	北脇遺跡	集落跡	平安	水口町北脇	
	34	北脇南遺跡	集落跡	古代	水口町北脇	
	35	西林口遺跡	集落跡	平安～中世	水口町西林口	
	36	田尻遺跡	散布地	古代・中世	土山町頓宮	
	37	上出遺跡	散布地	平安	土山町頓宮	
	38	鐘鋳野遺跡	散布地	平安～ 中世	土山町前野	

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
②聖武天皇の一大構想を紫香楽宮と大仏造立	39	紫香楽宮跡 (宮町地区、新宮神社地区、鍛冶屋敷地区、北黄瀬地区、内裏野地区)	都城跡	奈良	信楽町牧・黄瀬、宮町	国指定
	40	紫香楽宮跡出土遺物	考古資料	奈良～平安	信楽町町内	市指定
	41	宮町遺跡出土柱根	考古資料	奈良	信楽町黄瀬	市指定
	42	宮町遺跡出土木簡	考古資料	奈良	信楽町黄瀬	市指定
	43	史跡紫香楽宮跡(宮町地区) 歌木簡と歌墨書土器	考古資料	奈良	信楽町黄瀬	市指定
	44	内裏野廃寺	社寺跡	奈良～平安	信楽町黄瀬・牧	
	45	宮町遺跡	都城跡 集落跡	縄文～近世	信楽町宮町	
	46	新宮神社遺跡	都城跡 集落跡	奈良・平安	信楽町黄瀬	
	47	北黄瀬遺跡	都城跡 集落跡	奈良～近世	信楽町黄瀬	
	48	鍛冶屋敷遺跡	生産遺跡	奈良～近世	信楽町黄瀬	
	49	東山遺跡	都城跡	奈良	信楽町黄瀬	
	50	東出遺跡	都城跡	奈良・平安	信楽町黄瀬	
	51	紫香楽宮東遺跡	都城跡		信楽町黄瀬	
	52	雲井遺跡	都城跡 集落跡	奈良・平安	信楽町牧	
	53	紫香楽宮跡関連遺跡群調査事務所・出土遺物展示室	その他(施設)	現代	信楽町宮町	
54	紫香楽宮 都あかり	その他(行事)	現代	信楽町		



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の5万分1地形図を使用した。
(承認番号 令元情使、第 872 号)

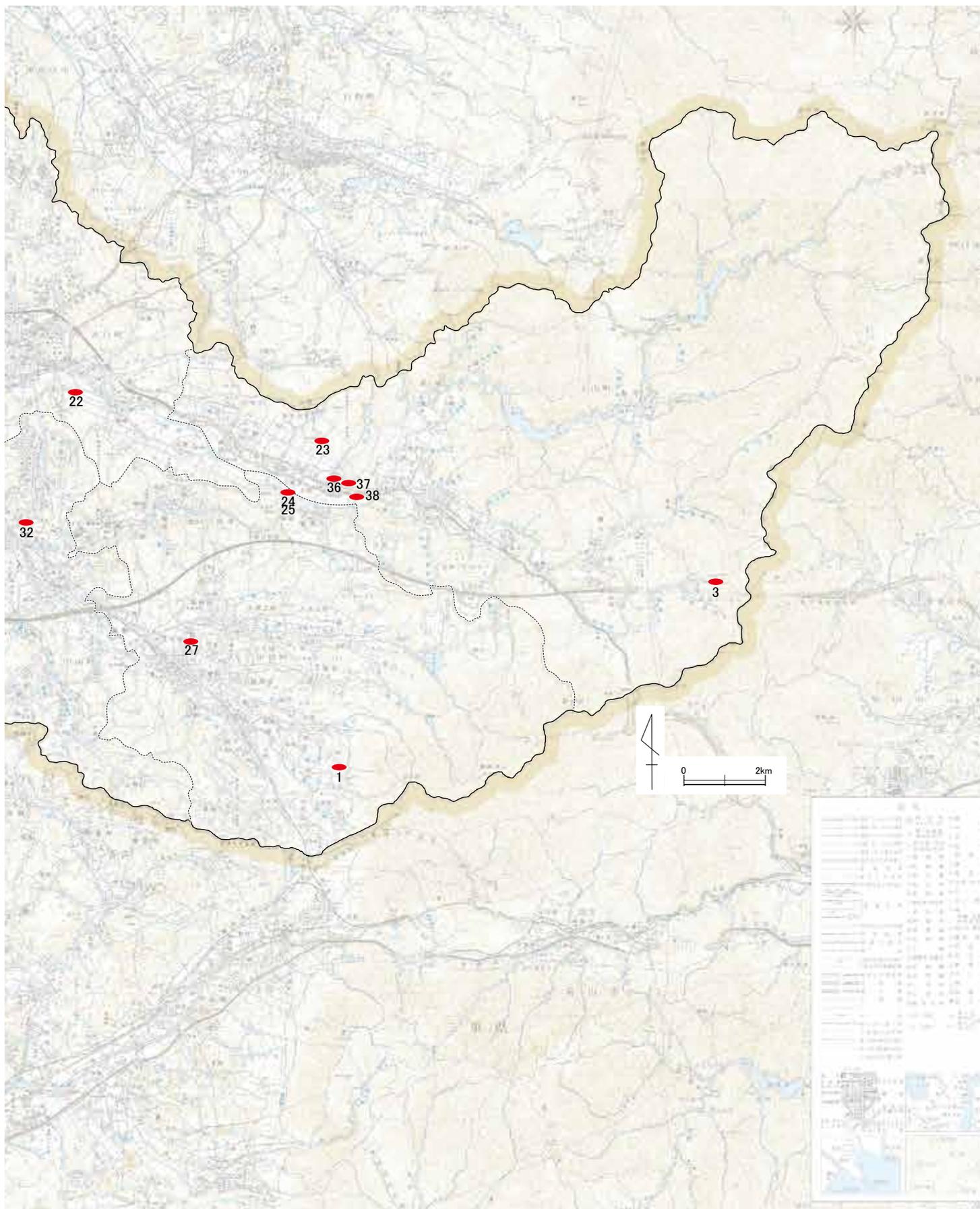


図2-6 「古代王権と甲賀」を構成する主な文化財の分布

ストーリー2 甲賀武士の活躍

①今も残る甲賀武士の城跡群

平安時代末期から戦国時代末期まで約500年間続いた中世は、全国で武士が台頭した戦乱の時代である。甲賀市域においても、いわゆる「甲賀武士」と呼ばれる多くの在地の土豪が各地域に根を張り、朝廷や寺社権門、有力大名などとの関係を取り結び、現在の甲賀市の基盤が形づくられた重要な時期である。

彼らの活動の足跡として、市内には180カ所余の中世城館跡があるが、その多くは戦国時代のほぼ100年間に築かれたと考えられる。個々の城跡は四方に土塁と堀をめぐらした一辺50メートルほどの小規模な「土の城」を基本とするが、この中には、土豪の館として集落内部に築かれたものもあれば、とくに城跡が密集する甲南町の杉谷・新治地域の城館群のように、複数の城を集落背後の丘陵上に巧みに配置することによって、地域全体の防衛を意識したと思われるものもある。



▲国史跡「甲賀郡中惣遺跡群」を構成する寺前城外観

甲賀の城は、単に数が多いというだけではなく、その築城主である甲賀武士の姿を知ることができる。中世の甲賀武士は「同名中」と呼ばれる同じ苗字を共有する複数の家の連合体を組織し、領内の紛争解決や領域の防衛を担うなど自律的な地域運営を行っていた。同名中を構成する家々同士の間は比較的に平等で、多数決で物事を決めるなどの特徴があったが、それゆえに特定の家のみが大きな城を持つのではなく、複数の家がそれぞれに小さな城を構え、時には地域全体での戦略も意識しながら城を配置した。現在、多くの中世城館跡が確認できるのは、そうした甲賀武士の性格が如実に反映された結果といえる。

これらの城にまつわるエピソードも多く、幾度も権力者をかくまうために利用されたことが知られる。例えば甲賀町和田谷の公方屋敷跡は、和田川の両岸に沿って4つの城が集まる和田城館群の近くに位置しているが、これは一条院覚慶（後の室町幕府最後の将軍となる足利義昭）が亡命し、のちに将軍として復権するための足がかりの一つとした場所とされる。

また甲賀武士の活躍として忘れてはならないのが、天正10（1582）年6月の「神君伊賀越え」における多羅尾氏の活動である。堺見物を終えた徳川家康は、本能寺の変による信長の死の報告を受け、山城・近江・伊賀・伊勢を抜けて、三河岡崎城に



▲多羅尾代官陣屋跡（信楽町多羅尾）

たどり着いた。後世に「神君伊賀越え」と呼ばれるこの道中で、山城から信楽の朝宮に入り、小川^{おがわ}を抜けて伊賀に向かった家康は、多羅尾氏や山口氏など甲賀の武士のほか、和田・山岡・上林・柘植・服部・伴といった甲賀を中心とする土豪の協力を得て無事に帰国を果たしている。信楽を通過する際、家康は多羅尾氏の拠点である小川城、もしくはその麓の寺院に一泊したという記録が残っている。この功績から多羅尾氏は、江戸時代に幕府代官を世襲し、多羅尾に陣屋を構えた。

このように、甲賀の城跡群は、文字資料でしか知ることのできない動乱の中世、とくに戦国時代の甲賀の雰囲気を追体験できる貴重な場といえる。

②忍びの里

甲賀は、伊賀とともに忍者発祥の地として知られ、特徴的な文化遺産として「忍者」あるいは「忍び」の存在がある。そのルーツには謎も多いが、甲賀の場合は中世の「甲賀武士」と宗教的文化などにその一端を求めることができる。

日本における忍びは、17世紀初頭に成立した『日葡辞書』^{にっぽ}に「Xinobi」(シノビ)の語が見えることから、遅くとも戦国時代には外国人にも知られた一般的な存在であったと考えられる。甲賀と忍びが明確に結び付けられるのは江戸時代に入ってからであるが、江戸前期の「軍法侍用集」などの兵法書や、「近江輿地志略」^{おうみよちしりやく}などの地誌類に、中世の甲賀武士と忍びを結び付ける事例がみられる。それらによると、長享元(1487)年に起こった室町幕府將軍足利家と近江守護六角氏の対立である「長享の乱」^{ちようきやう}で活躍した甲賀武士に甲賀の忍びのルーツがあるとされる。

また、甲賀の住人が所有していたものとしては、甲賀・伊賀の忍術諸流を集約したという忍書^{ぼんせんしゅうかい}「万川集海」がある。これは「甲賀古土」(江戸時代に帰農して甲賀で生きる道を選んだ家々)から江戸幕府に仕官を求めて提出されたもので、江戸幕府の蔵書を引き継いだ国立公文書館に現物が保管されているほか、甲賀市内にもその写本を伝える家がある。さらに、実際に江戸時代に「甲賀者」として幕府や大名家に仕えた家々も多く、実際に「忍び役」^{しゆげん} 拝命や何種類もの忍術書を含む古文書群が市内に残っている。あやふやな存在と思われがちな忍びが甲賀の地で暮らしていたことを証明する貴重な歴史資料である。

とはいえ、忍びや忍術は、甲賀武士のみにルーツを求めることはできない。いわゆる忍術には、密教由来の真言が含まれていることから、真言を用いることの多い修験文化などの宗教的環境がその基盤にあると考えられる。古代より山岳信仰の霊山として開かれ、中世以来近江屈指の修験の霊場として発展し、多くの信仰を集めた霊峰飯道山(標高664m)、その南東の尾根につながる庚申山、および岩尾山の甲賀三山は、山伏とも呼ばれる修験者の修練場として知られている。現在「甲賀流忍術屋敷」として多くの人たちが訪れる望月家は、甲賀武士望月氏をルーツとしながら、江戸時代以降は修験を家業とした家である。



▲甲賀者の足跡を伝える歴史資料(渡辺俊経家文書)

表 2-7 「甲賀武士の活躍」を構成する主な文化財等

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
①今も残る甲賀武士の城跡群	1	甲賀郡中惣遺跡群 (寺前城跡・村雨城跡、新宮城跡、新宮支城跡、竹中城跡、油日神社、新矢川神社)	城館跡	中世	甲賀町油日、甲南町新治・森尻	国指定
	2	酒人山中文書	書跡	南北朝～江戸	水口町酒人	市指定
	3	佐治文書	書跡	南北朝	甲賀町小佐治	市指定
	4	下山城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	5	伴屋敷城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	6	城屋敷跡	城館跡	中世	水口町下山	
	7	東迎山城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	8	西迎山城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	9	津山城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	10	下山北城跡	城館跡	中世	水口町下山	
	11	伴中山城跡	城館跡	中世	水口町伴中山	
	12	畑村城跡	城館跡	中世	水口町春日	
	13	山村田引城跡	城館跡	中世	水口町山	
	14	山村城跡	城館跡	中世	水口町山	
	15	北脇城跡	城館跡	中世	水口町北脇	
	16	柏木神社遺跡	城館跡	中世	水口町北脇	
	17	里北脇遺跡	城館跡	中世	水口町北脇	
	18	植城跡	城館跡	中世	水口町植	
	19	山中氏屋敷跡	城館跡	中世	水口町宇田	
	20	西出館跡	城館跡	中世	水口町宇田	
	21	古御殿跡	城館跡	中世	水口町水口	
	22	美濃部古屋敷跡	城館跡	中世	水口町水口	
	23	富川屋敷跡	城館跡	中世	水口町水口	
	24	北内貴城跡	城館跡	中世	水口町北内貴	
	25	内貴川田山城跡	城館跡	中世	水口町北内貴	
	26	内貴殿屋敷跡	城館跡	中世	水口町貴生川	
	27	内貴尾山城跡	城館跡	中世	水口町貴生川	
	28	北虫生野城跡	城館跡	中世	水口町虫生野	
	29	虫生野堂の前城跡	城館跡	中世	水口町虫生野	
	30	平子城跡	城館跡	中世	水口町岩坂	
	31	岩坂屋敷跡	城館跡	中世	水口町岩坂	
	32	源太屋敷城跡	城館跡	中世	水口町岩坂	
	33	高山屋敷跡	城館跡	中世	水口町高山	

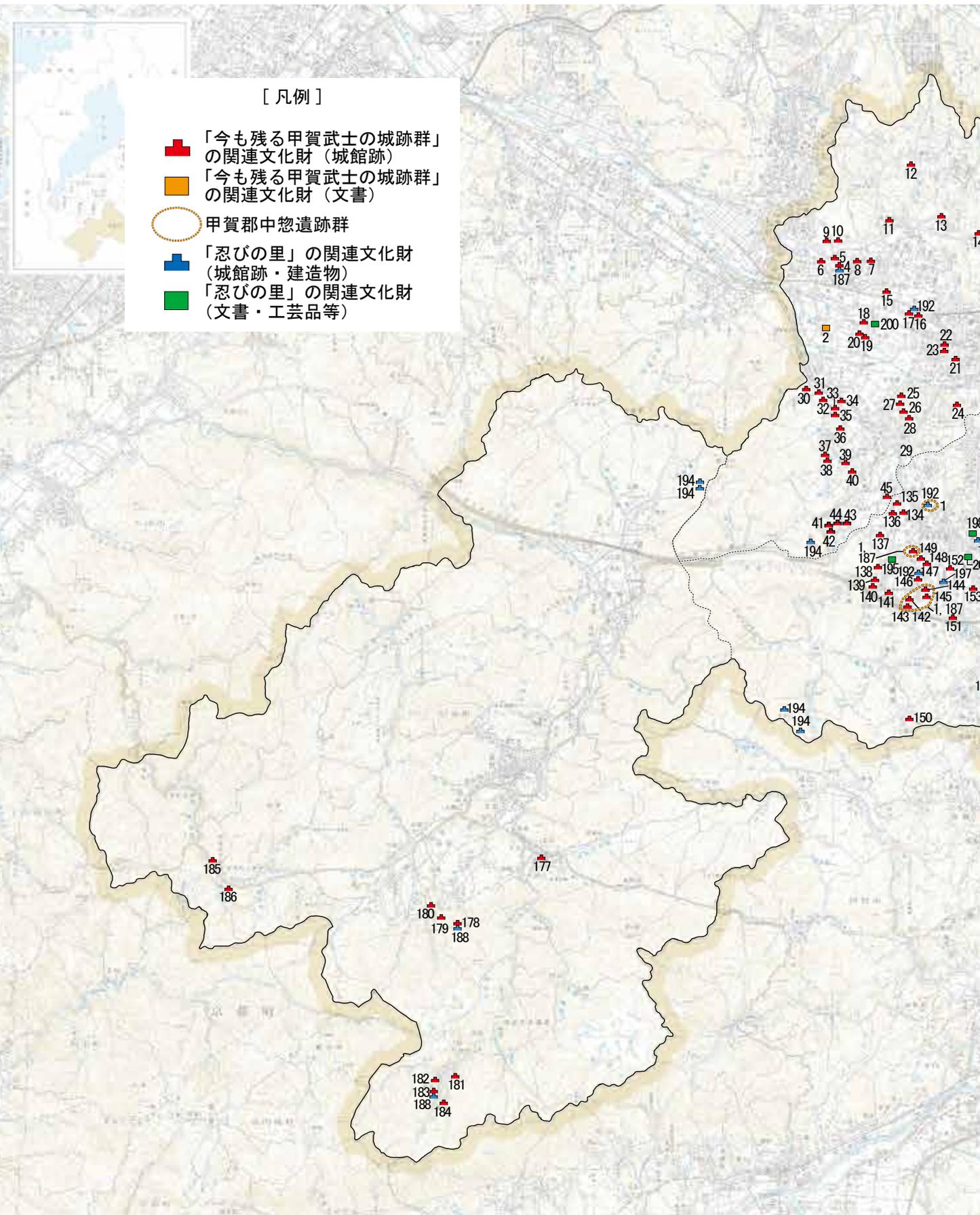
サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
①今も残る甲賀武士の城跡群	34	御姫屋敷城跡	城館跡	中世	水口町高山	
	35	一学殿屋敷跡	城館跡	中世	水口町高山	
	36	高山氏城跡	城館跡	中世	水口町高山	
	37	小山城跡	城館跡	中世	水口町三大寺	
	38	奥谷城跡	城館跡	中世	水口町三大寺	
	39	三大寺竹中城跡	城館跡	中世	水口町三大寺	
	40	牛飼城跡	城館跡	中世	水口町牛飼	
	41	山上I城跡	城館跡	中世	水口町山上	
	42	山上II城跡	城館跡	中世	水口町山上	
	43	山上城跡	城館跡	中世	水口町山上	
	44	山上館跡	城館跡	中世	水口町山上	
	45	杣中城跡	城館跡	中世	水口町杣中	
	46	今郷城跡	城館跡	中世	水口町今郷	
	47	巖巖西城跡	城館跡	中世	水口町巖巖	
	48	巖巖城跡	城館跡	中世	水口町巖巖	
	49	平野城跡	城館跡	中世	水口町和野	
	50	伊佐野城跡	城館跡	中世	水口町和野	
	51	今宿城跡	城館跡	中世	土山町大野	
	52	大野山本城跡	城館跡	中世	土山町大野	
	53	大野城跡	城館跡	中世	土山町大野	
	54	山本神社遺跡	城館跡	中世	土山町大野	
	55	頓宮城跡	城館跡	中世	土山町頓宮	
	56	頓宮池ノ谷城跡	城館跡	中世	土山町頓宮	
	57	頓宮館跡	城館跡	中世	土山町頓宮	
	58	平子館跡	城館跡	中世	土山町平子	
	59	音羽野城跡	城館跡	中世	土山町瀬ノ音	
	60	土山城跡	城館跡	中世	土山町北土山	
	61	黒川砦跡	城館跡	中世	土山町黒川	
	62	大宮神社遺跡	城館跡	中世	土山町黒川	
63	黒川氏城跡	城館跡	中世	土山町鮎河		
64	大河原氏城跡	城館跡	中世	土山町鮎河		
65	鮎河城跡	城館跡	中世	土山町鮎河		
66	高尾城跡	城館跡	中世	土山町鮎河		
67	隠岐城跡	城館跡	中世	甲賀町隠岐		
68	打越城跡	城館跡	中世	甲賀町隠岐		
69	砂坂城跡	城館跡	中世	甲賀町隠岐		

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
①今も残る甲賀武士の城跡群	70	隠岐支城群跡Ⅰ	城館跡	中世	甲賀町隠岐	
	71	隠岐支城群跡Ⅱ	城館跡	中世	甲賀町隠岐	
	72	隠岐支城群跡Ⅲ	城館跡	中世	甲賀町隠岐	
	73	隠岐支城群跡Ⅳ	城館跡	中世	甲賀町隠岐	
	74	神保城跡	城館跡	中世	甲賀町神保	
	75	佐治城跡	城館跡	中世	甲賀町小佐治	市指定
	76	岩室城跡	城館跡	中世	甲賀町岩室	
	77	高野城跡	城館跡	中世	甲賀町高野	
	78	高野東城跡	城館跡	中世	甲賀町高野	
	79	補陀楽寺城跡	城館跡	中世	甲賀町大原市場	
	80	市場陣山城跡	城館跡	中世	甲賀町大原市場	
	81	竹林城跡	城館跡	中世	甲賀町相模	
	82	鳥居城跡	城館跡	中世	甲賀町鳥居野	
	83	篠山城跡	城館跡	中世	甲賀町鳥居野	市指定
	84	大鳥神社遺跡	城館跡	中世	甲賀町鳥居野	
	85	垂井城跡	城館跡	中世	甲賀町大原中	
	86	大宝寺遺跡	城館跡	中世	甲賀町大原中	
	87	大原上田城跡	城館跡	中世	甲賀町大原上田	
	88	南殿屋敷跡	城館跡	中世	甲賀町大久保	
	89	奥殿城跡	城館跡	中世	甲賀町神	
	90	滝川城跡	城館跡	中世	甲賀町櫛野	市指定
	91	滝川西城跡	城館跡	中世	甲賀町櫛野	
	92	滝川支城跡	城館跡	中世	甲賀町櫛野	
	93	櫛野大原城跡	城館跡	中世	甲賀町櫛野	
	94	大原城跡	城館跡	中世	甲賀町田堵野	
	95	北上野城跡 A	城館跡	中世	甲賀町上野	
	96	富田山城跡	城館跡	中世	甲賀町上野	
	97	観音堂城跡	城館跡	中世	甲賀町上野	
	98	北上野城跡 B	城館跡	中世	甲賀町上野	
	99	木内城跡	城館跡	中世	甲賀町上野	
	100	龍泉寺城跡	城館跡	中世	甲賀町上野	
101	岡崎城跡	城館跡	中世	甲賀町油日		
102	前山城跡	城館跡	中世	甲賀町油日		
103	中山城跡	城館跡	中世	甲賀町油日		
104	油日富田城跡	城館跡	中世	甲賀町油日		
105	油日館跡	城館跡	中世	甲賀町油日		

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
①今も残る甲賀武士の城跡群	106	油日城跡	城館跡	中世	甲賀町油日	
	107	上野城跡	城館跡	中世	甲賀町油日	市指定
	108	富田城跡	城館跡	中世	甲賀町油日	
	109	五反田口城跡	城館跡	中世	甲賀町油日	
	110	青木城跡(西城館)	城館跡	中世	甲賀町滝	
	111	青木城跡(東城館)	城館跡	中世	甲賀町滝	
	112	梅垣城跡	城館跡	中世	甲賀町滝	市指定
	113	多喜北城跡	城館跡	中世	甲賀町滝	
	114	多喜城跡	城館跡	中世	甲賀町滝	
	115	多喜南城跡	城館跡	中世	甲賀町滝	
	116	毛牧北城跡	城館跡	中世	甲賀町毛枚	
	117	山岡城跡	城館跡	中世	甲賀町毛枚	
	118	獅子ヶ谷城跡	城館跡	中世	甲賀町毛枚	
	119	殿山城跡	城館跡	中世	甲賀町和田	
	120	公方屋敷跡	城館跡	中世	甲賀町和田	市指定
	121	公方屋敷支城跡	城館跡	中世	甲賀町和田	
	122	和田支城跡Ⅰ	城館跡	中世	甲賀町和田	
	123	和田支城跡Ⅱ	城館跡	中世	甲賀町和田	
	124	和田支城跡Ⅲ	城館跡	中世	甲賀町和田	
	125	和田城跡	城館跡	中世	甲賀町和田	市指定
	126	高嶺北城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	127	高嶺中城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	128	高嶺東谷城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	129	高嶺山城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	130	伊賀見城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	131	高嶺南城跡	城館跡	中世	甲賀町高嶺	
	132	寺庄城跡	城館跡	中世	甲南町寺庄	
	133	葛木居館跡	城館跡	中世	甲南町葛木	
	134	市原城跡	城館跡	中世	甲南町市原	
	135	古屋敷館跡	城館跡	中世	甲南町市原	
	136	市原Ⅱ城跡	城館跡	中世	甲南町市原	
	137	塩野城跡	城館跡	中世	甲南町塩野	
	138	杉谷城跡	城館跡	中世	甲南町杉谷	
	139	望月城跡	城館跡	中世	甲南町杉谷	
140	望月支城跡	城館跡	中世	甲南町杉谷		
141	杉谷砦跡	城館跡	中世	甲南町杉谷		

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
①今も残る甲賀武士の城跡群	142	寺前城跡	城館跡	中世	甲南町新治	国指定
	143	村雨城跡	城館跡	中世	甲南町新治	国指定
	144	新宮城跡	城館跡	中世	甲南町新治	国指定
	145	新宮支城跡	城館跡	中世	甲南町新治	国指定
	146	服部城跡	城館跡	中世	甲南町新治	
	147	倉治城跡	城館跡	中世	甲南町新治	
	148	カリヤ城跡	城館跡	中世	甲南町新治	
	149	竹中城跡	城館跡	中世	甲南町新治	国指定
	150	磯尾城跡	城館跡	中世	甲南町磯尾	
	151	竜法師城跡	城館跡	中世	甲南町竜法師	
	152	饗庭城跡	城館跡	中世	甲南町竜法師	
	153	野尻城跡	城館跡	中世	甲南町野尻	
	154	野尻支城跡	城館跡	中世	甲南町野尻	
	155	中野城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	156	小谷城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	157	小出城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	158	池田西城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	159	池田東城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	160	坊谷城跡	城館跡	中世	甲南町池田	
	161	望月青木城跡	城館跡	中世	甲南町柑子	
	162	望月村嶋城跡	城館跡	中世	甲南町柑子	
	163	村嶋支城跡	城館跡	中世	甲南町柑子	
	164	野川城跡	城館跡	中世	甲南町野川	
	165	谷出城跡	城館跡	中世	甲南町下馬杉	
	166	西出城跡	城館跡	中世	甲南町下馬杉	
	167	小池城跡	城館跡	中世	甲南町下馬杉	
	168	染田砦跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	169	岡之下城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	170	馬杉中城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	171	井口氏城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	172	馬杉北城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	173	馬杉城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
	174	馬杉支城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉	
175	馬杉本城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉		
176	栢ノ木城跡	城館跡	中世	甲南町上馬杉		
177	神山城跡	城館跡	中世	信楽町神山		

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
	178	小川城跡	城館跡	中世	信楽町小川	県指定
	179	小川中ノ城跡	城館跡	中世	信楽町小川	
	180	小川西ノ城跡	城館跡	中世	信楽町小川	市指定
	181	多羅尾古城跡	城館跡	中世	信楽町多羅尾	
	182	多羅尾城山城跡	城館跡	中世	信楽町多羅尾	
	183	多羅尾代官陣屋跡	陣屋跡	近世	信楽町多羅尾	市指定
	184	多羅尾砦跡	城館跡	中世	信楽町多羅尾	
	185	山口館跡	城館跡	中世	信楽町下朝宮	
	186	朝宮城山城跡	城館跡	中世	信楽町下朝宮	
②忍びの里	187	甲賀の中世城館群 (下山城、黒川氏城、土山城、滝川城、篠山城、梅垣城、大原城、和田城、上野城、佐治城、寺前城、村雨城、新宮城、新宮支城、竹中城)	城館跡	中世	水口町下山、土山町鮎河・北土山、甲賀町櫛野・鳥居野・滝・田堵野・和田・油日・小佐治、甲南町新治)	国史跡 市史跡
	188	神君伊賀越え関連遺跡 (小川城跡、多羅尾代官陣屋跡)	城館跡	中世・近世	信楽町小川・多羅尾	県史跡 市史跡
	189	水口岡山城跡	史跡	近世	水口町水口	国史跡
	190	和田公方屋敷跡	城館跡	中世	甲賀町和田	市史跡
	191	油日神社の文化財群 (楼門・回廊・本殿、境内地、油日の奴振、懸仏群)	建造物、 絵画、 工芸品、 無形民俗、 史跡	中世他	甲賀町油日	国指定 県指定 市指定
	192	甲賀衆結束の鎮守の杜 (大鳥神社楼門・拜殿・中門、 矢川神社楼門、境内地、新宮神社表門、 柏木神社、檜尾神社本殿)	建造物 城館跡 等	中世・近世	水口町北脇、甲賀町鳥居野、甲南町森尻・新治、池田	国指定 国登録 県指定
	193	櫛野寺	彫刻、 工芸品	古代	甲賀町櫛野	国指定 県指定
	194	山伏の修練場 (飯道神社本殿、飯道神社飯道山遺跡、 岩尾山、息障寺、庚申山広徳寺)	建造物	近世他	水口町山上、甲南町杉谷、信楽町宮町	国指定 市指定
	195	忍書 (萬川集海、忍術應義傳、 渡辺家史料)	書跡	近世	甲賀町田堵野 甲南町杉谷	市指定
	196	甲賀忍術博物館建物群 (旧岡田家、旧望月家、旧藤林家)	建造物 等	近世	甲賀町隠岐	
	197	甲賀流忍術屋敷	建造物 等	近世	甲南町竜法師	
	198	甲賀のくすり関連資料	有形 民俗	近代	甲賀町大原中 甲南町葛木	
199	甲賀の前挽鋸	有形 民俗	近世・ 近現代	甲南町葛木	国指定	
200	甲賀百人組ゆかりの寺 (長福寺、称名寺、多聞寺、唯称寺、 慈眼寺)	建造物・ 美術工 芸品等	近世・ 近現代	水口町宇田、甲賀町鳥居野・滝・田堵野、甲南町野田)		



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の5万分1地形図を使用した。
 (承認番号 令元情使、第 872 号)

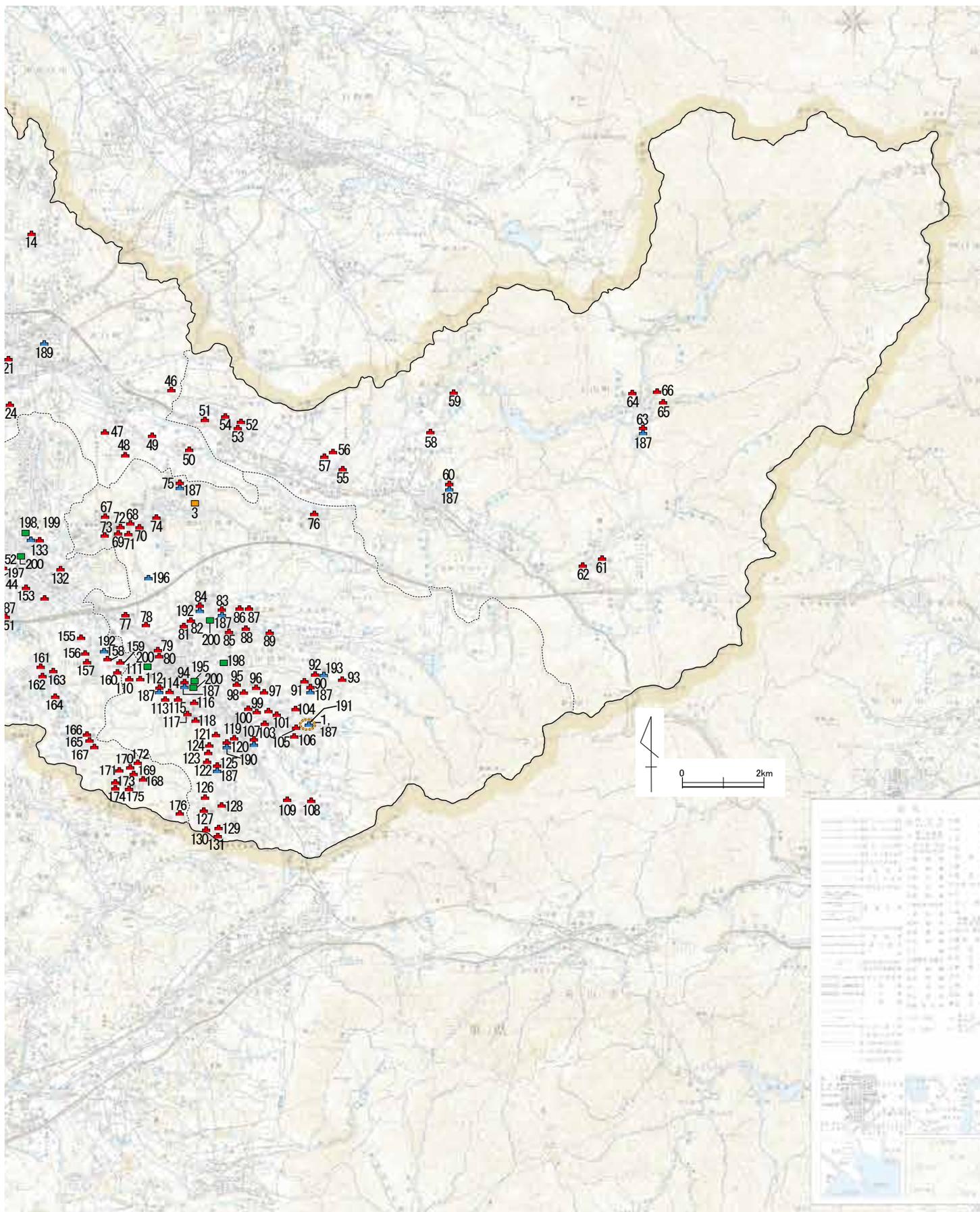


図 2-7 「甲賀武士の活躍」を構成する主な文化財の分布

ストーリー3 道と交通、城下町・宿場町

① 交通の要衝・甲賀

甲賀は、奈良・京都などの都の周縁部に位置すると同時に、都と伊勢や東国、北国の結節点にあたる。このため、古来より多くの人が行き交い、モノや情報が行き交うところでもあった。そのことを示すように、時代とともに様々な歴史の道が開かれ、数々のドラマが生まれてきた。

記録にみえる甲賀の最も古い道は、大津宮時代（667～672年）に用いられた「倉歴道」である。これは郡内を杣川沿いに南東へ伊賀に抜ける古代東海道で、壬申の乱最中の天武元（672）年7月、近江朝廷軍と対立する大海人皇子の軍勢が伊賀側からこれを塞ぐ（『日本書紀』）など、重要な街道である。次いで確認できるのは「阿須波道」である。これは、平安時代の仁和2（886）年に新たな東海道に設定され、野洲川沿いを東進し鈴鹿峠を越えて伊勢にいたる道で、齋王群行が伊勢神宮へ行くためのルートとしても機能した。土山町頓宮の史跡垂水齋王頓宮跡は、齋王一行の宿舎跡と伝わるが、現在行われている齋王群行を再現したイベントは当時のきらびやかな様子を偲ばせる。また、奈良時代に聖武天皇が開いた都である恭仁京と離宮・紫香樂宮を結ぶ「恭仁京東北道」も重要である。信楽地域には、聖武天皇や紫香樂宮、あるいは大仏造立にちなむ地名や伝承が今も残るが、道の開通が信楽地域開発の端緒となったであろうことが想像される。

中世の街道については不明な点が多いが、当時の文献や東海道沿いに広く残る痕跡と地名から、京と伊勢神宮・東国を結ぶ「伊勢大路」が甲賀を通過していたことは確実である。伊勢大路は、後に水口岡山城が築かれることになる水口の大岡山（現古城山）の麓を通過していたと思われるが、中世の段階ですでに宿的な機能を持つ空間があり、それなりの交通量があったことが記録からうかがえる。

そうした歴史的事態を前提に、江戸時代には水口と土山の二宿を中心とする近世東海道が整備されるとともに、御代参街道・杣街道・伊賀道・信楽道など、郡内各地から東海道あるいはその外側へとつながる大小の道が、郡内の村や在郷町を有機的に結びつけていた。江戸時代という泰平の時代、甲賀は東海道を中心に数多の旅行者や物資・情報が行き交う交通の結節点として発展したのである。

道とともに発展してきた甲賀には、大小の街道を行き交う人のために建てられた道標が多く残されている（少なくとも136基が現存）。観音信仰や著名な寺社・名所への案内、あるいは主要拠点への道程が刻まれたこれらの“いしぶみ”は、往時の人々の生活の一端をわれわれに垣間見させる、路傍の文化財といえる。



▲垂水齋王頓宮跡（土山町頓宮）

② 城下町と宿場町

古くから交通の要衝として位置づけられてきた甲賀市域には、慶長6（1601）年に2つの宿場町が成立した。一つは甲賀随一の規模を誇った町場である水口宿。いま一つは鈴鹿峠西麓に営まれた土山宿である。

水口宿は、羽柴（豊臣）秀吉の将、中村一氏が天正13（1585）年に築いた大規模な山城「水口岡山城」の城下町を母体としている。それ以前から一帯には旅行者のための宿が営まれていたが、築城を契機に武士・商人・職人が集住する計画的な町空間に生まれ変わったのである。その住人は中世水口郷の人々に加え、郡内の有力者が集められたものと思われる。15年後の慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いで水口岡山城が落城すると、徳川家康は同城を廃城としつつ、翌年には城下町を京～江戸を結ぶ東海道の機能を補完するための宿駅に指定し、正式に水口宿が誕生した。17世紀後半には水口藩が成立し、以後、武士と町人の町として幕末にいたる。中央部分に三本の道筋が平行する「三筋町」を特徴とし、30前後の町々に本陣、旅籠、商家など千軒近くの家々が並んだ。その姿は今も水口の町筋として残っている。江戸中期には、町場の繁栄を背景に水口の鎮守・水口神社の祭礼として「水口曳山祭」が始まったが、これは現在にも引き継がれ、毎年春の例大祭で「水口囃子」の軽快なリズムとともに曳山巡行が行われている。旧東海道沿いを歩くと、この曳山を収める「山蔵」がみえるのも水口らしい景観である。

一方の土山宿は、水口宿と同時に東海道の宿駅に指定された。江戸時代後期には351軒に1,505人が暮らしていたが、宿の中央部分に本陣・脇本陣・旅籠屋・問屋場・高札場が集中する、典型的な街村型の宿駅であった。その母体は南・北土山村であるなど、農村的性格が強い点は水口宿と対照的であるが、土山地域では随一の町場であり、東海道と中山道を結ぶ「御代参詣道」の分岐点でもあった。そのため多賀大社への参詣人や街道沿いの近江商人たちに盛んに利用された。比較的歴史資料が充実しているのも土山宿であり、例えば土山家本陣には、大行列で宿場を往来した諸大名の休泊記録である「宿帳」が残されており、9,000件を超える本陣利用者の姿を知ることができるほか、諸大名が実際に休泊した部屋であり、明治元（1868）年には明治天皇が誕生日を迎えた日に宿泊した「上段の間」が保存されており、往時の雰囲気を感じることができる。

また両宿では、旅行者向けの土産品の生産も盛んであった。水口宿では葛籠細工（水口細工）や干瓢など、土山宿では名産のお茶や「お六櫛」、蟹ヶ坂飴などが名所図会や紀行文などで紹介されている。このうち水口の干瓢は、歌川広重の錦絵「東海道五十三次」にも描かれるなど全国的にも有名で、滋賀県の伝統野菜として今も生産が続けられている。

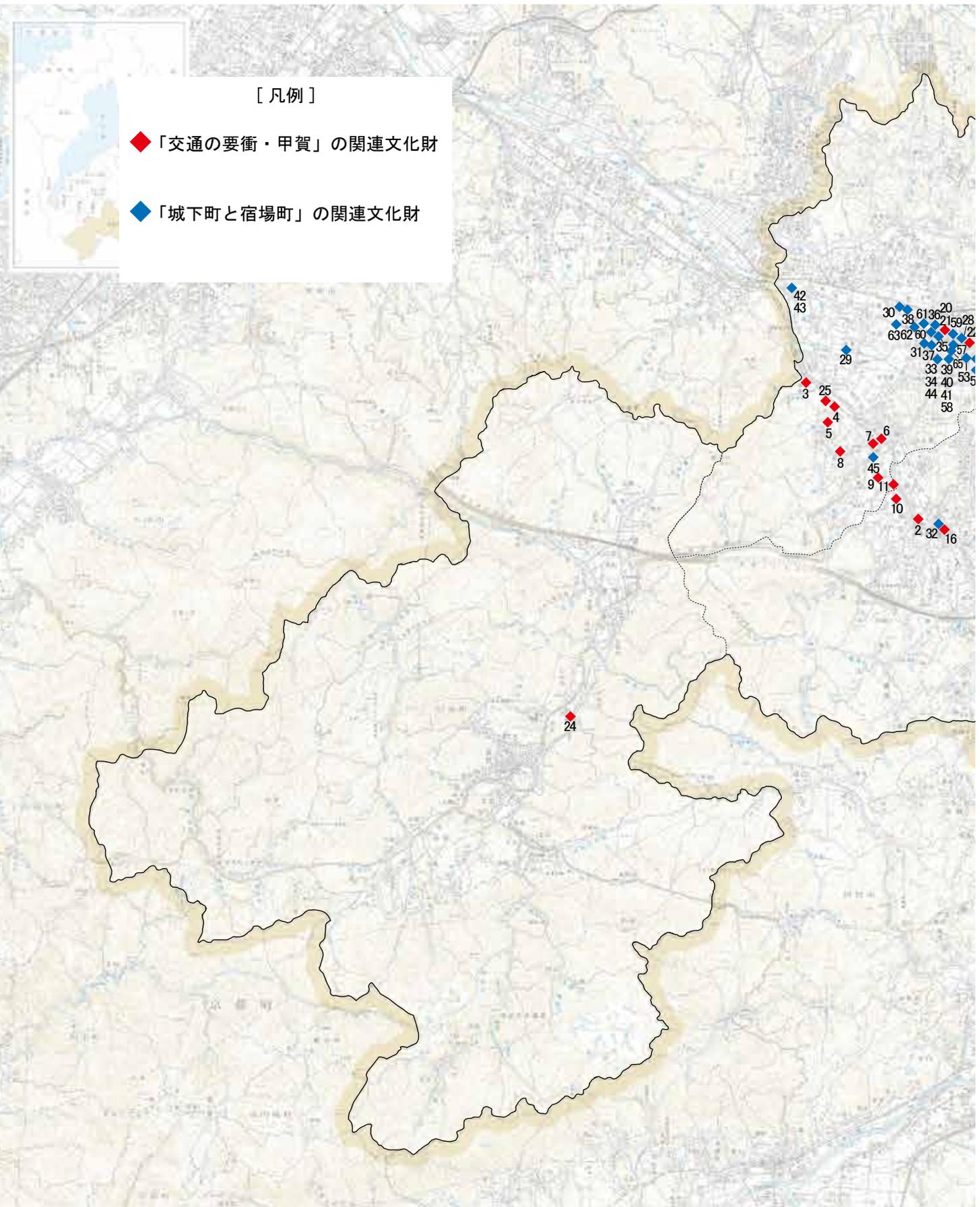


▲水口岡山城と水口宿

表 2-8 「道と交通、城下町・宿場町」を構成する主な文化財等

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
① 交通の要衝・甲賀	1	六角堂	建造物	江戸	甲南町寺庄	市指定
	2	仁木家住宅洋館	建造物	大正	甲南町深川市場	国登録
	3	岩坂十三仏	石仏	江戸	水口町岩坂	
	4	笠山神社	有形民俗		水口町高山	
	5	瘡山神社道標	有形民俗	江戸	水口町高山	
	6	金刀比羅神社道標	無形民俗		水口町三本柳	
	7	金刀比羅神社人形奉納	無形民俗		水口町三本柳	
	8	三本柳道標	有形民俗		水口町三本柳	
	9	天保義民供養等(西蓮寺)	建造物		水口町杣中	
	10	天保義民供養等(西願寺)	建造物		甲南町市原	
	11	天保義民メモリアルパーク	その他(施設)		甲南町森尻	
	12	堀田陣屋跡	その他(陣屋跡)	江戸	甲賀町高野	
	13	田堵野道標	有形民俗	江戸	甲賀町田堵野	
	14	極楽寺前道標	有形民俗	江戸	甲賀町上野	
	15	五反田道標	有形民俗		甲賀町五反田	
	16	伊賀街道道標	有形民俗	明治	甲南町深川	
	17	垂水斎王頓宮跡	官衙	平安	土山町頓宮	国指定
	18	不動一尊種子板碑	歴史資料	室町	土山町瀬ノ音	市指定
	19	御代参街道道標	有形民俗	江戸	土山町北土山	
	20	日本基督教団水口教会礼拝堂	建造物	昭和	水口町城東	国登録
	21	日本基督教団水口教会門柱	建造物	昭和	水口町城東	国登録
	22	旧水口図書館	建造物	昭和	水口町本町	国登録
	23	旧滋賀銀行甲南支店	建造物	大正	甲南町寺庄	国登録
	24	信楽高原鐵道第一大戸川橋梁	建造物	昭和	信楽町勅旨	国登録
	25	国分橋梁	建造物	明治	水口町高山	
② 城下町と宿場町	26	古城山きん青石	天然記念物		水口町水口	市指定
	27	水口岡山城跡	城館跡	安土桃山	水口町水口	国指定
	28	大徳寺山門	建造物	江戸	水口町本町	
	29	一之井・二之井	その他(用水)		水口町	
	30	姫塚	その他(伝承地)		水口町北脇	
	31	水口城跡	城館跡	江戸	水口町本丸	県指定
	32	水口藩加藤家文書	書跡・典籍・古文書	桃山～大正	甲南町深川	県指定
	33	水口藩大庄屋山村家諸事書留	書跡・典籍・古文書	江戸～明治	水口町水口	市指定
	34	水口歴史民俗資料館	その他(施設)		水口町水口	
	35	藤栄神社、十字形洋剣	工芸品	江戸	水口町梅が丘	
	36	巖谷一六旧居跡	その他(伝承地)		水口町城東	
	37	水口城資料館	その他(施設)		水口町本丸	
	38	柏木神社	絵画、書跡・典籍・古文書、城館跡	鎌倉他	水口町北脇	県指定(絵画)
	39	水口曳山祭	無形民俗		水口町水口	県指定
	40	曳山	有形民俗	江戸～明治	水口町水口	市指定
	41	曳山の山蔵	有形民俗	近現代		
	42	旧東海道横田渡跡	史跡	江戸～明治	水口町泉	県指定
	43	横田渡常夜灯	工芸品	江戸	水口町泉	市指定
	44	東海道水口宿文書	書跡	江戸～大正	水口町水口	市指定

サブ区分	番号	名称	種類	時代	地域	指定等
② 城下町と宿場町	45	庚申山広徳寺三猿石造道標	有形民俗	江戸	水口町山上	市指定
	46	今郷一里塚跡	その他(一里塚跡)		水口町今郷	
	47	和野道標	有形民俗	江戸	水口町和野	
	48	岩神社	その他(伝承地)		水口町今郷～新城	
	49	新城観音堂絵馬	有形民俗	江戸～明治	水口町新城	
	50	新城磨崖仏	石仏		水口町新城	
	51	水口宿本陣跡	その他(本陣跡)	江戸	水口町元町	
	52	水口宿高札場跡	その他(高札場跡)	江戸	水口町元町	
	53	三筋町	その他(景観)		水口町	
	54	大岡寺(芭蕉句碑)	その他(句碑)	江戸	水口町京町	
	55	水口宿問屋場跡	その他(問屋場跡)	江戸	水口町京町	
	56	善福寺	その他(伝承地)		水口町高塚	
	57	石橋	その他(景観)		水口町本町・鹿深	
	58	水口神社	彫刻、無形民俗	鎌倉他	水口町宮の前	国指定彫刻)
	59	ひとまち街道交流館	その他(施設)		水口町八坂	
	60	鋭角に曲がる東海道	その他(景観)		水口町	
	61	真徳寺表門	建造物		水口町城内	
	62	林口一里塚跡	その他(一里塚跡)		水口町林口	
	63	北脇松並木	その他(景観)		水口町北脇	
	64	干瓢	その他(特産)		水口町水口	
	65	水口細工・藤八幡宮	その他(特産)		水口町水口・梅が丘	
	66	「よみがえれ水口岡山城」イベント	その他(行事)		水口町水口	
	67	東海道具山宿本陣土山家文書	書跡・典籍・古文書	江戸	土山町北土山	市指定
	68	東海道具山宿文書	書跡・典籍・古文書	江戸～大正	土山町北土山	市指定
	69	鈴鹿峠	その他(景観)		土山町山中	
	70	万人講常夜灯	工芸品	江戸	土山町山中	
	71	猪鼻立場跡	その他(立場跡)		土山町猪鼻	
	72	蟹塚	建造物(景観)		土山町南土山	
	73	蟹ヶ坂飴	その他(特産)		土山町南土山	
	74	田村神社	絵画、書跡・典籍・古文書	江戸	土山町北土山	
	75	扇屋伝承文化館	その他(施設)		土山町北土山	
	76	白川神社	無形民俗等		土山町南土山	県選択
	77	森鷗外旧跡	その他(伝承地)		土山町南北土山	
	78	東海道伝馬館	その他(施設)		土山町北土山	
	79	土山宿本陣跡	建造物、書跡・典籍・古文書	江戸他	土山町北土山	
	80	常明寺	書跡、絵画等	奈良、南北朝	土山町南土山	国指定書跡)
81	地安寺	建造物、書跡等	江戸	土山町前野		
82	東海道松並木	その他(景観)		土山町大野・徳原		
83	大野立場跡	その他(立場跡)	江戸	土山町大野		
84	若王寺	彫刻等	室町	土山町大野		
85	山口重成石碑	歴史資料	江戸	土山町大野		
86	あいの土山宿場まつり	その他(行事)		土山町北土山・南土山		



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の5万分1地形図を使用した。
 (承認番号 令元情使、第 872 号)

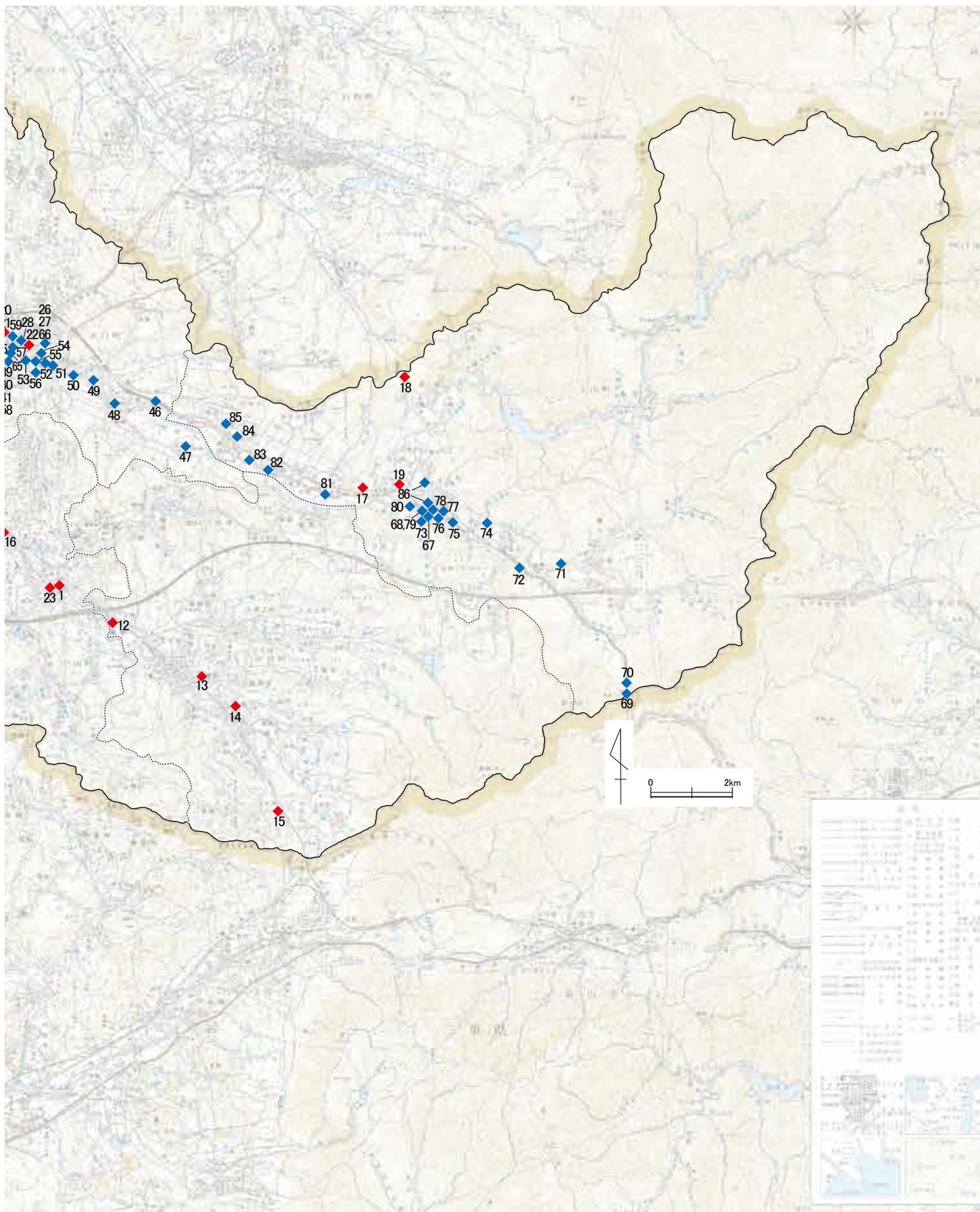


図 2-8 「道と交通、城下町・宿場町」を構成する主な文化財の分布

ストーリー4 甲賀の豊かな宗教文化

① 甲賀の人々を見守る神と仏

甲賀の地では、仏教や神道にとどまらない豊かな宗教文化が育まれた。「いのりとまつり」の場として市内に点在する寺院・神社・霊山などの数々の宗教的拠点がそのことを示している。八百万ともよばれる大小無数の神々は、甲賀でも早くから信仰の対象となっていたであろう。そうした神々のうち、平安時代の「延喜式神名帳」に矢川神社や川田神社など六社八座の「式内社」が記され、勅選の史書である「六国史」には「国史見在社」として油日神社の名が現れる。中世になると、これらの神社をはじめ荘園や郷という広域で崇敬を集めた荘鎮守や郷鎮守が登場し、市内の地域ごとに勢力を張った土豪を中心に、地域住民の精神的拠り所となっていた。甲賀武士の代名詞ともいえる「同名中」や「郡中惣」に参加した武士たちは、こうした有力神社で寄合を行い、神前で作成された様々な戦国時代の誓約書や掟書が市内各地に残されている。



▲油日神社楼門及び廻廊（甲賀町油日）

一方、奈良時代に伝来した仏教でも拠点寺院が展開した。まず挙げられるのが、奈良時代、聖武天皇が鎮護国家の願いを込めた盧舎那大仏建立の舞台となった甲賀寺である。事業自体は未完に終わったとはいえ、甲賀の寺院史の端緒である。平安時代になると天台宗の教線が甲賀に波及し、大原谷の櫛野寺をはじめとした拠点寺院が開かれて、平安古像の一大造像地の様相を呈した。中世から戦国時代にかけては、台頭してきた甲賀武士たちの氏寺造営が進んだ。特に浄土宗寺院が増加し、甲賀武士の雄・山中氏の氏寺である唯称寺や、浄土宗布教の拠点ともなった滝の称名寺はその一例である。

宗派ごとの分布に注目すると、浄土宗が最も多く、江戸時代に村ごとに置かれた旦那寺がその中心をなす。次いで多いのは杣谷を中心に教線を延ばした天台宗で、神社の神宮寺をはじめとする祈願寺などが該当する。また、土山町域に多い臨済宗をはじめとする禅宗がこれに続くが、真宗や日蓮宗はわずかである。

さらに、甲賀の宗教的環境を語るうえで忘れてはならないのが修験（山伏）の存在である。修験道は役小角に始まるという山岳信仰と結び付いた密教系の宗教であり、甲賀では飯道山の山頂にある飯道寺がその中心であった。特に中世に発展した吉野・熊野・大峰といった大規模霊場とのつながりが強く、中世から江戸時代にかけては、全国的にも名の知れた有力寺院であった。江戸時代にはふもとの村に暮らしつつ、遠方まで配札活動を行った「里山伏」の活動が活発化し、霊山である飯道山および庚申山・岩尾山のふもとを中心に、今でもその痕跡が残されている。

このように、甲賀では霊山を拠点とする修験が大きなウェイトを占め、神仏習合の歴史文化とも相まって、独特で多様な宗教的環境が形成された。



▲新宮神社表門（甲南町新治）



▲飯道山護摩（水口町三大寺）

② かくれ里のいにしへの仏たち

「仏像の宝庫」と呼ばれる近江にあって、甲賀市域は「平安・鎌倉の仏教美術の宝庫」とうたわれるほどに仏像と縁の深い土地柄である。110件を超える国・県・市の指定文化財を有し、質・量ともに屈指である。それは、敏達天皇13（584）年に百済から弥勒石仏を持ち帰ったという鹿深臣の存在や、奈良時代の聖武天皇発願による盧舎那大仏造立計画、さらには白鳳時代にさかのぼる遺品の伝世など、古代以来の仏教文化に裏打ちされたものである。そしてこれらの中心をなすのは、平安仏と鎌倉仏である。

日本に荘園制度が広がった古代・中世、甲賀でも荘園の設置とともに数多くの仏像群が作られるようになった。中でも古代にスギやヒノキなどの森林におおわれていた杣川流域は、奈良時代に平城京などの建築用材を供給する官営の「甲賀杣」が設置された地域である。平安時代には、藤原氏や東大寺・延暦寺などの有力寺社が森林資源などを確保するため甲賀に荘園を設けるようになるが、杣や荘園経営の一環で造営された寺院に安置された仏像が今日に伝わった例も多いと考えられる。

また平安時代は、比叡山延暦寺の影響のもと、甲賀にも進出した天台勢力が櫛野寺や善水寺（湖南市）などの大規模な拠点寺院を造営し、その工房で次々と仏像を製作して各地に安置していった時代でもある。当初は杣川沿いに広まり、その後まもなくして、野洲川流域や信楽にも及んだことが各寺の仏像群から推定できる。白洲正子の紀行文『かくれ里』にも紹介される櫛野寺には20体もの平安仏が伝わっているが、中でも本尊の「十一面観音坐像」（重要文化財、像高3.3メートルは重文で最大）は、平安時代の甲賀における仏像製作の隆盛を示すものである。今でも「いちいの観音様」の名で親しまれて地域のシンボルとなっている。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては、極楽浄土への往生を願う浄土宗の広まりを反映して、90センチメートル前後の阿弥陀如来立像が多数製作されるようになる。また、より身近な信仰対象としての地藏菩薩像や、毘沙門天立像もまとまった数がみられる。在地領主の持仏堂に安置されたものと合わせ、地域社会と密接に結び付いた仏像が増えてくる時期である。

一方の鎌倉仏は、平安仏より少ないものの、平安時代後期に始まる定朝様を踏まえた基準作を含む優品が広く造像されており、甲賀の地が引き続き仏教文化とともにあったことがうかがえる。

このように、甲賀には平安時代から鎌倉時代にかけての古像が数多く残されており、学術的にも非常に価値の高い一群である。むろんそれは、江戸時代以降に旦那寺のかたちで村ごとに展開した浄土宗寺院などに安置された新しい時代の仏たちとともに、地域社会における信心の拠り所として守り伝えられてきたからこそである。その意味で、江戸時代に始まる甲賀西国巡礼や杣の六地藏巡りなどは、甲賀の分厚い仏教文化が基礎となり、その一部は現在にも受け継がれている。甲賀の仏たちは、過去の人々と現在の我々をつないでくれる存在ともいえるのである。

そのほか、甲賀には、奈良時代から流布する一大経典「大般若経」が多く伝えられており、とくに、土山町の常明寺（二十七帖）、太平寺（百四十二帖）、見性庵（四十三帖）などは、奈良時代に長屋王の発願により書写されたもので、現存最古の大般若経として国宝・重要文化財に指定されている。

一方、水口神社や矢川神社などには、仏教の影響を強く受け、神の姿を木彫りで表現する「神像」が伝えられている。天台宗の広がりや荘園経営と深く結びついた寺院に寄り添ったかたちで神社の造営が行われ、その時作られたものと考えられている。このほか、神仏習合を示すものとして、柱や壁にかけて信仰の対象にした「懸仏」があるが、平安時代、神仏習合の飯道寺として栄えた飯道神社で、約千体の「懸仏」が発見されている。



▲櫛野寺木造十一面観音坐像

表 2-9 「甲賀の豊かな宗教文化」を構成する主な文化財等

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
① 甲賀の人々を見守る神と仏	1	飯道神社・飯道山遺跡	飯道神社/ 区管理地	史跡	奈良～明治	信楽町宮町	市指定
	2	八坂神社本殿	八坂神社	建造物	桃山	水口町巖峨	国指定
	3	加茂神社本殿	加茂神社	建造物	室町	土山町青土	国指定
	4	油日神社本殿	油日神社	建造物	室町	甲賀町油日	国指定
	5	油日神社桜門及び廻廊	油日神社	建造物	室町	甲賀町油日	国指定
	6	油日神社拝殿	油日神社	建造物	桃山	甲賀町油日	国指定
	7	新宮神社表門	新宮神社	建造物	室町	甲南町新治	国指定
	8	飯道神社本殿	飯道神社	建造物	江戸	信楽町宮町	国指定
	9	木造女神坐像	水口神社	彫刻	鎌倉	水口町宮の前	国指定
	10	木造地藏菩薩半跏像	智禅院	彫刻	鎌倉	水口町伴中山	国指定
	11	木造神像	大鳥神社	彫刻	平安	甲賀町鳥居野	国指定
	12	大般若経	常明寺	書跡	奈良	土山町南土山	国指定
	13	大般若経	太平寺	書跡	奈良	土山町鮎河	国指定
	14	大般若経	見性庵	書跡	奈良	土山町鮎河	国指定
	15	矢川神社楼門	矢川神社	建造物	室町	甲南町森尻	県指定
	16	檜尾神社本殿	檜尾神社	建造物	江戸	甲南町池田	県指定
	17	三所神社本殿	三所神社	建造物	江戸	信楽町上朝宮	県指定
	18	福太夫面附ずい子	油日神社	彫刻	室町	甲賀町油日	県指定
	19	飯道神社懸仏	飯道神社	工芸品	平安～江戸	信楽町宮町	県指定
	20	大般若波羅蜜多経	地福寺	書跡・典籍・ 古文書	平安～室町	土山町山女原	県指定
	21	版本妙法蓮華経	櫟野寺	書跡・典籍・ 古文書	南北朝	甲賀町櫟野	県指定
	22	三十八社本殿	三十八社	建造物	江戸	水口町伴中山	市指定
	23	天満神社本殿	天満神社	建造物	室町	水口町高山	市指定
	24	大鳥神社本殿	大鳥神社	建造物	江戸	甲賀町鳥居野	市指定
	25	矢川神社本殿	矢川神社	建造物	江戸	甲南町森尻	市指定
	26	八坂神社鳥居	八坂神社	建造物	江戸	信楽町柞原	市指定
	27	絹本著色聖徳太子絵伝	油日神社	絵画	室町	甲賀町油日	市指定
	28	絹本著色十一尊 曼荼羅図	油日神社	絵画	室町	甲賀町油日	市指定

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
① 甲賀の人々を見守る神と仏	29	絹本著色千手観音 三尊曼荼羅図	油日神社	絵画	室町	甲賀町油日	市指定
	30	絹本著色弁才天 三尊曼荼羅図	油日神社	絵画	室町	甲賀町油日	市指定
	31	絹本著色十二天像図	油日神社	絵画	江戸	甲賀町油日	市指定
	32	飯道山惣絵図	宮町区	絵画	江戸	信楽町宮町	市指定
	33	木造男神坐像 (八坂神社本殿安置) 木造男神坐像 (境内社天神社安置)	八坂神社	彫刻	平安	水口町巖峨	市指定
	34	木造神像	矢川神社	彫刻	平安～南北朝	甲南町森尻	市指定
	35	鉄湯釜	大鳥神社	工芸品	桃山	甲賀町鳥居野	市指定
	36	梵鐘	油日神社	工芸品	江戸	甲賀町油日	市指定
	37	油日神社懸仏群	油日神社	工芸品	室町～江戸	甲賀町油日	市指定
	38	鰐口	新宮神社	工芸品	室町	信楽町長野	市指定
	39	大般若経	大池寺	書跡	鎌倉～室町	水口町名坂	市指定
	40	種子三千仏	大鳥神社	書跡	室町	甲賀町鳥居野	市指定
	41	種子三千仏	油日神社	書跡	室町	甲賀町油日	市指定
	42	大般若経	誓蓮寺	書跡	平安～江戸	甲南町上馬杉	市指定
	43	矢川神社文書	矢川神社	書跡	江戸～昭和	甲南町森尻	市指定
	44	日雲神社本殿	日雲神社	建造物	江戸	信楽町牧	国登録
	45	杉尾神社本殿	杉尾神社	建造物	江戸	信楽町杉山	国登録
	46	高宮神社本殿	高宮神社	建造物	江戸	信楽町多羅尾	国登録
	47	二童子神社本殿	二童子神社	建造物	江戸	信楽町中野	国登録
	48	大鳥神社祝詞殿(中門)	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	49	大鳥神社拜殿	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	50	大鳥神社神楽殿	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	51	大鳥神社神饌所	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	52	大鳥神社神輿蔵	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	53	大鳥神社楼門	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
	54	大鳥神社社務所	大鳥神社	建造物	大正	甲賀町鳥居野	国登録
55	火頭古神社本殿	火頭古神社	建造物	江戸	土山町猪鼻	国登録	
56	八坂神社本殿	八坂神社	建造物	江戸	信楽町柞原	国登録	

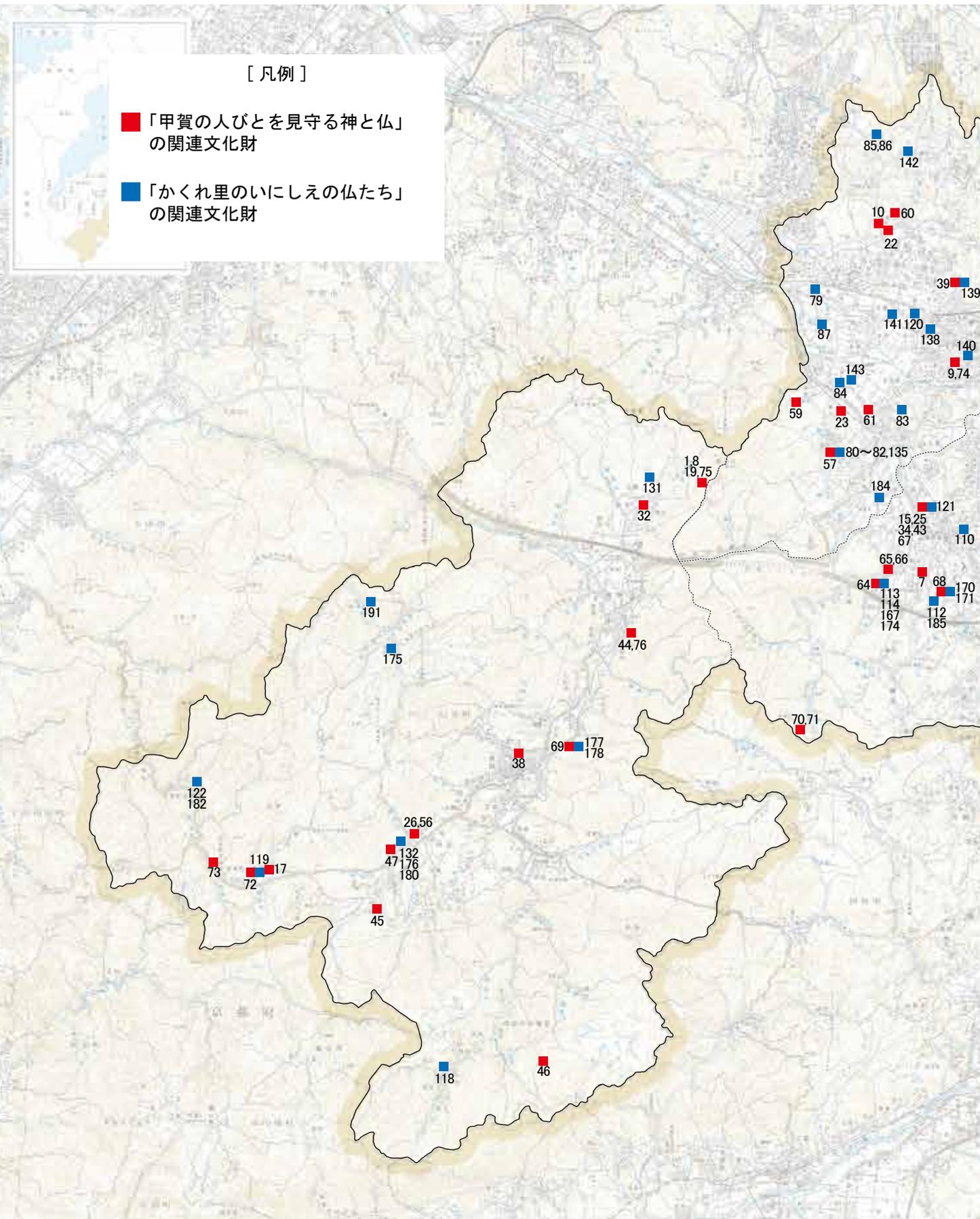
サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等	
①甲賀の人々を見守る神と仏	57	飯道寺の笈渡し	飯道寺	無形民俗		水口町三大寺		
	58	八坂神社下馬橋	八坂神社	建造物	江戸	水口町巖峨	市指定	
	59	最勝寺宝塔	最勝寺	建造物	鎌倉	水口町岩坂	市指定	
	60	石造宝篋印塔	清福寺	建造物	南北朝	水口町伴中山	市指定	
	61	石造宝篋印塔	西福寺	建造物	鎌倉	水口町貴生川	市指定	
	62	石造宝篋印塔	瀧樹神社	建造物	鎌倉	土山町前野	市指定	
	63	大鳥神社石造反橋	大鳥神社	建造物	江戸	甲賀町鳥居野	市指定	
	64	石造宝篋印塔	正福寺	建造物	南北朝	甲南町杉谷	市指定	
	65	石造宝篋印塔	勢田寺	建造物	鎌倉	甲南町杉谷	市指定	
	66	石造宝篋印塔	勢田寺	建造物	鎌倉	甲南町杉谷	市指定	
	67	矢川神社太鼓橋	矢川神社	建造物	江戸	甲南町森尻	市指定	
	68	石造宝篋印塔	金竜院	建造物	鎌倉	甲南町竜法師	市指定	
	69	石造五輪塔	玉桂寺	建造物	鎌倉	信楽町勅旨	市指定	
	70	磨崖地藏菩薩坐像	息障寺	彫刻	南北朝	甲南町杉谷	市指定	
	71	磨崖不動明王立像	息障寺	彫刻	室町初期	甲南町杉谷	市指定	
	72	仙禅寺跡磨崖石仏	誓光寺	彫刻	鎌倉	信楽町上朝宮	市指定	
	73	石造阿弥陀如来立像	徳源寺	彫刻	室町末期	信楽町下朝宮	市指定	
	74	石燈籠	水口神社	工芸品	南北朝	水口町宮の前	市指定	
	75	飯道山石燈籠	飯道神社	工芸品	鎌倉末期	信楽町宮町	市指定	
	76	六角形石燈籠	日雲神社	工芸品	鎌倉	信楽町牧	市指定	
	②かくれ里のいにしへの仏たち	77	木造阿弥陀如来坐像	願隆寺	彫刻	平安	水口町松尾	国指定
		78	木造日光月光菩薩立像	願隆寺	彫刻	平安	水口町松尾	国指定
		79	木造地藏菩薩坐像	泉福寺	彫刻	鎌倉	水口町泉	国指定
		80	木造阿弥陀如来坐像	飯道寺	彫刻	平安	水口町三大寺	国指定
		81	木造地藏菩薩立像	飯道寺	彫刻	鎌倉	水口町三大寺	国指定
		82	木造十一面観音立像	飯道寺	彫刻	平安	水口町三大寺	国指定
83		木造大日如来坐像	福照寺	彫刻	平安	水口町貴生川	国指定	
84		木造地藏菩薩立像	永昌寺	彫刻	平安	水口町宇川	国指定	
85		木造阿弥陀如来坐像	西栄寺	彫刻	平安	水口町八田	国指定	
86		木造薬師如来坐像	西栄寺	彫刻	平安	水口町八田	国指定	

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
②かくれ里のいにしへの仏たち	87	木造如意輪観音坐像	持宝寺	彫刻	鎌倉	水口町酒人	国指定
	88	木造十一面千手観音立像	千光寺	彫刻	平安	水口町巖峨	国指定
	89	木造大日如来坐像	長松寺	彫刻	平安	土山町黒川	国指定
	90	木造釈迦如来坐像	清凉寺	彫刻	鎌倉	土山町青土	国指定
	91	木造阿弥陀如来坐像	阿弥陀寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	92	木造聖観音立像	阿弥陀寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	93	木造十一面観音坐像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	94	木造聖観音立像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	95	木造薬師如来坐像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	96	木造毘沙門天立像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	97	①木造聖観音立像 ②木造聖観音立像 ③木造十一面観音立像 ④木造地藏菩薩立像 ⑤木造吉祥天立像 ⑥木造吉祥天立像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	98	①木造聖観音立像 ②木造聖観音立像 ③木造聖観音立像 ④木造聖観音立像 ⑤木造聖観音立像 ⑥木造十一面観音立像 ⑦木造十一面観音立像 ⑧木造地藏菩薩立像 ⑨木造吉祥天立像	櫛野寺	彫刻	平安	甲賀町櫛野	国指定
	99	木造地藏菩薩坐像	櫛野寺	彫刻	鎌倉	甲賀町櫛野	国指定
	100	木造十一面観音立像	常光寺	彫刻	平安	甲賀町大原上田	国指定
	101	木造阿弥陀如来坐像	長福寺	彫刻	平安	甲賀町大原中	国指定
	102	木造仏頭	長福寺	彫刻	平安	甲賀町大原中	国指定
	103	木造聖観音坐像	長福寺	彫刻	平安	甲賀町田堵野	国指定
	104	木造薬師如来坐像	龍福寺	彫刻	平安	甲賀町滝	国指定
	105	木造十一面観音立像	光明寺	彫刻	平安	甲賀町五反田	国指定
106	木造地藏菩薩立像	安楽寺	彫刻	平安	甲賀町小佐治	国指定	
107	木造聖観音立像	妙音寺	彫刻	平安	甲賀町小佐治	国指定	
108	木造薬師如来坐像	大岡寺	彫刻	平安	甲賀町隠岐	国指定	
109	木造聖観音立像	大福寺	彫刻	平安	甲賀町岩室	国指定	

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
②かくれ里のいしえの仏たち	110	木造十一面 千手観音坐像	浄福寺	彫刻	鎌倉	甲南町深川	国指定
	111	木造千手観音立像	桧尾寺	彫刻	鎌倉	甲南町池田	国指定
	112	木造地藏菩薩坐像	嶺南寺	彫刻	鎌倉	甲南町竜法師	国指定
	113	木造十一面観音立像	正福寺	彫刻	平安	甲南町杉谷	国指定
	114	木造釈迦如来坐像	正福寺	彫刻	平安	甲南町杉谷	国指定
	115	木造十一面観音及 両脇侍立像	伊勢廻寺	彫刻	南北朝	甲南町野川	国指定
	116	木造十一面観音立像	福竜寺	彫刻	平安	甲南町下馬杉	国指定
	117	木造薬師如来坐像	誓蓮寺	彫刻	平安	甲南町上馬杉	国指定
	118	木造聖観音立像	浄顕寺	彫刻	平安	信楽町多羅尾	国指定
	119	木造十一面観音立像/ 像内納入品 御衣木断片、墨書紙片	誓光寺	彫刻	平安	信楽町上朝宮	国指定
	120	絹本著色不動明王 二童子像	柏木神社	絵画	鎌倉	水口町北脇	県指定
	121	棋書仙人図・山水図	矢川神社	絵画	江戸	甲南町森尻	県指定
	122	絹本著色 阿弥陀如来三尊像	本覚寺	絵画	南北朝	信楽町宮尻	県指定
	123	木造聖観音立像	永雲寺	彫刻	平安	土山町北土山	県指定
	124	木造十一面観音立像	白毫寺	彫刻	平安	土山町野上野	県指定
	125	木造薬師如来立像	阿弥陀寺	彫刻	平安	甲賀町櫟野	県指定
	126	木造弥勒菩薩坐像	櫟野寺	彫刻	南北朝	甲賀町櫟野	県指定
	127	木造地藏菩薩坐像	福明寺	彫刻	鎌倉	甲賀町高嶺	県指定
	128	木造十一面観音立像	大岡寺	彫刻	平安	甲賀町隠岐	県指定
	129	木造阿弥陀如来坐像	香蓮寺	彫刻	平安	甲賀町隠岐	県指定
130	木造大日如来坐像	八田組大日堂	彫刻	南北朝	甲南町池田	県指定	
131	木造薬師如来坐像	大日寺	彫刻	平安	信楽町宮町	県指定	
132	木造阿弥陀如来及 両脇侍立像	来迎寺	彫刻	鎌倉	信楽町中野	県指定	
133	六角堂	慈音院	建造物	江戸	甲南町寺庄	市指定	
134	絹本著色 阿弥陀如来四尊来迎図	永福寺	絵画	鎌倉	水口町新城	市指定	
135	絹本著色両界曼荼羅図	飯道寺	絵画	室町	水口町三大寺	市指定	

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
②かくれ里のいにしへの仏たち	136	絹本著色山越阿弥陀図	称名寺	絵画	室町	甲賀町滝	市指定
	137	絹本著色当麻曼荼羅図	称名寺	絵画	室町	甲賀町滝	市指定
	138	木造阿弥陀如来立像	心光寺	彫刻	平安	水口町城東	市指定
	139	木造釈迦如来坐像	大池寺	彫刻	平安	水口町名坂	市指定
	140	木造阿弥陀如来立像	蓮華寺	彫刻	平安	水口町松栄	市指定
	141	木造阿弥陀如来立像	浄福寺	彫刻	平安	水口町北脇	市指定
	142	木造大日如来坐像	溪蓮寺	彫刻	平安	水口町春日	市指定
	143	木造阿弥陀如来立像	称名寺	彫刻	平安	水口町宇川	市指定
	144	木造阿弥陀如来坐像	十楽寺	彫刻	平安	土山町山中	市指定
	145	木造十一面観音立像	十楽寺	彫刻	鎌倉後期	土山町山中	市指定
	146	木造摩耶夫人立像	十楽寺	彫刻	室町	土山町山中	市指定
	147	木造毘沙門天立像	東光寺	彫刻	平安後期	土山町頓宮	市指定
	148	木造釈迦如来坐像	櫛野寺	彫刻	平安末期	甲賀町櫛野	市指定
	149	銅造誕生釈迦仏立像	阿弥陀寺	彫刻	奈良	甲賀町櫛野	市指定
	150	木造聖観音立像	常光寺	彫刻	平安末期	甲賀町大原上田	市指定
	151	木造多聞天立像	多聞寺	彫刻	平安後期	甲賀町鳥居野	市指定
	152	木造十一面観音立像	補陀楽寺	彫刻	平安後期	甲賀町大原市場	市指定
	153	木造如意輪 観世音菩薩坐像	福生寺	彫刻	平安	甲賀町高野	市指定
	154	木造地藏菩薩立像	福生寺	彫刻	平安	甲賀町高野	市指定
	155	木造十一面 観世音菩薩立像	元龍寺	彫刻	平安	甲賀町滝	市指定
	156	木造阿弥陀如来立像	称名寺	彫刻	鎌倉	甲賀町滝	市指定
	157	木造聖観音立像	称名寺	彫刻	鎌倉	甲賀町滝	市指定
	158	木造薬師如来坐像	福明寺	彫刻	鎌倉	甲賀町高嶺	市指定
	159	木造阿弥陀如来坐像	福明寺	彫刻	鎌倉	甲賀町高嶺	市指定
	160	木造地藏菩薩立像	大岡寺	彫刻	鎌倉	甲賀町隠岐	市指定
	161	木造金剛力士像	櫛野寺	彫刻	鎌倉	甲賀町櫛野	市指定
	162	木造毘沙門天立像	常光寺	彫刻	鎌倉	甲賀町大原上田	市指定
	163	木造地藏菩薩半跏像	常光寺	彫刻	鎌倉	甲賀町大原上田	市指定
164	木造阿弥陀如来坐像	極楽寺	彫刻	平安	甲賀町上野	市指定	

サブ区分	番号	名称	所蔵	種別	時代	地域	指定等
②かくれ里のいにしへの仏たち	165	木造十一面観音立像	龍泉寺	彫刻	平安	甲賀町上野	市指定
	166	木造釈迦如来立像	檜尾寺	彫刻	鎌倉後期	甲南町池田	市指定
	167	木造地藏菩薩坐像	正福寺	彫刻	平安末期	甲南町杉谷	市指定
	168	木造阿弥陀如来坐像	誓蓮寺	彫刻	鎌倉	甲南町上馬杉	市指定
	169	木造阿弥陀如来坐像	八田組 大日堂	彫刻	平安	甲南町池田	市指定
	170	木造阿弥陀如来坐像	金竜院	彫刻	平安	甲南町竜法師	市指定
	171	木造阿弥陀如来立像	金竜院	彫刻	鎌倉	甲南町竜法師	市指定
	172	木造阿弥陀如来坐像	圓福寺	彫刻	鎌倉	甲南町野尻	市指定
	173	木造薬師如来坐像	圓福寺	彫刻	鎌倉	甲南町野尻	市指定
	174	木造金剛力士像	正福寺	彫刻	平安	甲南町杉谷	市指定
	175	聖観音立像	極楽寺	彫刻	奈良	信楽町田代	市指定
	176	木造薬師如来座像	来迎寺	彫刻	平安末期	信楽町中野	市指定
	177	木造阿弥陀如来座像	玉桂寺	彫刻	平安	信楽町勅旨	市指定
	178	木造五劫思惟 阿弥陀如来座像	玉桂寺	彫刻	室町	信楽町勅旨	市指定
	179	木造十一面観音立像	佛性寺	彫刻	平安	土山町平子	市指定
	180	木造地藏菩薩立像	来迎寺	彫刻	平安	信楽町中野	市指定
	181	木造不動明王立像	大久保区	彫刻	鎌倉	甲賀町大久保	市指定
	182	木造地藏菩薩立像	本覚寺	彫刻	鎌倉	信楽町宮尻	市指定
	183	木造阿弥陀如来及 両脇侍立像	善法院	彫刻	鎌倉	土山町大河原	
	184	木造飯縄権現立像	福量寺	有形民俗	江戸	水口町杉中	
185	飯縄権現像 (護法尊像図)	嶺南寺	有形民俗	江戸	甲南町竜法師		
186	鰐口	櫟野寺	工芸品	室町	甲賀町櫟野	市指定	
187	鰐口	岩室区	工芸品	室町	甲賀町岩室	市指定	
188	鰐口	慈音院	工芸品	室町	甲南町寺庄	市指定	
189	鉄湯釜	慈音院	工芸品	江戸	甲南町寺庄	市指定	
190	観音経	櫟野寺	書跡	鎌倉	甲賀町櫟野	市指定	
191	木造地藏菩薩立像	公益財団法人 秀明文化財団	彫刻	鎌倉	信楽町田代	国指定	



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の5万分1地形図を使用した。
(承認番号 令元情使、第 872 号)

ストーリー5 甲賀の祈りと祭り

① 春夏秋冬—暮らしの中の願い、祈り、そして感謝

民俗文化が豊かに残るとされる近江（滋賀県）にあって、甲賀にも多くの祭りや祭礼が伝承され、今なお見られるものが多い。それは毎年同じ時期に同じ内容を同じ担い手が繰り返すことで受け継がれ、祈りの心を満たすのみならず、共同体を維持する役割も担ってきた。それらは、内容やかたちから、いくつかに分けることができる。

まず挙げられるのが、地域や家の暮らしにけじめとリズムを与える「年中行事」である。特徴的なものは、特に正月と夏に集中している。正月に行われるは「オコナイ」や「山の神祭り」などは豊穰や山の恵みなどを願うものであり、正月から春にかけては、その年の豊作を祈る「御田祭」などの予祝行事が行われ、夏の稲が育つころには、害虫を追い払うための火を用いた虫送り各地で執り行われる。また、虫を流行病に読み換えれば、疫神を鎮め送るための祇園花行事（花奪い・ハナバイ）が市内に広く伝承されている。そのほか、夏の重要な年中行事として仏教色の強い盆行事があり、これらはいずれも生産・衛生・供養など人々の暮らしに近く、かつ季節ごとのメリハリを生み出すものとして受け継がれてきたとみてよい。

次に「宮座の祭り」がある。「宮座」とは、主に氏神の祭祀を行う組織のことで、座・講・オトナ・長老衆などともいい、中世以来の長い歴史をもつ。宮座のうち、特定の家々が世代を超えて構成するものを「株座」、一定の条件（年齢など）を満たした住人が構成するものを「村座」と呼ぶ。甲賀では信楽地域には株座が、野洲川・杣川流域には村座の事例が多い。株座の代表例である信楽町上朝宮の三所神社の宮座行事は中世の伝統を残している。一方で、野洲川・杣川流域では村座が主流を占めるが、それは、かつての祭祀の担い手であった甲賀武士たちの多くが影響力を失い、社会の在り方が変化したこと起因すると考えられる。

さらにより広域に執り行われる「郷の祭り」を忘れてはならない。これは一村ごとの氏神ではなく、複数の村からなる「郷」という単位で行われ、規模も大きい。その代表例が、古くは大原新荘の鎮守、のちに「甲賀の惣社」ともいわれた油日神社の「油日祭り」である。

これは、油日谷九カ村の広域の春祭りであるとともに、5年に一度行われる「奴振」の行列が同社をとりまく歴史を表現する一大絵巻としての意味合いももつ。そこでは、有力な甲賀武士の子孫の一つである上野家が「頭殿」と呼ばれる頭役を担い、家来役や奴役の者たちを従えた行列を組んで油日神社に参詣し、さらに御輿とともに氏子の村々を渡るといふもので、奴役の唄には同社の縁起も織り込まれて、歴史性に富む内容となっている。この形式自体は、江戸時代に整備されたものであるが、中世の甲賀武士の姿や、その後の歴史的変遷をみせるものとなっており、地域の「動く由緒書」と表現することもできるだろう。



▲水戸口にお札をたて豊作を祈る



▲奴振（油日神社・甲賀町油日）

② 甲賀が華やぐ「風流」の世界

関係者のみが執り行う「年中行事」に対し、第三者の目を意識して行われるものを「祭礼」と呼ぶ。その中でも太鼓や踊り・囃子^{はやし}などをともなう、華やか・にぎやかなものを特に「風流の祭り」と呼ぶことが多い。

現在甲賀に伝わる「太鼓踊り」や「ケンケト踊り」は、室町時代末期から江戸時代初期にかけて京都で興った「風流踊り」を原型とするものである。雨乞い神事の一つである太鼓踊りは、甲賀特有のものではなく、より広い地域に分布する祭礼文化の中で育まれてきたものである。しかし、現在甲賀に伝承されているものは、古い形態の都風の踊りや囃子、華やかな衣装がよく残されている点に特徴がある。また、油日神社の「奴振」は、郷単位の人々を動員して中世甲賀武士の威风を伝える代表的な郷祭りであるが、県外からの見物客も多く、風流の側面も持ち合わせている。

そして、甲賀においてもっとも風流を体現したのものとして特筆される祭礼が、^{ひきやま}曳山巡行をともなう「水口曳山祭」である。これは水口藩の城下町が生んだ都市祭礼で、水口神社の春祭りの中で奉納される。この祭りは、山・鉦・屋台が出る祭礼が全国の各都市で流行した流れの中で成立したもので、江戸時代中期の享保20（1735）年以来様々な趣向をこらして継続されてきた。その花形ともいえる曳山は水口では「ヤマ」と呼ばれ、曳山を収める「山蔵」が所有する町ごとに置かれ、城下町とともに宿場町でもある水口の町並みに彩りを添えている。

「二層露天四輪」という構造を持つ曳山の露天部には、「ダシ」と呼ばれる「作り物」が飾られ、二層目では町内の囃子たちによる「水口囃子」が演奏されるが、その調子は西日本では珍しいとされる江戸祭り囃子系である。風流はもともと流行を取り入れたものであるため、その変遷についてはなお解明すべきことも多いが、今では春の風物詩となって人々の耳目を楽しませている。

このように、厳かに静かに執り行われる祭祀とともに、にぎやかな風流の祭りが、水口曳山祭を始めとして大小さまざまなかたちで甲賀に根付いている点は、改めて甲賀の歴史文化・民俗文化の多様性を考える際の一つの指標になるだろう。



▲瀧樹神社のケンケト祭り（土山町前野）



▲祇園花行事（大鳥神社・甲賀町鳥居野）



▲水口曳山祭（水口神社・水口町水口）

表 2-10 「甲賀の祈りと祭り」を構成する主な文化財等

サブ区分	番号	名称	所蔵等	種別	時代	地域	指定等
① 春夏秋冬—暮らしの中の願い、祈り、そして感謝	1	福太夫面	油日神社	彫刻	室町	甲賀町油日	県指定
	2	古面	油日神社	彫刻	室町・江戸	甲賀町油日	市指定
	3	牛飼の宮守行事	牛飼区	無形民俗		水口町牛飼	県選択
	4	三所神社宮座建物及伝承行事	三所神社	有形民俗		信楽町上朝宮	市指定
	5	流鏝馬	椿神社	無形民俗		甲賀町隠岐	市指定
	6	池田のお田植え祭り	檜尾神社	無形民俗		甲南町池田	市指定
	7	オコナイ行事	市内一円	無形民俗			
	8	深川区有文書	深川区	書跡		甲南町深川	
	9	山の神行事	市内一円	無形民俗			
	10	御田祭	佐土神社	無形民俗		水口町西内貴	
	11	虫送り	市内一円	無形民俗			
	12	富士浅間信仰	市内一円	無形民俗			
	13	杣の六地藏参り	六角堂・善願寺・深川地藏堂・牛飼地藏堂・園光寺・法泉寺	無形民俗		甲南町寺庄・新治・深川、水口町・牛飼・三大寺・貴生川	
	14	大宮籠り	油日神社	無形民俗		甲賀町油日	
	15	宮送り	若宮神社	無形民俗		土山町大河原	
	16	宮迎え	若宮神社	無形民俗		土山町大河原	
	17	万灯祭	田村神社	無形民俗		土山町北土山	
	18	厄除大祭	田村神社	無形民俗		土山町北土山	
② 甲賀が華やぐ「風流」の世界	19	水口曳山祭天神町内幕	天神町	工芸品	江戸	水口町城東	市指定
	20	水口曳山祭天神町見送り幕	天神町	工芸品	江戸	水口町城東	市指定
	21	水口曳山祭旅籠町見送り幕	旅籠町	工芸品	江戸	水口町元町	市指定
	22	油日の太鼓踊	油日神社	無形民俗		甲賀町油日	国選択
	23	近江のケンケト祭り・長刀振り	瀧樹神社	無形民俗		土山町前野	国選択
	24	水口曳山祭	水口神社	無形民俗		水口町水口	県指定

サブ区分	番号	名称	所蔵等	種別	時代	地域	指定等
② 甲賀が華やぐ「風流」の世界	25	土山の太鼓踊 (山女原の花笠太鼓踊・ 黒川の花笠太鼓踊・黒 滝の花笠太鼓踊)	上林神社・ 大宮神社・ 惣王神社	無形民俗		土山町山女原・ 黒川・黒滝	県指定
	26	大原の祇園行事	大鳥神社	無形民俗		甲賀町鳥居野	県指定
	27	甲賀の祇園花行事	津島神社 (牛飼・和野・ 稗谷・新治・ 柑子)、 白川神社、 八坂神社 (森尻・杉谷・ 柞原)、 天満神社、 檜尾神社、 油日神社 (上馬杉)、 新宮神社、 神山神社、 里宮神社	無形民俗		水口町牛飼・和 野、土山町南土 山、甲南町竜法 寺・稗谷・池田・ 柑子・新治・上 馬杉・杉谷、信 楽町長野・多羅 尾・柞原・神山	県選択
	28	青土の太鼓踊	加茂神社	無形民俗		土山町青土	県選択
	29	奴振	油日神社	無形民俗		甲賀町油日	県選択
	30	日雲神社太鼓踊	日雲神社	無形民俗		信楽町牧	県選択
	31	曳山	17町内会	有形民俗		水口町水口	市指定
	32	すいりょう節	甲賀町 すいりょう節 保存会	無形民俗		甲賀町相模	市指定
	33	多羅尾太鼓踊	里宮神社	無形民俗		信楽町多羅尾	市指定

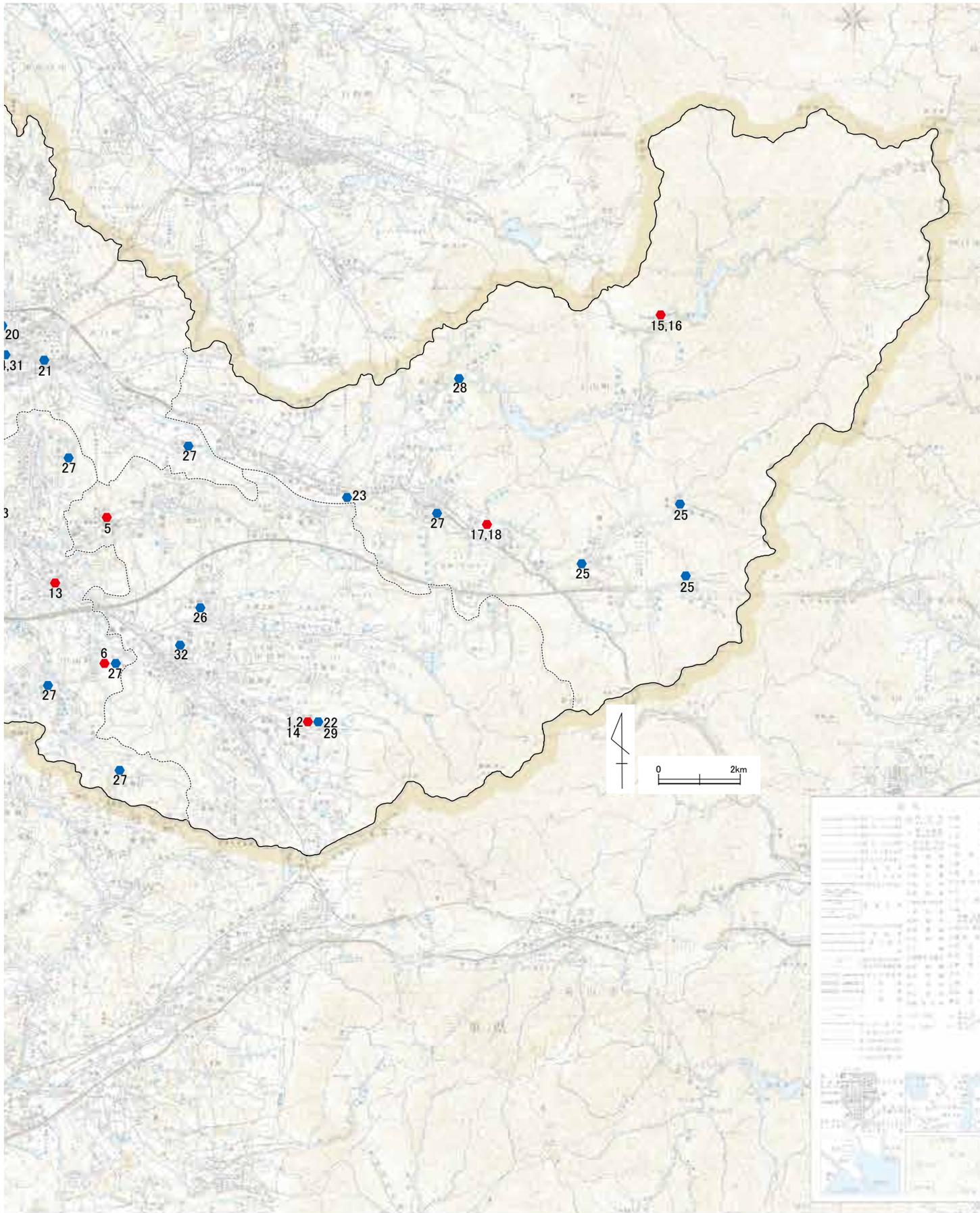


図 2-10 「甲賀の祈りと祭り」を構成する主な文化財の分布

ストーリー6 甲賀の^{なりわい}生業と暮らし

① 山の恵み、大地の恵み

甲賀は古くからその森林資源の豊富さが注目された地である。奈良時代には官営の^{そま}杣である「甲賀杣」が設置されて、都や大寺院を造営するための用材を供給した。平安時代に入っても引き続き^{とうだい}東大寺領の杣が信楽におかれるなど、その重要性は変わらなかった。それゆえ、甲賀では早くから伐木・製材などを^{こびき}なりわいとする杣・木挽、あるいは用材を用いて建築を行う大工の技術が発達したと考えられる。

中世の状況は不明だが、江戸時代初期には、徳川氏による二条城や京都御所の大規模作事に甲賀の大工や杣が多く動員されたことが史料に記されている。連綿と山の資源を扱う技術が伝承された甲賀の名は、広く知られていたのであろう。ちなみに、畿内を対象に動員された大工の数は近江国が多く、甲賀からも多くの大工がこの作事にたずさわった。彼らを総称して「甲賀大工」と呼ぶが、彼らは普段は町や村の住人として大工仕事を担い、大規模な作事がある時は甲賀大工としてその技能をいかに発揮した。もちろん彼らの中には宮大工もあり、市内の寺社を建立したことなどが修理の際に判明する事も多い。

これとは別に、江戸時代の中ごろに京都で修行をした^{ふくもと}福本氏が、故郷である水口町^{さんだいじ}三大寺に製材用の^{のこぎり}鋸である^{まえびきのこ}前挽鋸の製法を伝え、江戸時代後期には京都・播州三木・大坂とともに^{ばんしゅうみき}前挽鋸生産の一翼を担うまでに成長した。これは江戸時代の製材用具に対する幅広い需要の存在が前提としてあるにせよ、もともと製材用の鋸を扱える甲賀大工を始めとする杣・木挽などの山仕事に従事する技術者が甲賀に多かったからであろう。

甲賀の前挽鋸生産は近代以降にさらに発展し、明治時代後期から大正時代前期には杣川中流・下流域で製造された前挽鋸がシェアのほとんどを占めていた。これは、全国規模の鉄道網の整備や、郵便・電信などの通信網が充実したことが大きい。北海道を含む国内はもちろん、一部は朝鮮半島などにも流通していたほどで、「甲賀の前挽鋸」は圧倒的な存在感を持っていた。しかし、昭和に入って機械製材が導入され始めると急速に需要が減少し、昭和20年代末には前挽鋸製造・販売自体が社会的役割を終える。



▲甲賀の前挽鋸

なお、甲賀には山資源をめぐる重要なものとして、土山の山間部にあたる^{あゆかわ}鮎河・^{やまうち}山内地域の林業と「^{きじや}木地屋」伝承がある。伐採した原木を筏に組み野洲川を下って琵琶湖に出す^{いかだ}筏流しは野洲川ダムが完成する昭和26(1951)年まで見られた。また、この地域にはかつて木地師も居住していた。木地師は一般に^{これたか}惟喬親王(844～897)を職業の祖神とするが、土山には都を追われた親王が当地に流寓したという伝説がある。さらに、^{みかみろくしよ}三上六所神社には明治時代に木地師ゆかりの大皇神社が合祀されるなど、木地師に関係するものが多く残されている。

山が生み出す資源は、現代生活の中で希薄となり、身近なものとして感じられることは少なくなっ

てきた。とはいえ、古くから山の恵みとともにあった甲賀にとって、山のなりわいとそれにまつわる技術が根付いた歴史文化は、今後いっそう重要となってくるであろう。

② くすりのまち甲賀

日本の薬業は、山岳宗教や民間信仰とともに発達した部分が多いとされ、甲賀を特色づける「甲賀のくすり」も同様である。江戸時代、山岳修験しゅげんの中心であった飯道山はんどうの麓およびその周辺の村々に暮らした「里山伏さとやまぶし」は、伊勢神宮や多賀社、祇園社などに属して、そのお札を旦那場だんなの村々に配っていたが（配札はいさつ）、その際に土産物として薬を渡していたことが起源とされる。

明治時代に入って、修験の宗教活動としての配札行為が禁止されると、里山伏時代の旦那場はそのままだ得意先となり、お札ではなく薬を売り歩く生業に変化した。その先駆けとされる甲南町りゅう 竜法師ぼしの望月本実もちつきほんじつをはじめ、甲賀には里山伏から売薬業に転身した人が多い。

その後、甲賀町滝たきに住まいした渡辺詮吾わたなべせんごの尽力によって、大原おおはら・滝たき・毛枚もびら・油日あぶらひ方面で売薬・製薬が地場産業として根付き大いに発展するが、直接的にはこれが現在の「甲賀のくすり」のルーツとも言え、現在でも県内における薬業の中心的な位置を占める。

甲賀の売薬業は、得意先を廻って、預けておいた薬の使用具合に応じて代金を徴収する、いわゆる「配置売薬」という行商形式をとっていたことに特徴がある。主として農閑期にあたる冬場と、田植え作業が一段落した夏場に甲賀を出て、遠方の顧客を数ヶ月かけて訪ねて廻っていた。この配置売薬形態は、甲賀の薬業の基礎を築いた。今それを感じさせるものとして、里山伏であった家々に伝わる古文書類や、明治期に自宅の一室を薬の調合作業所に充てていた建物、それに付属する製造用具や製品などが残されており、往時の「甲賀のくすり」生産を目の当たりにできる環境がある点は甲賀ならではといえる。

中世以来の修験および山伏の知識と結びついて発展した「甲賀のくすり」文化は、里山伏や売薬業者たちの甲賀の内側にとどまらない活動や、柔軟な姿勢を学ぶことができる、またとない歴史的財産といえるだろう。



▲甲賀の配置売薬

③ 近江の茶所

甲賀市は、滋賀県内一の生産量を誇る茶産地でもある。信楽町朝宮あさみや地域で生産される「朝宮茶」と土山町で生産される「土山茶」は良質の煎茶として名高く、茶畑が広がる美しい景観を形づくっている。

甲賀の茶生産の始まりについては諸説あるが、史料では、室町時代の文明年間（1469～87）に信楽荘の代官多羅尾氏たらかおと土豪小河氏おがわが領主の近衛家このえに茶を献上したことを示す記述が最古である。その後、江戸時代中期には庶民の間で煎茶を飲む習慣が広がり、甲賀のお茶が広く知られるようになった。例えば「雨月物語」の著者上田秋成うげつも、寛政6（1794）年の「清風瑣言せいふうさげん」の中で信楽と土

山のお茶を高く評価している。東海道沿いの茶商の広告には安価なものから高級品までさまざまな銘柄の煎茶がならび、^{さんきんこうたい}参勤交代の諸大名や旅の途中にある公家などが宿駅本陣に宿泊した際、本陣当主から高級茶を献上されている事例もあり、庶民から大名・公家等にいたるまで、土山や朝宮などの甲賀のお茶が江戸時代には広く親しまれていたことが分かる。



▲土山の茶園

幕末の開港以降、明治時代になると、お茶は生糸と並んで日本の主要な輸出品となり、生産量も大幅に拡大した。その中核となったのが北土山・南土山・^{まえの}前野を中心とする土山

地域と、上朝宮・下朝宮・^{みやじり}宮尻を中心とする信楽地域、また新たな生産地として登場する^{ごたんだ}五反田・^{かみ}神・油日などの杣川上流域の大規模な茶畑であった。甲賀のお茶は、地元の茶業家が設立・参加した茶会社や茶組合を通じて、横浜・神戸などから世界に流通したのである。

第二次大戦後には、お茶は戦後復興を担う産品として注目され、昭和30（1955）年に茶原種農場が水口に新設され、平成17（2005）年には滋賀県農業技術振興センター茶業指導所となり、滋賀県内の茶業に関して指導的役割を果たす存在となっている。現在は、特に朝宮茶や土山茶などの名前で産地ブランド化が進められている。

茶業は、茶農家が一人で行うものではなく、茶摘みや製品化の過程で多くの人手を必要とする産業であった。例えば、土山では茶摘みや茶揉みなどのための労働力を土山近隣だけでなく、鈴鹿峠を挟んだ伊勢からも雇い入れていたが、その関係はすでに江戸時代から始まっている。またお茶は商品作物であるため、茶園の売買もそれなりの額面で行われたことが江戸時代の史料からも確認できる。

茶生産に適した土地と、お茶の消費・販売に適した東海道をはじめとする多くの街道に恵まれた甲賀にとって、お茶は単なる嗜好品や商品としての位置付けだけでなく、古くから甲賀をうるおし、深みを与え続ける、地域に根ざした恵みとしての価値もあろう。

④ 陶都 信楽と甲賀の焼物

甲賀は焼物の町である。その代表は六古窯の一つ^{ろっこやう}信楽焼だが、水口地域では古墳時代には^{すえき}須恵器が、平安時代には高級陶器「^{りよくゆう}緑釉陶器」が生産されており、江戸時代にも^{はつた}八田焼や水口焼などが焼かれた。つまり、甲賀の陶器生産は信楽地域だけで行われたわけではなく、「古琵琶湖層」などから採れる焼物に適した土が、広範囲での陶器生産を可能にしたのである。

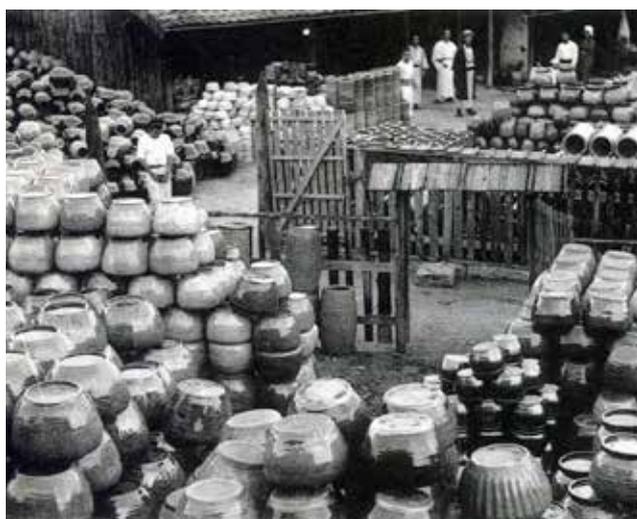
信楽焼は古琵琶湖層の陶土を原料とし、杣とも呼ばれたほどの豊かな森林資源の木材を燃料にして、鎌倉時代から今日まで約800年にわたり、焼物づくりの伝統を受け継いできた。鎌倉時代後期に^{とこなめ}常滑焼の製陶技術が伝わって成立し、はじめは高温で焼かれた^{やましめ}焼締陶器として、^{かめ}甕・^{つぼ}壺・^{はち}鉢などの大型の日常雑器のかたちで生産された。室町時代後期になると、茶の湯の道具として用いられるようになり、江戸時代前期にかけて水指をはじめとするいくつもの「名物」が生まれた。

江戸時代の信楽焼で有名なものといえば、宇治茶を将軍家に献上するための「御茶壺」として、^{ながの}長野村の窯で焼いた特製の「腰白茶壺」があげられる。

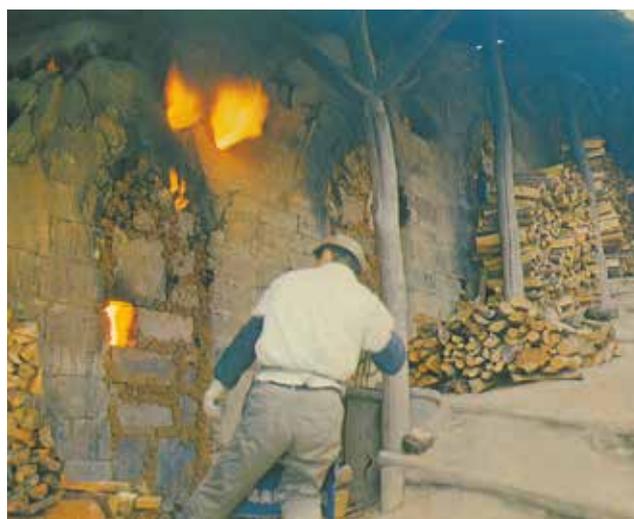
江戸時代中頃になると、伝統的に大物作りを中心としてきた長野に対し、^{きのせ}黄瀬・^{まき}牧・^{ちやくし}勅旨、あるいは^{こうやま}神山・^{おがわ}小川といった地域で釉薬の小物陶器の量産が始まり、高級品の京焼に対して日常品としての役割を担っていた。そのため、信楽焼の小物は、江戸時代を通じて庶民層の広い需要に支えられて市場を拡大していくことになる。

明治維新後には糸取鍋や耐酸陶器など、近代社会に対応した工業製品が生産された。その後、大正時代以降生産量が増大し、火鉢や^{きしや}汽車土瓶が販売された。戦後は火鉢、植木鉢、外装タイルやたぬきの置物などが生産され、その時々には信楽焼の代名詞として全国的に流通した。また、戦時中には時代の要請に応じて、ストーブやポストのほか、末期には地雷や手榴弾などの陶製代用品が製造されている。これらの信楽焼の近代化と製品群の変化は、明治34（1901）年設立の信楽陶器模範工場（昭和2〈1927〉年に滋賀県窯業試験場に発展）と信楽陶器工業協同組合の主導によるところが大きい。信楽が時代の変化に柔軟に対応できる生産地であることを証明している。

なお、信楽焼で忘れてはならないのは、産業だけではなく、芸術の方面にも発展している点である。昭和50（1975）年に国の伝統的工芸品の指定と伝統工芸士の認定制度のもと、伝統的な技法を維持しつつ、創造性豊かな製品を生み出す土壤が用意されている。また、昭和45（1970）年に開催された日本万国博覧会のシンボルである^{おかもとたろう}岡本太郎の「太陽の塔」に信楽焼が用いられたことは、信楽焼の産地が本格的に芸術に目を向けるきっかけとなった。現在の信楽で取り組まれている様々な催しは、単なる製品販売ではなく、伝統と創造の焼物としての信楽焼を発信する場であり、まさに産業と芸術の二つの側面が互いに調和する、いかにも歴史ある信楽焼らしい展開の仕方といえる。



▲信楽陶器製品置場（大正時代）

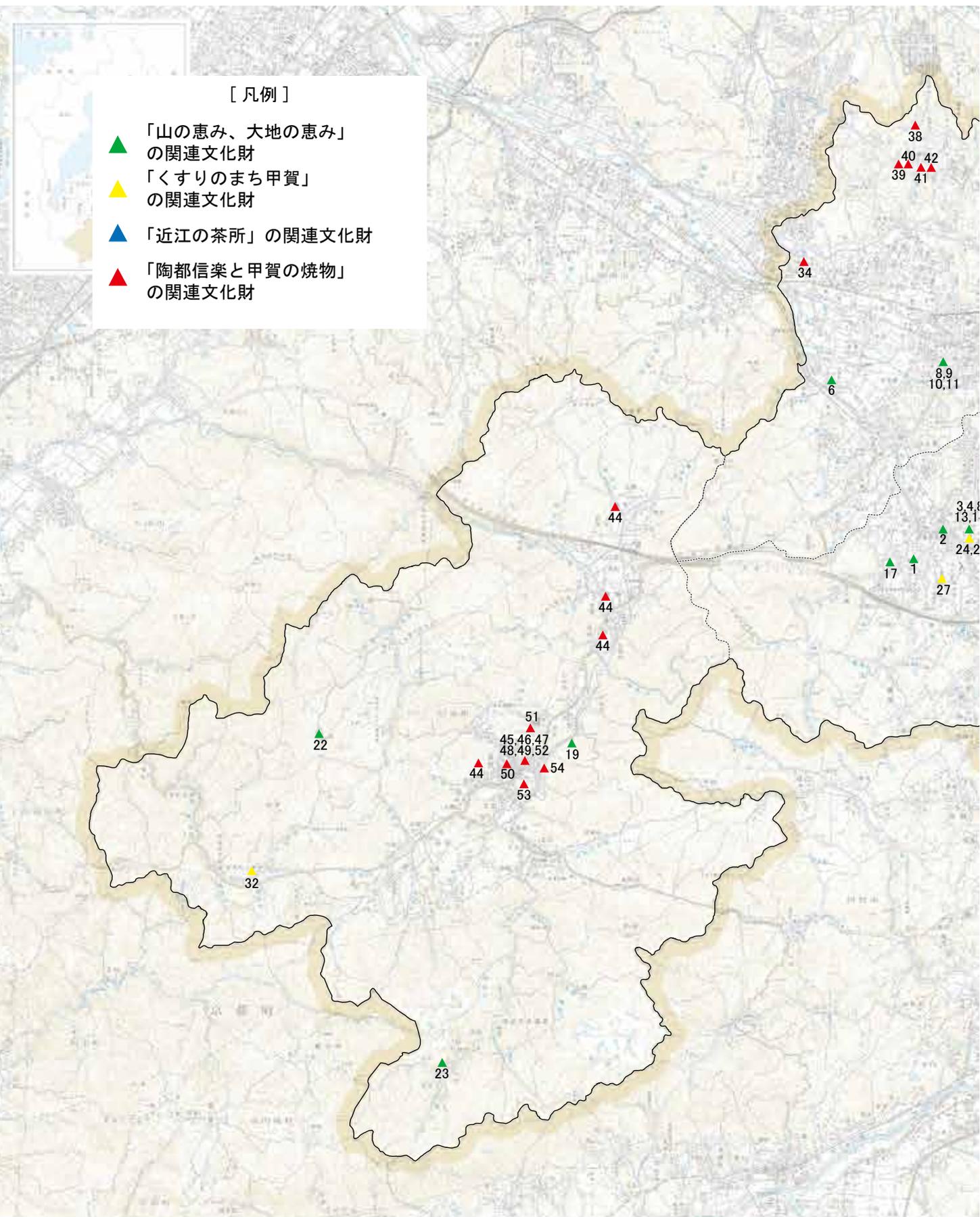


▲窯焚きの様子（昭和40年代）

表 2-11 「甲賀の^{なりわい}生業と暮らし」を構成する主な文化財等

サブ区分	番号	名称	種別	時代	地域	指定等
①山の恵み、大地の恵み	1	畔ノ平遺跡	遺跡	中世	甲南町新治	
	2	福本九左衛門家前挽鋸関係文書	書跡	江戸～大正	甲南町深川	市指定
	3	甲賀の前挽鋸製造用具及び製品(附仕入・販売関係資料等)	有形民俗		甲南町葛木	国指定
	4	山樵用具	有形民俗		甲南町葛木	
	5	木地師資料	有形民俗		土山町鮎河・山女原	
	6	宇川共有文書	書跡	江戸～大正	水口町宇川	市指定
	7	かんぴょう	その他(特産)		市内一円	
	8	かんぴょう製造用具	有形民俗		水口町・甲南町	
	9	水口煙管	有形民俗		水口町水口	
	10	水口細工	有形民俗		水口町水口	
	11	水口細工製作技術	無形		水口町	
	12	かにが坂飴	その他(特産)		土山町南土山	
	13	湿田農耕用具	有形民俗		甲南町葛木	
	14	甲南ふれあいの館	その他(施設)		甲南町葛木	
	15	日野菜漬	その他(特産)		市内一円	
	16	鮎河菜	その他(特産)		土山町鮎河	
	17	杉谷なす	その他(特産)		甲南町	
	18	佐山のもち米	その他(特産)		甲賀町	
	19	玉桂寺コウヤマキ	天然記念物		信楽町勅旨	県指定
	20	油日神社コウヤマキ	天然記念物		甲賀町油日	市指定
	21	日吉神社杉木立	天然記念物		甲賀町神保	市指定
	22	畑シダレザクラ	天然記念物		信楽町畑	市指定
	23	浄願寺菩提樹	天然記念物		信楽町多羅尾	市指定
②くすりのまち甲賀	24	製薬用具	有形民俗		甲賀町・甲南町	
	25	売薬資料	有形民俗		甲賀町・甲南町	
	26	神農社	無形民俗	昭和	甲賀町滝	
	27	甲賀流忍術屋敷	有形民俗	江戸	甲南町竜法師	
	28	くすり学習館	その他(施設)		甲賀町大原中	

サブ区分	番号	名称	種別	時代	地域	指定等
③ 近江の茶所	29	製茶用具	有形民俗		市内一円	
	30	製茶資料	有形民俗		土山町・信楽町	
	31	頓宮大茶園	その他(景観)	昭和	土山町頓宮	
	32	朝宮の茶園	その他(景観)		信楽町朝宮	
	33	茶粥	その他(特産)		信楽町多羅尾・朝宮	
④ 陶都信楽と甲賀の焼物	34	泉窯跡	窯跡	古墳	水口町泉	
	35	大田和窯跡	窯跡	平安	水口町今郷	
	36	今郷シゲ道窯跡	窯跡	平安	水口町今郷	
	37	末田窯跡	窯跡	平安	土山町大野	
	38	春日北窯跡	窯跡	平安	水口町春日	
	39	春日伴城窯跡	窯跡	平安	水口町春日	
	40	春日杭原窯跡	窯跡	平安	水口町春日	
	41	春日山の神窯跡	窯跡	平安	水口町春日	
	42	春日峰道窯跡	窯跡	平安	水口町春日	
	43	長野古絵図	絵画	江戸	信楽町長野	市指定
	44	信楽焼窯跡群	窯跡	室町～昭和	信楽町宮町、黄瀬、牧、長野	県指定
	45	信楽焼(保持者:大西忠左、笹山忠保、大原薫、高橋政男、小林弘幸(勇超)、神崎継春、谷野明夫、奥田英行(英山)、小谷光二)	無形		信楽町柞原ほか	市指定
	46	信楽焼の製造用具及び製品(近世・近代製品・岡本太郎作品・信楽たぬき)	有形民俗 工芸品			
	47	古信楽	工芸品			
	48	信楽焼の製造技術	無形		信楽町	
	49	信楽焼産地の生活文化	無形民俗		信楽町	
	50	信楽焼産地の風景	その他(景観)		信楽町長野	
	51	陶芸の森	その他(施設)		信楽町勅旨	
	52	伝統産業会館	その他(施設)		信楽町長野	
53	信楽火祭り	無形民俗		信楽町長野		
54	陶器市	その他(行事)		信楽町		



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の5万分1地形図を使用した。
(承認番号 令元情使、第 872 号)

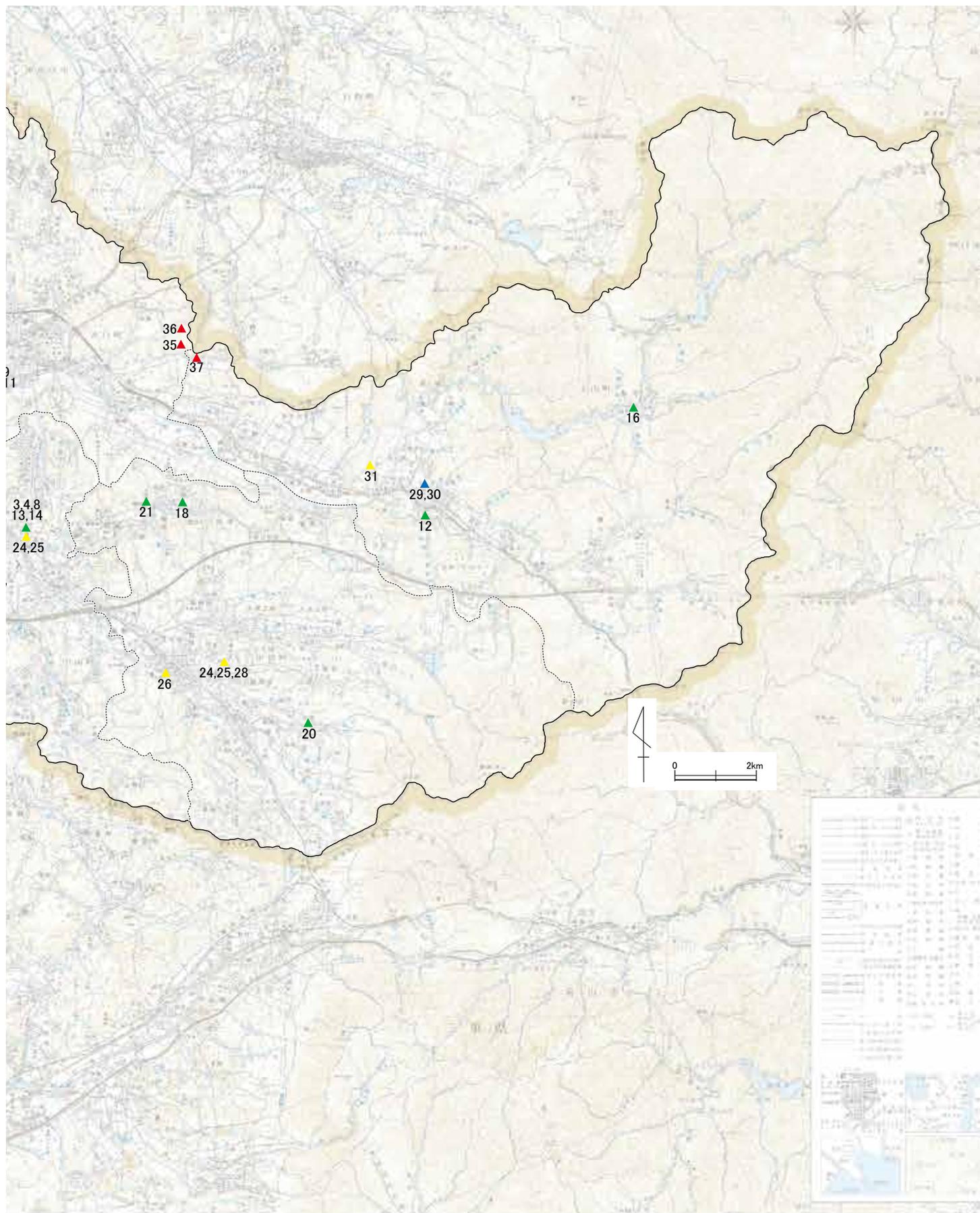


図 2-11 「甲賀の生業と暮らし」を構成する主な文化財の分布

5. 文化財保存活用区域

(1) 文化財保存活用区域の考え方

文化財保存活用区域は、文化財が特定の地区に集中している場合に、その周辺環境を含め当該文化財（群）を核として文化的な空間を創出するための計画区域であり、多様な文化財が集中する区域を設定して保存・活用を図ることで、魅力的な空間の創出につながることを期待される（文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針（文化庁・平成31〈2019〉年3月））。

本市においては、国指定あるいは国指定を目指す史跡や、文化財群が集中している地域であるとともに、甲賀らしい歴史の具体的な物語を展開できるエリアを保存活用区域として設定し、歴史文化を活かした景観まちづくりや観光振興など関連部局と連携しつつ、町並み整備などの事業や調査や普及事業など保存・活用に関わる多様な事業に重点的に取り組むこととする。

(2) 文化財保存活用区域の設定

ア. 文化財保存活用区域の設定

関連文化財群の6つのストーリーと関連性がありつつ、核となる史跡や建造物等の文化財などが集積するエリアで、周辺環境と一体的に整備し、まちづくりや地域振興などに活用していくことが望ましい8カ所を文化財保存活用区域として設定する。

表 2-12 文化財保存活用区域の設定

文化財保存活用区域（地域）	区域の概要
(1) 城と城下町（水口町）	国史跡水口岡山城跡、県史跡水口城跡、城下町を中心としたエリア
(2) 東海道と宿場（水口・土山町）	東海道五十三次の49、50番目の宿場「土山宿」と「水口宿」を中心としたエリア
(3) かくれ里の伝統文化（甲賀町）	油日神社と櫛野寺を中心とする平安時代の仏像や中世の建造物などが集積するエリア
(4) 甲賀武士と中世城館（甲賀・甲南町）	甲賀武士の城館のうち、国史跡甲賀郡中惣遺跡群を中心とするエリア
(5) 修験の霊山と山伏の里（水口・甲南・信楽町）	修験の霊場「飯道山」「庚申山」「岩尾山」を中心とするエリア
(6) 紫香楽宮関連遺跡群地域（信楽町）	国史跡紫香楽宮跡を中心とするエリア
(7) 信楽焼と焼物の里（信楽町）	県史跡信楽焼窯跡群などの窯跡、無形文化財信楽焼保持者、焼物の里の景観などを中心とするエリア
(8) 多羅尾氏関連遺跡（信楽町）	徳川家康の伊賀越え（神君伊賀越え）を助けた多羅尾氏の県史跡小川城跡や市史跡代官陣屋跡などを中心とするエリア

各文化財保存活用区域の現状と課題、保存活用の方向性は次表（表 2-13～表 2-20）のとおりである。

表 2-13 文化財保存活用区域(1) 城と城下町(水口町)

◇エリアの現状	国史跡水口岡山城跡と県史跡水口城跡を中心に織豊期から近世にかけての城と城下町が広がるエリアである。また、水口岡山城の史跡指定範囲と山麓居館及び家臣団屋敷の推定範囲を「水口岡山城遺跡」、古絵図から推定される水口城の範囲を「水口城遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録している。
◆関連文化財群との関係	ストーリー③「道と交通、城下町・宿場町」で挙げた一群に含まれる。
◇エリアの課題	<p>「現状」で示したエリアには、二つの城を中心に織豊期の城下町と近世の城下町、さらには近世東海道の宿場町が重層的に広がる。近世の水口宿は水口岡山城の城下町を基盤として発展したこともあり、両者は複合的に存在している。しかし、現段階ではこの城下町および宿場町の範囲については、周知の埋蔵文化財としても登録されておらず、文化財保護法における規制の対象とはなっていない。</p> <p>今後、城下町と宿場町の一体的な活用を模索するにあたっては、当該範囲の考古学的なデータがなく、江戸時代の絵図と発掘調査での検出遺構との関連性を探ることが難しい。歴史的な情報にもとづいた城下町および宿場町の保存活用を検討する上でも課題となる。</p> <p>また、県史跡水口城跡は現在、本丸が県立水口高校のグラウンドとなっている。模擬櫓の水口城資料館が東出丸に設置されているが、形状や位置が異なるほか、施設の老朽化も課題である。水口城跡の詳細調査も必要であり、課題となっている。</p>
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国史跡水口岡山城跡＋水口岡山城遺跡 2. 県史跡水口城跡＋水口城遺跡
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 史跡の整備と保全 <ol style="list-style-type: none"> ①国史跡水口岡山城跡 <p>国史跡水口岡山城跡については、今後、保存活用計画を策定し、史跡の保存の指針を示すとともに、活用の方向性を検討する。その上で、史跡整備の手法について検討していく。史跡整備には森林伐採や草刈りによる城郭遺構の顕在化も含まれるものとする。</p> ②県史跡水口城跡 <p>県史跡水口城跡については、詳細調査を実施し、史跡の現状を把握する。その上で、保存と活用の方向性を検討していく。</p> 2. 史跡の活用 <p>史跡の保全を前提とした適切な史跡整備により、案内板や説明板を設置し、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。その上で、見学者数の増加を目指して、史跡探訪会の開催、案内パンフレットの作成、インターネットなどを活用した情報発信を行うほか、定期的なシンポジウムや講演会、歴史講座、企画展示などを開催し、史跡の価値に対する理解が進むように努めていく。なお、企画展示の実施施設としては水口歴史民俗資料館および水口城資料館を最大限に活用していく。</p>
◆活用の拠点施設	<ol style="list-style-type: none"> 1. 水口歴史民俗資料館 2. 水口城資料館

表 2-14 文化財保存活用区域（2） 東海道と宿場（水口・土山町）

◇エリアの現状	<p>近世の東海道の設けられた土山宿・水口宿を中心に、鈴鹿峠から横田渡までの街道筋に連なるエリアである。土山宿では土山宿本陣跡、国宝大般若経が伝わる常明寺など、水口宿では三筋の町並みや水口曳山祭の曳山山蔵が各町にあり、風情ある町並みを残している。街道筋には史跡横田渡があるほか、一里塚跡や松並木など広範囲に文化財が点在している。</p>
◆関連文化財群との関係	<p>ストーリー③「道と交通、城下町・宿場町」を中心に、④「甲賀の豊かな宗教文化」⑤「甲賀の祈りと祭り」などにわたって含まれている。</p>
◇エリアの課題	<p>「現状」で示したエリアは、甲賀市土山町・水口町地域を東西に横断する旧東海道周辺を範囲とする。街道の雰囲気が残る町並みを散策する観光客が多く訪れる地域である。</p> <p>合併前から、土山町域では、道路のカラー舗装や案内看板、屋号の石柱や看板の設置などの町並み保存事業を実施しており、本市景観計画でも C. 東海土山宿景観形成地区と F. 土山地域東海道まちなみ計画形成地区として景観形成地区に位置づけ景観の保全を図ってきた。一方水口町域では、高札場の整備、説明看板やモニュメントの設置など各町でそれぞれ整備・保存を行ってきた。今後は各宿場の雰囲気を活かしつつも、市域で統一した保存整備が課題となっている。</p> <p>街道の町並みを構成する伝統的家屋について、近年空き家となったり、取り壊して近代的な建物となったりしている。伝統的家屋は、街道の歴史的景観を保つために必要であることから、調査や保存とその活用についての対策が大きな課題となっている。</p>
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 東海土山宿本陣跡、常明寺 2. 水口曳山祭、旧東海道横田渡跡、旧水口図書館
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化財の整備と保存 <ol style="list-style-type: none"> ①伝統的家屋の調査・保存 <p>町並みを構成する伝統的家屋の中で保存が必要であるものの調査を行い、市景観計画を踏まえた保存を図る。また空き家である場合は、地域や観光の拠点施設、店舗としての活用を検討する。</p> ②街道周辺の文化財整備 <p>東海道周辺には多くの文化財が所在し、宿場町や街道筋ならではの暮らしや人々の交流の歴史を今に伝え、地域で大切に守られてきた。街道散策で立ち寄れるこうした地域の文化財を調査し整備して、まちづくりに活かすとともに、観光産業へつないでいく。</p> 2. 文化財の活用 <p>町並み保全を配慮した、案内板や説明板を設置し、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。また、見学者が持ち歩ける案内パンフレットの作成、インターネットなどを活用した情報発信を行うほか、拠点施設を活用した企画展示などを開催し、見学者の満足度が高まるように努める。また、ボランティアガイドの育成を促進し、地域の魅力発信につなげる。</p>
◆活用の拠点施設	<ol style="list-style-type: none"> 1. 水口歴史民俗資料館、ひと・まち街道交流館（水口地域） 2. 土山歴史民俗資料館、東海道伝馬館、道の駅あいの土山（土山地域）

表 2-15 文化財保存活用区域(3) かくれ里の伝統文化(甲賀町)

◇エリアの現状	甲賀町油日の油日神社と櫛野の櫛野寺を中心に平安時代の仏像や中世の建造物、近世からの伝統行事が受け継がれるエリアである。白洲正子の「かくれ里」の中で、伝来の古面や仏像、寺社のたたずまい、それをとりまく土地の風光などが紹介され、観光客も多く訪れる。
◆関連文化財群との関係	ストーリー④「甲賀の豊かな宗教文化」で挙げた一群、⑤「甲賀の祈りと祭り」に含まれている。
◇エリアの課題	<p>「現状」で示したエリアは、建造物・彫刻・美術工芸品・無形民俗文化財などの重要文化財を含む多くの指定文化財が所在し、こうした文化財を育んできた里山の伝統的な空間を今も感じることができる。</p> <p>拠点の一つである油日神社は多くの文化財を伝えている。重要文化財である建造物については早急に耐震診断の実施が求められる。市指定の絵画については経年劣化のため保存修理が必要であり、各種別を越えた文化財の総合的な調査を実施し、文化財の保存と活用を行いたい。</p> <p>もう一つの拠点である櫛野寺は、古代彫刻の宝庫とされ、平成28(2016)年度には、収蔵庫の改修工事も完了し、文化財の保存状況も改善されている。多くの見学者が訪れる寺院であるが、鉄道駅からの利便性はあまり良くない状況である。油日神社を含めて見学コースの整備が今後必要と考えられる。</p>
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 油日神社本殿、拝殿、楼門及び回廊 2. 櫛野寺木造十一面観音坐像他仏像群
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化財の整備と保全 <ol style="list-style-type: none"> ①油日神社 <p>耐震診断の実施と防災に対応する整備の実施。文化財の総合調査の実施。</p> 2. 文化財の活用 <p>油日神社と櫛野寺を巡る見学コースを整備する。また、拠点を中心に周辺部に広がる文化財についても紹介するパンフレットなどを作成し情報発信を行う。春や秋の観光シーズンには、臨時バスを出すなど交通関係部局との調整を行う。</p> <p>油日神社境内では近年、映画やドラマのロケ地としての利用がなされており、映像などでの情報発信が期待される。</p>
◆活用の拠点施設	<ol style="list-style-type: none"> 1. 甲賀歴史民俗資料館、油日神社 2. 櫛野寺

表 2-16 文化財保存活用区域(4) 甲賀武士と中世城館(甲賀・甲南町)

◇エリアの現状	市域では180カ所の中世城館遺構を確認しており、市内各地に中世城館が点在する。その中で、特に密集して城が築かれたのが、国史跡甲賀郡中惣遺跡群を含む甲南町から甲賀町に広がるエリアである。近年、日本遺産に忍者が認定され、甲賀武士の活躍について注目されており、独特の構造をもつ甲賀の城についても関心が集まっている。
◆関連文化財群との関係	ストーリー②「甲賀武士の活躍」で挙げた一群に含まれる。
◇エリアの課題	「現状」で示したエリアには、多くの城跡が濃密に分布するが、現状では城跡の詳細を把握できる例が少なく、市域の城跡の全体像をつかむためにも詳細な調査が必要である。また、ほとんどが個人所有の土地であり、許可なしで立ち入ることはできないため、見学者への対応が課題となっている。 また、日本遺産の構成文化財である新宮神社表門の防災設備の設置が課題となっている。
◆中核となる文化財	1. 国史跡甲賀郡中惣遺跡群
◇保存活用の方向性	1. 史跡の整備と保全 ①中世城館 城跡遺構確認のための測量調査および発掘調査の実施。城跡遺構保全のための森林整備。 ②史料等調査 甲賀武士関係史料の調査を継続的に実施し、多方面からその実態に迫る。 2. 史跡等の活用 史跡の保全を前提とした適切な史跡整備を行い、所有者や地域の協力を得ながら見学可能な城跡には案内板や説明板を設置し、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。また、案内パンフレットの作成、インターネットなどを活用した情報発信を行う。 城跡の活用では、地域が主体となり、地域の活性化につながるような取り組みを協働で検討していく。
◆活用の拠点施設	1. 忍者を核とした観光拠点施設 2. 日本遺産構成文化財



▲忍者イメージ

表 2-17 文化財保存活用区域（5）修験の霊山と山伏の里（水口・甲南・信楽町）

◇エリアの現状	<p>飯道山、庚申山、岩尾山など修験の文化を伝える甲賀の三霊山を中心に、その山麓に点在するかつて山伏が集住した集落が点在するエリアである。飯道山には国指定重要文化財の飯道神社本殿をはじめ、市指定史跡である「飯道神社・飯道山遺跡」が山腹に存在し、飯道寺の遺構が良好に残る。庚申山は真鍮の元祖を祀り、岩尾山も奇岩、巨岩が屹立し、古代の磐坐信仰の名残がみられるなど、三山それぞれに山岳信仰が栄えた特徴を有する。一方、山麓に点在する山伏の集落には全国に配札や売薬に携わった甲賀の山伏たちの遺品が豊富に残り、修験に係る歴史遺産は甲賀の宗教文化の特徴を成している。</p>
◆関連文化財群との関係	<p>ストーリー④「甲賀の豊かな宗教文化」で挙げた一群に含まれる。</p>
◇エリアの課題	<p>近江屈指の修験の霊山であった飯道山には、五十八宇あったと伝えられる飯道寺の坊院の跡が石垣とともに良好に残るほか、山上に至る町石や飯道寺に勤仕した山伏たちの墓石などの石造物が残る。しかし、これらの遺構の分布や性格を明らかにする埋蔵文化財調査は行われていない。一方、飯道寺の末寺は各地に広がっており、本末関係を確認するなどの文献調査も課題である。重要文化財の飯道神社本殿も近年部分修理が行われ、往時の極彩色の社殿が復元され、防災設備の整備が課題となっている。また社殿の床下から発見されたおびただしい数の懸仏（県指定）や、大日堂にあった薬師如来坐像（県指定）などの美術工芸品の活用もこれからの課題である。</p> <p>さらに、山麓の集落には、里山伏たちが全国を廻国し、多賀社や祇園社のお札を配り、また製薬、売薬を行った山伏たちの遺品が多様な尊像とともに残り、これらの実態を明らかにする調査もこれからである。</p> <p>山上の修験と山下の里修験に係る総合調査が必要といえる。</p>
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国指定重要文化財飯道神社本殿＋市史跡飯道神社・飯道山遺跡 2. 県指定木造薬師如来坐像＋県指定飯道神社懸仏 3. 市指定飯道神社石灯籠＋飯道山墓所等石造物 4. 飯道山関係古文書史料 5. 山伏の信仰用具 6. 製薬・売薬用具
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 建造物・史跡の保存と活用 <ol style="list-style-type: none"> ①国指定重要文化財飯道神社本殿 <p>飯道神社本殿は昭和 53 年に解体修理を、平成 28 年に屋根の葺き替えと側壁などの彩色を施す部分修理を実施した。今後も経年劣化に伴う部分修理を必要に応じて行いつつ、修験の霊山に建つ極彩色の国指定建造物として、山伏の行場などや飯道寺関係の史跡とともに観光活用を図る。また、効果的な防災施設整備について検討していく。</p> ②市史跡飯道神社・飯道山遺跡 <p>中近世に栄えた飯道寺の遺跡が石累とともに良好に残り、また豊臣秀吉の高野山攻めを救った木食応其上人の墓所や、飯道寺住持の墓所、五輪塔などの石造物が遺存する。しかし、これらの遺構の分布を把握</p>

◇保存活用の方向性	<p>する測量調査や発掘調査を必要に応じて実施しながら、石造物とともに適切な保存措置を図る。また、飯道山はハイキングなどの登山者も多く、見学コースの整備により飯道神社本殿とともに観光活用を図る。</p> <p>2. 歴史資料、民俗資料の保存と活用</p> <p>①飯道寺関係の歴史資料と信仰用具、製菓、売薬用具等の民俗資料 飯道寺の末寺は各地に及び、関係する史料が各地から発見されている。今後それらの実態を把握する調査が必要である。さらに、山麓の集落に保存されている山伏の信仰用具や、製菓、売薬用具についても収集し、適切に保存するとともに、本市の宗教文化の特徴として、展示などに活用する。</p>
◆活用の拠点施設	<p>1. くすり学習館</p> <p>2. 甲南ふれあいの館</p>



▲飯道山山頂

表 2-18 文化財保存活用区域（6）紫香楽宮関連遺跡群地域（信楽町）

◇エリアの現状	<p>国史跡紫香楽宮跡を構成する史跡5地区（「宮町地区」「新宮神社地区」「鍛冶屋敷地区」「北黄瀬地区」「内裏野地区」）と9遺跡（宮町遺跡、新宮神社遺跡、鍛冶屋敷遺跡、北黄瀬遺跡、東山遺跡、東出遺跡、紫香楽宮東遺跡、雲井遺跡、甲賀寺跡）からなる古代の都城エリアである。地域区分的には雲井地域（宮町区、黄瀬区、牧区）にあたる。それぞれの遺跡の性格については、平成26（2014）年に策定した『史跡紫香楽宮跡整備活用実施計画書』に詳しいが、主に5つのエリアに分かれる。すなわち、宮町遺跡を中心とした〔宮殿跡〕、甲賀寺跡を中心とした〔寺院跡〕、鍛冶屋敷遺跡を中心とした〔鑄銅所跡〕、新宮神社遺跡を中心とした〔大路跡〕、北黄瀬遺跡を中心とした〔大井戸跡〕である。史跡範囲はそれぞれの遺跡範囲のうち、調査によって性格が明らかとなった範囲を指定しており、必ずしも遺跡範囲と同一ではない。</p>
◆関連文化財群との関係	<p>ストーリー①「古代王権と甲賀」で挙げた一群に含まれる。</p>
◇エリアの課題	<p>「現状」で示した範囲には、「都」を構成する特徴ある遺跡が広がっているが、その全容については、まだ明らかでない部分も多い。東山遺跡は〔宮殿跡〕と〔寺院跡〕の中間地点に位置するが、近年発掘調査によって大型の掘立柱建物跡が発見されたことから、史跡の追加指定も視野にいった取り扱いを検討している。現在、史跡範囲だけで263,322.75㎡と広大な面積を有し、今後、周辺地域での発掘調査の進展によって史跡範囲がさらに広がる可能性が考えられる。整備を行うにあたり必要最低限の公有地化と公園整備が必要となるが、史跡整備の中心となる〔宮殿跡〕のほとんどが民有地であることから、今後、維持・営繕の費用対効果も視野に入れた計画的な公有地化が必要となる。</p> <p>また、紫香楽宮跡を紹介するための展示施設〔紫香楽宮跡関連遺跡発掘調査事務所〕があるが、建築後10数年を経過し、建物の耐用年数が過ぎており、早急な対応が必要である。</p> <p>当該エリアは新名神高速道路信楽ICから近い位置にあるため、誘客効果は比較的高いと考えられるが、その反面、史跡範囲外の周辺地域における開発と史跡景観の調和をはかるうえで課題が残る。</p> <p>活用にあたっては、紫香楽宮跡を有する雲井地域は市域でも人口減少が懸念される地域であることから、今後、史跡を保存活用する担い手を育成することが急務である。今後各地域での意見集約をしつつ、効果的な地域活性化策を探る必要がある。</p> <p>甲賀市総合計画において、史跡紫香楽宮跡は、都城遺跡の変遷過程を伝える日本文化を象徴するものとして特別史跡への昇格を目指すとしており、聖武天皇が造営した他の都城遺跡〔恭仁宮、難波宮〕とも連携し、取り組む必要がある。</p>

◆中核となる文化財	国史跡紫香楽宮跡＋周辺遺跡
◇保存活用の方向性	<p>1. 史跡の整備と保全</p> <p>国史跡紫香楽宮跡については、平成23(2011)年に『保存管理計画書』を策定しており、その取り扱い基準に従って保全を図る。史跡の保存団体としては、大正15(1926)年の史跡指定とほぼ同時期に設立された紫香楽宮跡保存会があり、同団体は甲賀寺跡周辺の草刈・園路修繕等を担っている。ただし、史跡範囲の拡大に伴い、住民主体の保全団体のあり方について再検討する必要がある。整備については平成26(2014)年に策定した『史跡紫香楽宮跡整備活用実施計画書』をベースに、具体的方策を検討していく。</p> <p>整備と保全の基本理念として、紫香楽宮跡関連遺跡群は、雲井地域の営農環境の下で、周辺の自然環境と共に守られてきたという経緯があることから、地域の生活や文化を持続的に維持・発展させつつ、地域の誇りや郷土を愛する気持ちを醸成する取り組みを重視している。そのためには、住民活動に対する行政の積極的支援や情報提供、地域文化の育成に力を入れる必要がある。史跡を永続的に保存し、次の世代に確実に継承していくためには、学校教育との連携にも積極的に取り組む必要がある。</p> <p>2. 史跡の活用</p> <p>ハードとソフトの両面での活用が考えられる。ハード面では、史跡の保全を前提としたサイン整備により、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。QRコードを既存案内板に追加するなどの情報発信も考えられる。また、老朽化した既存施設に代わる情報発信拠点整備が急務である。ソフト面では、史跡探訪会の開催、インターネットなどを活用した情報発信を行うほか、定期的なシンポジウムや講演会、歴史講座などを開催し、史跡の価値に対する理解が進むように努める。VRを活用した新しい遺跡整備手法も有効である。今後、地域住民の意向を十分に鑑みながら、整備・活用のあり方について具体的に検討していく。</p> <p>紫香楽宮跡については、立命館大学と甲賀市が締結した連携・協力に関する包括協定に基づき、産学官民連携による地域活性のあり方が模索されている。具体的には地域でワークショップを開催し、雲井地域のC I (Community Identity) 戦略を策定した上で、地域活性化の取り組みを進める。現在、新しい地域特産品の創出や古代衣装の作成など各種取り組みが住民主体で展開されている。今後、これらの取り組みを活かしつつ、紫香楽宮跡関連遺跡群を核とした持続可能な地域づくりを進める。</p> <p>また、飯道山の麓という立地を活かした飯道山観光ルート上の位置づけも行いながら、観光の視点に立った整備についても取り組む。</p>
◆活用の拠点施設	1. 紫香楽宮関連遺跡群調査事務所展示室

表 2-19 文化財保存活用区域（7）信楽焼と焼物の里（信楽町）

◇エリアの現状	信楽は鎌倉時代から続く焼物の産地であり、その伝統は現代にも受け継がれている。町内には、県史跡信楽焼窯跡群のほか、200 基余の窯跡があり、その一部を周知の埋蔵文化財包蔵地に登録している。また、信楽では現在も日常生活を営む住居に作業場と窯が接して所在する景観がみられる。町には窯元や工房のほか、問屋や商店街が広がり、その生業を地域全体で支えている。市では無形文化財として信楽焼を指定し、保持者を認定している。
◆関連文化財群との関係	ストーリー⑥「甲賀の生業と暮らし」で挙げた一群に含まれる。
◇エリアの課題	「現状」で示したエリアには、窯跡群のほか、現在も焼物にかかわる生業が営まれている。しかし、現段階では景観を含め、文化財保護法における規制の対象とはなっていない。 県史跡以外の窯跡群のうち、近現代の登窯跡群については、周知の埋蔵文化財包蔵地ではない。今後、民俗文化財としての信楽焼の一体的な保存活用を検討する上で課題となることが予想される。また、市指定無形文化財信楽焼保持者の認定、信楽焼作品の調査・保存・指定についても今後の課題となっている。
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 県史跡信楽焼窯跡群 2. 市無形文化財信楽焼 3. 信楽焼の製造用具及び製品 4. 信楽焼の民俗技術
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 信楽焼の生業に関わる文化財整備 信楽焼の産地には、窯業にかかわる文化を今に伝え、地域で営まれてきた。 窯元散策で立ち寄れるこうした地域の文化財を調査し整備して、まちづくりに活かすとともに観光産業へつないでいく。 2. 文化財等の保存・活用 <ol style="list-style-type: none"> ①史跡の活用 史跡の保全を前提とした適切な史跡整備により、案内板や説明板を設置し、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。その上で、見学者数の増加を目指して、史跡探訪会の開催、案内パンフレットの作成、インターネットを活用した情報発信を行うほか、歴史講座、企画展示などを開催し、史跡の価値に対する理解が進むように努める。なお、企画展示の実施施設としては信楽伝統産業会館を最大限に活用する。 ②無形文化財信楽焼保持者の認定について 市無形文化財信楽焼保持者については、今後、認定基準を検討したうえで、認定の方向性を検討する。 ③民俗文化財としての信楽焼の保全・公開について 地域住民により行われている窯元散策をはじめとした信楽焼に関する情報発信や文化財の公開を支援するとともに、地域で継承されている文化財の調査・記録化を推進し、その上で、保存と活用の方向性を検討していく。

◇保存活用の方向性	<p>④信楽焼の技術継承について 信楽焼の技術継承（後継者育成）は、商工・観光分野と連携し、技術の調査・記録化を推進するとともに、民俗技術としての保護及び後継者育成の方向性を検討する。</p> <p>⑤信楽焼作品の保存・活用について 信楽焼作品についての調査を進め、工芸品や民俗文化財としての資料を収集・保管また文化財指定を行い、信楽焼を特徴づける資料の保存を進めるとともに、拠点施設で展示し、信楽焼の歴史や技法などを作品から紹介するなど活用していく。</p>
◆活用の拠点施設	<ol style="list-style-type: none">1. 信楽伝統産業会館2. 滋賀県立陶芸の森

表 2-20 文化財保存活用区域（8）多羅尾氏関連遺跡（信楽町）

◇エリアの現状	<p>多羅尾氏は、信楽町東南に位置する多羅尾を本拠とした有力土豪で、室町時代以来、代々近衛家領信楽荘の荘官を務めたとされ、江戸時代には旗本・信楽代官家として二つの家が存続した。多羅尾氏関連遺跡としては、市史跡多羅尾代官陣屋跡、県史跡小川城跡が点在する信楽町多羅尾から小川にかけての地域をエリアとする。多羅尾代官陣屋跡では地元保存会による一般公開やイベントが開催され、小川城も地元での環境整備などの取り組みが行われている。</p>
◆関連文化財群との関係	<p>ストーリー②「甲賀武士の活躍」で挙げた一群に含まれる。</p>
◇エリアの課題	<p>多羅尾代官陣屋跡を含む4か所の多羅尾氏関連城砦群については、3か所の測量調査を終え、1か所を除く遺跡が県または市史跡となっているが、今後も詳細調査の実施が必要である。</p> <p>多羅尾代官陣屋跡では、地元保存会と甲賀市が協力して環境整備を進めており、現在では春と秋に一般公開を行っている。今後の課題としては、史跡地にある所有者住居の解体が検討されており、所有者や地元との協議が必要となっている。また、保存会と甲賀市の協定期間が令和2（2020）年6月で満了を迎え、市の環境整備は完了するため、地元における活用推進の取り組みが必要となる。</p> <p>また、多羅尾・小川地域見学のための公共交通機関の利用についても、利便性向上に向け、関係部局との協議が重要となっている。</p>
◆中核となる文化財	<ol style="list-style-type: none"> 1. 市史跡多羅尾代官陣屋跡 2. 県史跡小川城跡、市史跡小川中世城塞群及び関連寺院遺跡（中ノ城、西ノ城、大光寺）
◇保存活用の方向性	<ol style="list-style-type: none"> 1. 史跡の整備と調査 <p>多羅尾代官陣屋跡では、遺跡の詳細調査、多羅尾家関係史料等の文献調査を含めた総合調査を行う。また、下段敷地花壇の維持管理、草刈りや不要木の間伐・剪定などの環境整備を継続的に行う。なお、昭和期建築の家屋や遺構保存上の支障木の取り扱いについては所有者との調整を図り、市指定史跡の適切な保存管理を行う。</p> <p>小川城跡、小川中世城塞群及び関連寺院遺跡では草刈り等環境整備を実施する。</p> 2. 史跡の活用 <p>史跡の保全を前提とした適切な史跡整備により、案内板や説明板を設置し、一般の見学者が訪問しやすい環境を整える。また、見学者数の増加を目指して、インターネットなどを活用した情報発信を行うほか、保存会による収益事業の取組も検討していく。</p>
◆活用の拠点施設	<ol style="list-style-type: none"> 1. 多羅尾代官陣屋跡 2. 小川城